
モンスターハンター ~ 集いし者達と白き龍神 ~

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～集いし者達と白き龍神～

【Nコード】

N3041Y

【作者名】

流星

【あらすじ】

ドンドルマ、シュレイド地方を騒がせた狂化竜事件。伝説に語られた黒龍が降臨し、討伐され、新たな英雄が誕生した。彼らはそれぞれ別の道を歩み、各地へと散って行った。同時に暗い噂が広まり始めたあの日から数年。

舞台は東方へと移され、新たな物語が紡がれる。

一度は幕を閉じた彼女たちのゲームはどのような流れを生み出すのだろうか。

モンスターハンター3の要素が追加されますが、同時に相変わらず

オリジナル要素が強い作品です。

火竜の双子（前書き）

お久しぶりです。

いよいよ続編がこれから始まります。

予告通り東方……モンハン3の舞台となった世界が基本となります。

更新はゆっくり（不定期）になるかもしれませんがなのであらかじめご容赦くださいませ。

では第一話、どうぞ。

火竜の双子

乾いた大地に強い日差しが差し込む砂漠。広々とした砂の大地、点々と存在する隆起した岩やその日差しを遮る岩山。食料となるものはほとんどなく、容易に立ち入ったものはその太陽の光に焼かれて水分と共に体力を奪っていく過酷な環境。

そんな砂漠に二つの人影があつた。

一人は高く聳える岩の陰に身をひそめ、一人は離れた所にある岩の背後に回っている。その岩は中心部分が存在せず、まるで自然の門のような形になっている。一体どういう事があつてこのようなオブリエとなつたのか不明だが、岩の下に入り込めば日差しを避ける事が出来る。

そして二人の服装はこの砂漠を超えるという旅人の格好ではない。それはまさに戦う者の格好だ。

一人は紫色の長髪を赤いリボンで結んでツインテールにしており、気の強そうな碧眼をした少女。黒を基準とした動きやすさを考慮され、それでいて腹が綱によって露出した装備をしている。

背中には同じく黒を基準とした長刀を背負っており、右手は柄を握りしめていつでも抜ける状態にある。

もう一人は岩から少しだけ顔を出している少女だ。先ほどの少女とよく似た顔つきをし、紫色のロングヘアをそのまま流している。同じく長く伸びているもみあげが頭を守る防具から顔を出しており、左側にはお揃いらしい赤いリボンが巻かれていた。

彼女の装備は金属部分以外は褐色に染まったものであり、その出で立ちはまるで騎士を思わせるものだ。左手には白い盾を構え、右手には金属の銃槍に白い毛をあしらった武器を構えている。

その少しやる気のなさを感じさせるような半目の碧眼はじつとあ

る一点を見据えている。

向こうにいる彼女も同じように一点を見据えている事だろう。
それが今回の獲物。

二人が見据える先には少し小高い丘のようになっていた。砂の大地。そこには二匹のモンスターが頭をぶつけ合っていた。ねずみ色の体をし、扇状の襟飾りを持つ四足の竜。お互いに相手に向かって突進し、強固な頭をぶつけ合ってどちらが強いかを示しているのだ。

ぶつかり、離れ、そしてまたぶつかり合う。

リノプロスと呼ばれる草食竜だ。砂漠や砂原という乾燥地帯に主に生息し、硬い甲殻を持つ事で知られている。

お互い頭突きし合っている彼らを見つめているが、二人の狙いはあの二匹ではない。

額に浮かぶ汗をハンカチで軽く拭い、ポーチから水筒を取り出して水分補給をする事数十分。ついに状況が動いた。

「……………来た」

ぼつりと眩きながらすうつと目を細める。

それは小さな変化だった。ぶつかり合っているリノプロス達の奥、砂の丘の下からゆらりと砂煙が小さくのぼっているのだ。それがゆつくりとあの二匹へと近づいていく。

だが二匹はお互いしか見えておらず、しかも音を極力立てていないためにその砂煙の接近にまったく気づいていない。

やがて砂煙は二匹の数メートル付近まで接近し、再び頭をぶつけ合ったその瞬間にそれが現れる。

茶色い甲殻を持つ二頭の蛇が同時に砂の中から現れ、リノプロス達の背後から口を開いて喰らいつき、最後にもう一頭の蛇が真ん中から牙を剥いて現れ、二匹の頭に喰らいついてしまった。

悲鳴を上げる間もなく背後、頭部から蛇に喰らいつかれたリノプロス達は悲鳴を上げる間もなくその蛇に捕食されてしまった。硬い

甲殻などものともせず、その下にある肉まで喰らいつくその蛇はリノプロスの体を引き千切り、それぞれの糧として食事が開始された。甲殻を砕く音、肉が咀嚼される音、血が噴き出す音と響かせながら、一気にリノプロスの姿が蛇の口内へと消えていく。よく見れば蛇の首は一つへと集まり、少しだけ砂の上へと覗かせている体に繋がっていた。

つまりあれは別々の蛇ではなく三つの頭を持つ一つの個体という事になる。

ヒュドラ。

蛇竜種、ヒュドラ族に分類される多頭蛇竜種の代表格の竜種である。

三つの頭はそれぞれ意志を持ち、それぞれ独立して動く事が可能だ。それを生かして三方向を見る事が出来、およそ死角というものを持たない存在だ。また二つの頭が眠っていても、一つの頭が起きて辺りを警戒する事も可能であり、それが奇襲を封じるため容易に不意を突く事が出来ない。

主に砂漠や峡谷という乾燥地帯に生息し、深い山に身を潜める事もある竜であり、砂の中や洞窟などから得物を狙い、三つの首による奇襲や毒霧で獲物をしとめる事で捕食している。

そして今、三つの頭は食事に夢中になっている。一つの体を共有してはいるが、それぞれの意志は食事に対する渴望があるようだ。久しぶりの食事なのだろうか、珍しくリノプロスを食べる事に意識を向けている。

これは好機か。

そう感じた一人が岩からゆっくりと移動を開始する。

音を立てずに静かにヒュドラの背後へと回り込むように低姿勢で歩き、右手は相変わらず背中にある長刀の柄にある。その様子を見守りつつもう一人はポーチから黄色い液体が満たされた瓶を取り出し、蓋を開けて中身を一気に飲み干していく。

「……ふう」

空き瓶をポーチに戻してもう一度ヒュドラへと視線を向ける。その時には既に彼女は奴の背後を取り、着実に距離を縮めて斬りかかるタイミングを窺っていた。

やがて彼女は足に力を籠め、背中から褐色の翼を生やして一気に広げ、砂を蹴りながら低姿勢のまま飛び上がる。数度翼を羽ばたかせて高度を得ると、すぐに翼を畳んでヒュドラへと急接近しつつ長刀を抜いて背後から背中を一文字に斬り伏せる。

「ジャーーツ!？」

食事中に乱入してきた敵に驚き、一つの頭が悲鳴を上げ、一つの頭はすぐに背後を振り返って敵を確認する。残りの一つは敵を確認しつつ辺りを警戒し始めた。

だが少女はヒュドラの側面に降り立ちながら手にする長刀、ヒドウンサーベルを構えつつ畳んだ翼をほぐすように何度か羽ばたかせてにやりと不敵に笑う。

そんな彼女の背後の砂が舞い上がり、茶色の鱗に覆われた尻尾が現れ、彼女を叩き潰そうと振るわれる。だがそれを察知して横に跳び、下段に構えなおしたヒドウンサーベルでヒュドラの胸を斬り上げる。

そんな彼女へと一つの首が噛みつきにかかるもその動きを見切っている彼女に掠りもしない。翼を羽ばたかせて空中を移動し、向かってきた首を斬りながら彼女はもう一人の少女がいる方へと首が向かないようにしていた。

それを察知したもう一人の少女は岩から飛び出し、ヒドウンサーベルを振るう少女と同じ褐色の翼を広げてヒュドラの背後から一気に接近してくる。

彼女の気配に気づいたのだろうか、右の頭がびくりと反応して振

り返る。そんな奴へと彼女は手にした白いガンランスを突き出し、その額を槍が貫く。続けて柄にある引き金を引けば、銃口から爆発が起きて頭を焼かんとする。

「ジュルアツ!？」

「さてさて、行きますか」

少し気の抜けるような声で呟きながらそのガンランス、ヘルステイング改を振るって焼いた部分を斬る。抵抗するように首を振るも、彼女は落ち着いて一度距離を取り、前に進みつつまたヘルステイング改を突き出し、だが中心の頭が彼女へと喰らいつこうとしたため、轉身しながら盾を構えて防御する。

「シャアツ!」

ガチツ、と音を立てて盾と頭がぶつかり合うが、どういうわけかその盾はぶれずに噛みつきから頭突きへと切り替わった頭の攻撃を受け止めている。

利き腕ではない手で縦を構えているにもかかわらずにその力に抗う。少女の華奢な左腕とは思えないその力、背中に生える褐色の翼……人間ではないことは明らかだ。

「はっ!」

少し引いて顎を穿つように盾を振るい、あらかじめ引き絞っていた引き金を離しながらヘルステイング改の切っ先を顔に向けてやれば、溜めこまれたエネルギーが解放されて通常以上の爆発がヒュドラへと襲い掛かる。

しかしヒュドラは三つの頭を持つ竜だ。

一つの頭が怯んだとしても、別の頭が反撃を仕掛けてくる。

最初に仕掛けた右の頭が彼女へと噛みつきに来るが、それに気づいて背後へと跳んで回避し、回り込むように旋回する。

その間にもう一人が左の頭へと何度も斬りかかってダメージを与えていた。何とか喰らいつこうとしているようだが、彼女の空中移動が速いために捉える事が出来ない。

後退、旋回、クイツクターン……翼を巧みに使い、見事な移動を繰り返してヒュドラを翻弄するように飛び、隙あらばヒドウンサーベルで斬りつける……見事なヒット&アウェイの戦法だ。

「シュルルル……シャッ！」

このままでは埒があかないと判断したのだろうか、その左の頭は一度退くように砂へと向かって頭を沈めていく。それに続くように他の頭、それに繋がった体と続き、砂煙を巻き上げながらその姿が完全に地中に消える。

逃げたわけではない。

気配はまだ地中にあり、この場から離れる様子はない。宙に停滞し、ヒュドラの出方を窺う様子だ。

「感じる？」

「おー、もちろんですよ。あれほどの気配、そう易々と逃がしませんよ」

「ま、そうね。……む？」

二人の背後からヒュドラの一つの頭が現れ、二人へと噛みつきにかかると動きに気づいていた二人は難なく回避。だがもう一頭が逃げた一人の前へと現れ、今度は噛みつくのではなく毒霧を吐き出してきた。

「ちっ」

人間ではないにしろ、毒霧を吸い込めば倒れ、死に至る事もある。急旋回して毒霧を回避し、回り込みながら横に立てたヒドウンサーベルで顔から首にかけて斬っていく。

しかし続けて出てきた尻尾が彼女を叩き落そうと振るわれる。

「遅いつ！」

ぐるんと体を回転させながら横に飛び、反撃するように一太刀振るって尻尾を切断しようとするが、たった一太刀で切断できる程ヒュドラの尻尾は軟ではない。

向こうではヘルスティング改を振るう彼女の妹がいる。最初に奇襲を仕掛けてきた中心の頭へとヘルスティング改を突き出し、引き金を引いて焼き払う。

反撃に毒霧に加えて口から何らかの液体を吐き出してくるようになったが、彼女はいたって冷静だ。盾を構えずこの液体は回避する事を選択する。

これもまた毒性の強い溶解液であり、浴びれば溶かされるか毒に侵されるかの二択となる。つまり盾で防いでもその盾が溶かされて使い物にならなくなってしまうかねない。

回避は正しい選択だ。

「ふっ、はっ！」

それは堅実な攻め。相手の動きを見切って防御し、隙を見て攻撃する。

確実にダメージを与え、確実に身を守る。基本を高め、それを用いて戦う彼女。重量級であるガンランスをまるで自分の手足のように軽々と振るい、空中移動を繰り返しながら攻める彼女は実に安定感がある。

「シャツ、シャシャ……ッ!？」

その鋭い牙で捉えきれず、毒霧も溶解液も当たらない。逆に少女二人の攻撃は着実に自身の体を傷つけていく。その事にヒュドラ達は戸惑いを覚え始めた。

ならばとヒュドラ達は三つの頭が同時に息を吸いこみ、一斉に毒霧を放出する。一つの頭によるものではなく、三つの頭が同時に吐き出す事でその範囲を広げたのだ。

だが二人は一気に背後に下がる事でその毒霧をやり過ぎす。それだけではない。二人もまた息を吸いこみ始めたのだ。

「ふっ!」

そうして勢いよく吐き出されたものは、火炎だった。二人の口からまるで火炎放射機の炎の如く灼熱の炎がヒュドラへと向かって放たれる。それは毒霧に紛れて移動しようとしたヒュドラを焼くよりも早く、その毒霧に反応して爆発を起こす。

爆発の中悲鳴を上げるヒュドラを見ながら、ヒドウンサーベルを構える少女はまた不敵に笑う。

「なんか、案外あっけなくない?」

「おー、あまり調子に乗らない事ですよ。普通はあの三つの頭だけでなく砂に足を取られそうになるのを気をつける、という要素も含まれるからやり辛いですからね。私達は翼があるから空中戦が出来るからこそ、そのリスクがなくなっているわけなんですから」

「わかってるわよ。ちよつと言ってみただけじゃない」

「それならいいですよ。油断はするな、姉さんや母さんがよく言ってる事ですよ。竜じゃなく猪になって忘れない事ですよ」

「誰が猪じゃこるあ!？」

「え？ 誰って……」

意外そうな表情でじつと姉の顔を見つめる妹。そんな彼女にぶるぶると体を震わせつつ「……一度きつちり話しつけようか？ 妹よ」と呟くも、そんな姉に動じることなく「ははは、これが私だっというのは生まれた時から一緒だからわかりきってることでしょうに、姉よ」と返してしまふ。

敵が今もすぐそこにいるというのに二人の様子はいつも通りだ。リラックスしているだけでなく勝機がもうそこまで掴めるという状態だからこそ出来る芸当か。

「さあさ、もう終わるんですから、そうかつかせずに戦いましょう」

「いや、誰のせいだと思ってるのよ……」

「え？」

「あんただ、あんた！ ……ああ、もう！ 召炎！」

左手から炎が吹き出し、握りしめたヒドウンサーベルの柄を伝って刀身に纏われていく。たちまち黒い刀身は炎に包まれ、そして炎はゆっくりとヒドウンサーベルに吸い込まれ、赤い紋様となる。

それを見た妹はヘルステイング改を構え、ぐっと引き金を絞りながら突撃体勢を取る。

「シャアアアアアアッ！！」

それを迎え撃とうと三つの頭が一斉に牙を剥き、再び毒霧という防壁を築き上げる。だがそんなものは意味のない事だった。

口から火炎を吐き出して毒霧を爆発させてヒュドラを怯ませ、その隙をつくように彼女は数度羽ばたいて高度を高め、一気に急降下するようにヒュドラへと向かっていく。

いつの間にか彼女は赤いオーラを体に包み込ませいる。それは彼

女の周りの温度を高めおり、ヘルスティング改から放たれる冷気をも蒸発させて薄い水蒸気を作り上げている。

それを纏いながら中心の頭へと向かった彼女はその額を貫くようにヘルスティング改を突き出し、溜めこまれているエネルギーを解放させる。

「シャアアアアッ!？」

それはガンランスにとつて最大の一撃、竜撃砲。文字通りヒュドラの頭を吹き飛ばしてしまったその一撃を与えた事で残りの頭が動揺を隠せない。

ガシャン、と音を立ててヘルスティング改の一部の蓋が開いて竜撃砲を撃った後の排熱を始める中、彼女は軽くヘルスティング改を振るってリロードし、怯んでもなお喰らいつきに来る左の頭に合わせ、盾を構える。

続けざまに接近してきた右の頭へと向けてヘルスティング改を向け、引き金を引いて迎え撃つ。

「はっ!」

怯んだ二つの頭を視認した姉は左の頭めがけて一気に急降下していく。その速さは先ほどの妹以上のものであり、十数メートルの距離を一気に縮めていく。しかも炎の力を宿らせたヒドウンサーベルは彼女の気も纏われ、その殺傷力を更に高められていた。

その一撃は今まで以上。

ヒドウンサーベルの切れ味と彼女の気、そして紅蓮の炎の力を宿すその刃は一瞬の内に左の頭を焼き切ってしまった。今まで付けていた傷、気を纏わせた一撃とその内部の肉を焼く炎の力が合わさった結果だ。

宙に舞うその首を横目に、ヒドウンサーベルを構えなおしながら

右の頭を確認すると、妹が盾を叩きつけつつヘルステイング改で攻めているところだった。

盾はなにも敵の攻撃を防ぐだけではない、それは一種の鈍器と成り得る。噛みつきに来るそれを受け止め、振り下ろし、振り上げをして頭を揺さぶり、とどめとばかりにヘルステイング改を突き、突き、振り下ろして切り裂きつつ引き金を引き絞ってエネルギーを溜め、顎下に潜りこみつつヘルステイング改を頭上に突き上げつつ引き金を離し、銃口から盛大に爆発を引き起こした。

しかしそれではヒュドラも瀕死にはなるが命を奪うまでには至らなかった。奴とて竜種的一种だ。顔に多くの傷を負おうが、爆発によつて焼かれようが、それだけで死ぬほど弱い生命力を持つてはいない。

それを終わらせるのがもう一人、ヒドウンサーベルを下段に構えて再び一気に接近し、首を刎ね上げるように振り上げる。

ヘルステイング改によつて甲殻を貫かれ、焼かれたことによつて柔らかくなってしまったその部位を狙った一撃は、再びその頭を刎ね飛ばしてしまうかと思われたが、残念ながらそれは叶わず、首を斬るだけに留められた。

だがその傷から勢いよく血が噴き出し、茶色い甲殻を赤く染めていく。

「ク……シ、シシ……シャ……ッ！」

「さて……楽にさせてあげましょうかね」

致命傷の一撃だろうがまだ生き長らえている。呻き声を漏らしながらも攻撃しようとしているヒュドラをじっと見つめた彼女は、ヒュドラの頭上を取つて勢いよく額めがけてヘルステイング改を叩き落とし、その衝撃によつてギミックが動く。

リロードされている弾薬が一気に動き、引き金を引けば全ての弾薬が放出されてヒュドラの頭を焼きにかかる。傷口を広げるような

一撃にヒュドラはまた怯んでしまい、その隙にヘルステイニング改を横に振って再びギミックを利用して弾薬を装填。

引き金を引き絞りながら爆発で吹き飛ばした部分を狙って槍をねじ込み、中心の頭と同じく頭を吹き飛ばすような溜め砲撃を叩き込む。

「シャ、アア……アア………」

頭を吹き飛ばされ、首からはとめどなく血が流れ、ついに残った頭もまた生命力が尽きてしまう。ゆつくりとその首が砂に向かって倒れていき、鈍い音を立てて体と共に砂へと横たえてしまった。

その死体は体の半身が今もなお砂に沈めたままという形になってしまった。普通の戦いと違い、空中戦を主としたために首が二人を追う事が多かったためだ。半身は後で引き上げる事になるだろう。

何はともあれヒュドラを討伐する事に成功した。

二人は息を吐くとゆつくりと地面に着地する。

だがどういいうわけか姉の表情が少しだけ硬くなっている。対して妹の表情はいつも通り少し気の抜けるようなものだった。

ガシャン、と音を立ててヘルステイニング改を背中に担いだ彼女は軽く首と肩をほぐすように動かし、

「とどめは私でしたね。ということで、奢り決定です」

「くっ……あれが決まっていたら……！」

またしても体をふるふる震わせ、手にしているヒドウンサーベルを軽く振って背中にある鞘に収める。

一体何のことかといえば二人は狩りに行く前に賭け事をしているのだ。多くはとどめを刺した方の願いを敗者が叶えるというもので、今回は両者とも勝てば帰った後の食事を全額奢りという形になっている。

姉の言う通りあの最後の一撃によってヒュドラが倒れていれば彼女の勝ちだったろうが、残念ながら持ち前の生命力によって命を繋いでしまった。そこを妹が決める事になったために彼女が勝つ事になってしまった。おいしいものである。

「さてさて、久しぶりにガンガンいきたい気分ですね」

「……少しは抑えなさいよ？」

「ははは、今ロククラックでは肉フェアをやってましたよね。いい機会ですからじっくりがつつり味わいたいと思ってたのですよ」

「だからこそ抑えろって言うてんのよ！」

「え？ 何を言っているのです？ フェアだからこそガンガンいかなくてどうするんです」

「うがー……ッ！！」

被っている頭の防具を砂に叩きつけてがしがしと髪を掻き回し、敗者は吼えるしか出来ない。そんな彼女をにやにやと笑う妹は本当にいい性格をしている。

「それに瑠璃こそ同じことを考えていたんじゃないんですか？ もしあの一撃が決まって賭けに勝っていれば、私にかなりのものを払わせる腹積もりだったでしょう？」

「ぬ、ぐ……」

「それじゃあ何も文句は言えないでしょう、はっはっは。賭けは賭けですからね、私は瑠璃の金でガンガンいかせてもらいますよ」

「……ちくしょうめ。覚えてなさいよ、茉莉……」

砂に叩きつけた防具を拾い上げ、ぱんぱんと砂を払って被り直し、ポーチから発煙筒を取り出して着火する。クエスト完了を知らせる色の煙が空へと舞い上がり、音を立てて破裂する。

これでギルドのアイルー達に連絡が行くだろう。後はあの死体か

ら出来うる限りの素材を剥ぎ取っていくだけだ。

腰元から剥ぎ取りナイフを取り出した二人は正反対のテンションでヒュドラの死体へと向かっていくのだった。

数分後にやってきたアイルー達が用意したロープをヒュドラの体に巻きつけ、アイルー達の魔法とアイルー達と二人力技でその死体を何とか引き上げ、残った素材を剥ぎ取った後にベースキャンプへと帰還。

用意されている砂上船で二人は一つの街へと戻っていた。

砂塵の大都市ロックラック。

ロックラック地方と呼ばれる大砂漠のオアシスに存在する街であり、多くの人々が集まる場所だ。モンスターを狩る者、ハンターと呼ばれる職種につく者達にとっての拠点として利用される程の大規模な街であり、ここから名を挙げていく者達も少なくない。

一般人も砂漠を渡るために砂上船や飛行船を利用し、東西南北へと移動するための拠点や休憩するための場所として利用している。

昼夜を問わず街は賑わい、活気に満ちている。

そんな街に日も暮れて夕食時になった頃、砂上船に乗った少女二人がロックラックへとやってくる。

多頭蛇竜ヒュドラ討伐クエストを完了させた二人の凱旋だ。

砂上船の港はこんな時間になってもそれなりに賑わいをみせている。二人と同じようにクエストから帰還してきたハンターもいれば、これからクエストを行うためにこの港から旅立っていくハンターもいる。

ここに一般人がいないのは、この港はクエストのために利用される港だからだ。旅の目的に利用される砂上船の港は別の場所に存在している。

ハンターと一般人、これらが混在しないように港は分けられているのだ。

「さ、覚悟は決まりましたか？」

「……はいはい、もうたらふく食えや、妹よ」

「そうさせていただきましょう、姉よ」

クエストを成功させて帰還してきているというのに、二人のテンションは平常とローというものだ。それに気づいたハンターの何人かは二人の様子に気づき、「失敗してきたのか？」と感じるものと、「ああいつもの事か」と思うものに分かれていた。

特に後者の人達は二人の様子に慣れたようで、姉の様子を見て苦笑するものも混じっている。

そう、二人はこの街では一種の有名人になっていた。

あの頃の未熟なハンターだった少女達はもういない。

ここにいるのは成長して腕を上げ、その名を人々の記憶に刻ませる程になっている。

西のハンター達の拠点であるドンドルマを中心とした大事件の際は未熟者であるが故に母親と姉、その他のハンター達と共に戦う事が出来なかった二人。

父は鍛冶屋を営む竜人族。

母は火竜の因子を持つ有翼種の魔族。

そんな二人の間に生まれし双子の娘。

暁・瑠璃・フレアウイング。

暁・茉莉・フレアウイング。

身も心も成長した竜魔族にして有翼種という稀有な種族である二人の少女ハンターの物語はこれより始まる。

肉だらけの夕食

ロツクラックへと戻ってきた瑠璃と茉莉は酒場へと向かい、クエスト成功の旨を伝える。依頼書に受付嬢が完了の判を押し、報酬金と報酬の品を受け取る事でクエストが完了する。

受け取った二つの袋をそれぞれ確認する事にする。瑠璃は袋に収められた金を、茉莉はヒュドラの素材などが入っている袋を。問題ない事を確認した二人は一礼し、酒場を後にした。

この後は食事になる……のではなくその前に向かう場所があった。商店街の一角にあるその露店へと訪れた二人は店の前に掛けられている看板を確認。

ここは交換所と呼ばれる店であり、アイテムやモンスターの素材と店にある別の素材と交換する事が出来る。

その看板には様々な素材が書かれており、多くは竜種の素材を渡す事で素材を得る事が出来るようだった。どうやらここはそれが主なレートになっているらしい。

交換所はここだけではなく、他の商店街にも点々と存在しており、店ごとにレートが違っている。

「いらっしやいませ。トレードいたしますか？」

「ええ。これでトレードを」

茉莉が袋から多頭蛇竜の甲殻をいくつか取り出していく。瑠璃もポーチから剥ぎ取ってきた甲殻を取り出し、店のカウンターへと置いていった。

その数全部で八個。

それを確認した店主は小さく頷き、

「ふむふむ、多頭蛇竜の甲殻八個とマンドラゴラ十六個とトレードですね？」

「はい、お願いします」

店主は「かしこまりました」と一礼した後、後ろに置いてある小箱からマンドラゴラを取り出して二人へと差し出した。その数を確かめ、置かれた甲殻は店主へと引き取られる。

今回ヒュドラのクエストに行ったのはこれがあつたからだ。なかなかマンドラゴラが見つからないため、しょうがないのでこの交換所のリストにあるもので入手しようと試みたのである。

二人で八個ずつ分けてポーチに入れ、交換所を後にする。これで用事は済んだので後は食事の時間だ。

数分かけて飲食店が並ぶ通りへと向かっていき、件のフェアがやっているという店へと入る。ウエイトレスに席へと案内され、御品書きを開けばフェアの影響で安くなっていたりいつもはないメニューがあつたりする。

「さてさて、どれにしますかねー」

「……………」

「これもよさそうですし、これもいいですね……………うん、迷いますねー」

「……………さっさと選びなさいよね」

「え？ こういうのは選ぶのが醍醐味でしょうに。いつも以上にルンルン気分で選べるのがまたいいのですよ」

「……………あたしの金で食えるからだろうに、ちくしょう」

「はっはっは。現実は無情なり、ですよ」

気の抜けるような笑い声をあげて御品書きを見つめていた茉莉は、「うん、これにしましょかね」と呟く。どうやら注文が決まつたようだ。瑠璃も自分が食べる物を選び、店員を呼ぶために手を軽く

挙げる。

それに気づいた店員が来ると、「アプトノスのハンバーグセット。スープはポタージュで」と告げ、茉莉へとさあ、注文しろと言う風に見配せする。

店員も茉莉へと視線を移し、彼女はこほんと咳払いを一つ。そして

「アプトノスの霜降りステーキセット、アプケロスのサイコロステーキ、ポポノタン焼きとモスの味噌汁、ガーグアのから揚げ。セットのスープはコンソメで、ライスは特盛でお願いいたします」

「ちったあ遠慮しろちくしょおおおおおッ！？」

「だから言ったでしょう、現実は無情なり。賭けの敗者から搾り取れるだけ搾り取りますよ、ははは」

「……………悪魔や……………悪魔がここにおる」

燃え尽きたように机に突っ伏する瑠璃の頭をぼんぼんと叩きながら「その悔し涙は明日の勝負の活動力となるでしょう」と囁きかけながら慰めるも、「慰めにもならないわよ……………」とさめざめと泣き崩れ、「どうしてこういう時の賭けつて毎回負けるかなあ……………金が、金がああ……………」とぶつぶつと呟きだした。

瑠璃と茉莉の賭けは二人の実力が安定したところから行われており、それはもう色々なものを賭けてきたものだ。今回のような夕食の奢りだったり、あるいは日用品の奢りだったり、パシリだったり……………実に多岐にわたるが大抵はパシリで済ませている。

瑠璃が勝つ場合は多くはパシリ権を得る時で、奢りが賭けられたときはあまり勝てたためしがない。そして茉莉はと言うと、今回のように奢りを要求する時によく勝ってしまう。

その度に瑠璃の金がどんどん消えていき、このようにさめざめと泣き出してしまう。

それを茉莉が微笑ましく、暖かな視線で見守るといふ構図が出来

上がってしまった。

（いやー、我が姉ながら本当に愛で甲斐がありますね。眼福眼福）

南無南無、と心の中で手を合わせるも、こうしてしまったのは茉莉である。今日もまた姉を弄れて満足だ、と感じながら軽く視線を店内に巡らせながら料理が運ばれてくるのを待つ事にする。

フェアが開催されているだけあって客の入りはなかなかのものだ。夕食時というのも関係しているだろう。二人と同じハンターだけでなく一般人の家族連れも多く見かけられる。

（おやおや、カップルもいらっしやいますか）

家族連れだけでなくぽつぽつと若い男女が料理を食べている姿も確認できた。向こうの席では東方人らしい黒髪をした男女が静々とステーキとハンバーグを食べ進めている。しかしよく見るとその耳は人間のものではなく、獣のような形状をした耳をしている。

少々斜め上に伸び、先端が尖り……比較するならば猫に近い物だ。それだけであるの二人が人間ではなく魔族である事がわかる。

こんな所で魔族を見かけるとは、珍しい事もあるものだと思うが、だからといって何かするわけでもない。基本的に魔族はあまり表に出てこないものだが、彼らの中にもハンターとして活動するものもいる。例えば二人の母親のように。

過去の大戦以降めつきり姿を見せなくなった一族もいるが、長い時を経て少しずつ世に出てきた一族もいる。それに自分達には他の魔族の知り合いがいるのだ。

今もなお実家があるポツケ村に住んでいる魔族の兄弟夫婦。

黒龍が舞い降り、ヴェルドにテオ・テスカトルが襲撃してくるという大事件が起こったあの日から少しずつ広まり始めた噂により、変装しなければ軽々と大きな街へと訪れる事が出来なくなった彼ら。

同時に彼らと親しくしていたあの三人もまた東方に向かった後ばったりと姿を消してしまっていた。

いや、一度だけ会った事があったか。あの二人の子供が生まれ、それを絵に残す際に隠れ家へと訪れたあの機会のみ出会った。それ以降また隠れ家を移したらしく、時たま連絡の手紙が来るだけどこにいいのかすらわからなくなってしまっている。

六年前のあの日以来、英雄と呼ばれた彼らは人々の前から文字通り身を隠してしまった。

それも仕方ない事だろう。あの噂はもうこの東方にまで届き、しかも昨今の不穏な噂と事件によって一部では重い空気が包み込んでいるのだ。

こんな状況であの血統に連なる者が人前に出てくれば何が起こるか分かったものじゃない。確実に良くない事が起こってしまうだろう。

(……やめましょう。今はそんな暗い事を考える時ではないです)

小さく首を振ると、カートを押してこちらに近づいてくるウェイトレスが見えた。そこにはいくつもの料理が並び、美味しそうな匂いを漂わせている。

「お待たせしました」

瑠璃の前にはハンバーグセット。鉄板の上に肉の焼けた音を立てながら芳しい匂いを漂わせて食欲を刺激してくる。突っ伏していた瑠璃も料理が運ばれてくると、ゆっくりと顔を上げてその料理を見つめていた。

だがすぐに視線を横へとずらす。

続けてテーブルの上に乗せられていくのは茉莉が遠慮なく注文していた料理達。

たちまちテーブルの上には多くの料理が並び、その空いた部分を埋めていく。これを一人で食べるのか、と普通の人々は思うだろうが、狩りに出かけたのだからその使ったエネルギーを補給するとう意味合いでがつつり食べられるものだ。

それに茉莉はこう見えて結構な量を平らげるだけの胃袋を持つ。恐らく涼しい顔で黙々と胃袋へと送っていく事だろう。

「それでは、いただきます」
「……いただきます」

ウエイトレスが一礼して去っていくのを見送り、茉莉が手を合わせて言うと、続くように瑠璃も手を合わせる。そうして夕食をとり始める事になった。

瑠璃がハンバーグへとナイフを入れれば切れ目からは肉汁が溢れだし、鉄板の上でまた焼ける音を響かせてくれる。少し焦げた部分も合わせてナイフで切り取り、セットの隅にあるソースのカップに少し浸して口へと運ぶ。

咀嚼すればソースと絡んだ肉が柔らかく解け、舌に肉の旨味と肉汁を伝えてくれた。肉の味を引き立ててくれるソースとマッチし、実にいい仕事をした一品である。

その美味しさに少しだけ顔をほころばせるが、対面に座っている妹を見てその表情が硬くなってしまう。

まず茉莉はアプトノスのステーキから食すことにしたらしい。それはただの肉ではない、「霜降り」肉である。つまり高級品だ。それにナイフを通し、同じようにソースを絡めて口へと運ぶ茉莉。

ステーキの肉が焼ける匂いが対面にいる瑠璃にまで届いてくる。それだけではない、隣にあるアプケロスのサイコロステーキもまたいい匂いをしているし、モス肉と山菜をたっぷりを使用した味噌汁も美味しそうだ。

小皿にはポポノタンの焼肉が乗せられ、備え付けのレモンがある。

それを手にしてポポノタンへと絞って酸味を与え、ぱくりと一枚取って口へと運ぶ。続けて山盛りに盛られたライスを食べ、お茶を一口。

「……ふう、美味しいですねえ。いい肉です」

「……あ、そう」

「まったく、辛気臭い表情ですね」

「誰のせいだと思ってるのよ、まったく……」

そりや自分の金ではなく瑠璃の金で遠慮なく注文し、料理を堪能されているのを見せられてはこんな表情にもなるわ、と心の中でぼやきながら瑠璃はハンバーグを食べ進める事にする。

付け合わせのポテトや人参も頂き、ライスやポタージュも味わっていく。

一方茉莉はサイコロステーキやから揚げにも手を伸ばし、それぞれの味を堪能していた。少し硬めの肉であるアプケロスのサイコロステーキは噛めば噛むほど肉の味が染み出てくるし、ガーグアのもも肉を使用したから揚げは柔らかく、すっきりとした味わいがある。あまり表情が変わらない茉莉の表情を少しほころばせるだけの美味しさがあるらしい。それを見、続いて料理へと視線を移せばまだ美味しそうな匂いが漂ってくるではないか。

「じくり……」

それを見せられては唾も呑み込みたくなるものだ。いくら自分も肉を食っているとはいえ、別の肉があれば興味も出てくる。まさに今の瑠璃は餌を前にした飼い犬のよう。それに気づかない茉莉ではない。

にやりと笑みを浮かべると、霜降りステーキをフォークで突き刺し、瑠璃へとちらつかせてみる。ほれほれ、とフォークを揺らして

いる茉莉の表情はちょっとしたいじめっ子のそれに近いだろう。

「食べたいのですか？ 瑠璃」

「ぬ、ぐ……嫌らしいわね、あんた……」

「はっはっは、こういうのもアリでしょう」

「ねーよ。あつてたまるか」

ジト目で睨むも一向にフォークをひっこめない。まったく嫌らしい妹だと思っていると、鉄板の上にその肉を置いていく。それだけではない、サイコロステーキも二つ乗せていき、ポポノタンとから揚げの皿も瑠璃が取れるように近くに寄せてくれた。

「私だけ食べるというのもあれですし、瑠璃にも少しばかり恵んであげましょう」

「茉莉……」

「現実は無情ですが、私は少しの慈悲があります。ふふふ、私も甘いですね」

どこか感慨深く呟く茉莉ではあるが、驚きからまたジト目に戻った瑠璃は冷静だった。

「いや、ここの支払いあたしだから。あんたの金じゃねーよ」

「細かい事は気にしないでいきましょう」

「細かいからっ！」

吼えながらもちゃっかりから揚げを手に取り、豪快にかぶりつく。からつと揚げられた衣の下にある柔らかなも肉の旨味、とろーりとした肉汁がじゅわつと溢れ出し、またしても舌が歓喜に震える。

「ちくしょう……美味しいじゃないのよ……っ！」

「それは何よりです。さ、一緒に肉を堪能していきましょう。……
ということ、ハンバーグ一切れ、頂いても？」

「それが狙いか」

「はて、何の事やら？」

しれつと答える茉莉だがあながち間違っではないだろう。双子であるためか何となくお互いの考えはわかるものだ。しかしこうして霜降りステーキやから揚げ、ポポノタンまで貰っては何もしないわけにもいかないか。

「やれやれ、とため息をついてナイフを入れて一切れを茉莉のステッキ鉄板へと移してやる。」

「ほら」

「ども」

なんだかんだ言っても二人は仲の良い双子の姉妹だ。姉と妹という立場が逆に見えるが、それでも二人は基本的に仲がいい。そうでなければポツケ村を出て二人だけでこのロックラックまでやってきてはいない。

そして長くコンビを組んで狩猟に出はしないだろう。コンビを組むという事はお互いの命を相棒に預けるという意味合いもある。深い信頼がなければやっていけない世界だ。

五年前にポツケ村を出た二人はこのロックラック地方までやってくると、ここを中心として各地を巡って着実に力を付けてきた。手を焼いていた自分の中の才能、火竜の力を完全に制御していき、様々な飛竜をはじめとするモンスターを討伐していき、経験を積んでいく。

レベルとしては上位ハンターのものになっているが、今は下位装備で通している。それは各地を巡っている為に上位ハンターの装備を整えていないという事もあるが、意図して二人は上位ハンターの

名に連ならせないようにしているのだ。

それは自分達が竜魔族という特殊なケースで生まれ、しかも有翼種という稀有な存在でもある。また世間はあの血統に対してよくないイメージを抱いており、自分達はその知り合いがいる。

そのため二人は暁という名前を伏せ、フレアウイングの名字で活動している。表向きには有翼種の魔族として活動しているのだ。その上で各地を巡り、姿を隠しているあの一家を探している。

相手が相手のため情報屋を利用する訳にもいかず、小さな噂やその足取りを探るといふ雲を掴むような探し方であるため、必要以上に目立たないようにしている。

とはいえ二人のやり取りのせいで一部のハンター達で名が知られるようになってしまっているのだが、そこはご愛嬌か。

何にせよ上位ハンターになれば儲けが増えるが、その分危険も増す。同時にそこで活躍すれば名が売れる。それすなわち自分達の事がよりハンター達の間で知れ渡る事になるため、それを回避したいというのが二人の考えだった。

だが上位ハンターのくせに下位装備で下位クエストを受け続けるというのもそれはそれで名が知れるだろうが、ぼちぼち上位クエストの一部をこなすことでそれを回避している。

つまり上位ハンターになりたてのほやほやであり、上位と言う壁に当たっているハンターである事を演出しているのだ。今はそれで何とかなっているが、時間が経てばその回避方法も通用しなくなってくるだろう。

自分達は普通の人間ではなく竜魔族。人間以上の力量を保有する事が出来る存在だ。いつまで経っても成長しない弱者ではない。これも持つてあと半年か一年少して通用しなくなるか、と考え始めている。

何せもう自分達も二十歳になる。緊急事態で実力をつけていき、たった一年程度で新米ハンターから上位ハンターへと上り詰めたあの夫婦は十六歳でそれを成し遂げている。

あれから六年経った今でもその実力は衰えず、まだ成長しているのだ。その気になればG級になれるだろうに、境遇のせいでそれが出来ないでいる。

旦那は魔族ではあるが、妻は人間だ。しかも突出した才能を持たない人間。そんな彼女でも成し遂げられた功績。彼女と違い高い才能を保有している瑠璃と茉莉に出来ないはずがない。

当時よりも四歳も年上なのだから、今ではもう上位ハンターの間から後半にさしかかってもいい頃合いなのだ。

全てはこの変化した世の中によるもの。

ドンドルマ方面からこの東方にかけて変質していく人の想いが作り上げる雰囲気。これが彼女達の行動を縛り上げる。

本当に、やり辛い世の中になったものだ。

だが今ここにいる二人はそんなながらも関係なく、いつも通りのやり取りをしながら夕食を食べ進めている。これが彼女達の日常であり、こうする事でそのしがらみを忘れて時間を過ごせるのだ。

昔から変わらない関係を保ち、茉莉がボケて瑠璃がツッコむ。そうやって馬鹿やっているのが心地いい。いろいろ大変なことが起きているが、せめてこうしている時間だけは平穏であってほしい。

霜降りステーキ、サイコロステーキと消費していき、ポポノタンとから揚げを二人で分けて食べ、最後にライスと一緒に味噌汁をすすり、茉莉は「ご馳走様でした」と手を合わせた。

瑠璃と少し分けあったとはいえ、あれだけあった料理の大半が彼女の胃袋へと消えていったのだ。

周りの客達が啞然としているが、茉莉は気にした様子もなくナプキンで口元を拭ってお茶をすすする。

「満足そうね」

「ええ、満足ですよ。素晴らしい夕食でした」

「そ。じゃあ行きましょうか」

そう言っただけで会計するために立ち上がり、置かれているそれを手に取った瑠璃は値段を確認してみる。すると「……くっ」と苦い表情を浮かべながら息を詰まらせた。やはりというべきか、そこに記されている値段は二人で食べる夕食のものじゃない。

普通の一般人も訪れるレストランで食べられるものだというのに、どうして値段が五ヶタ近くになっているのだろう。霜降り肉か？ やっぱり霜降り肉の影響が強いのか！？

そんな彼女へと向き直った茉莉は一度姿勢を正し、両手を胸の前で交差させてから振り下ろしつつ一礼した。

「ゴチになります！」

「……………ちくしょう」

もう何度目になるかわからない言葉を呟きながら哀愁を漂わせる背中が遠ざかっていく。

そんな彼女を温かい眼差しで見送りつつ、茉莉も席を後にした。

そんな一件があつた次の日、私服姿にローブを纏った二人はロックスクラックの港へとやってきていた。赤いシャツに炎の柄が描かれ、黒に近いズボンという動きやすそうなものが二人の私服だ。しかもお揃いというのが双子らしい。

そしてローブはやはり火竜という事もあり、背中はりオレウスを模した絵が描かれている。

瑠璃はいつものツインテールだが、茉莉は狩猟の際に揉み上げに巻いていたリボンを頭の後ろに結んでいた。

二人はこれからロックラックを後にし、また各地を巡る旅を始めようとしている。一定周期で各地を巡ってロックラックへと戻ってくるという方法でこの五年を過ごすのが二人のやり方だ。

マンドラゴラを入手するためにヒュドラ討伐に向かったのが今回のロックラックでの最後のクエストとなる。これは調査で秘薬を作り出すための材料となり、昨日の内に作っておいた。これで秘薬の補充は完了する事になる。

さて、砂上船に乗り込んだ二人は部屋へと向かって場所を確認し、ロープを壁掛けに掛けてベッドに腰掛ける。

それから地図を広げてこれから向かう場所を確認する。

ロックラック地方は主に砂漠が広がる地理であり、西に進めばテロス密林、北西に進めばポツケ村があるフラヒヤ山脈がある。

北から北東方面に向かえば元々の実家がある国、華国に入る事になるがあつちには行かない事になっている。あそこは魔族に対してよくない印象を持つ者がそれなりに存在し、自分達が華国を出る事になった原因となった魔族狩りを行った過去がある。

わざわざそんな国に戻る理由もない。なので華国に行く路線は自然に消える。

南に進めば海岸線があり、その先には小さな島々が集まる諸島が存在している。主に漁業を営む村が点在しており、それで生計を立てているのが多い。

最後に東へと向かえば砂漠が終わり、緑豊かな草原や山々が存在する領域へと入る事になる。そこから更に東へと向かえば海となり、その先に島国であるシキ国が存在している。

それまでは無国籍であり、大小の街や村が存在する場所になる。

あの一家の故郷はその無国籍の山の一つに存在していた。その後別の山の一角に隠れ家を作り、暮らしていたのだ。

そして今乗っている砂上船の進路は東。砂漠が終わる所にある港町まで進み、そこから更に東の山へと向かう予定である。

山によって様々な特色があり、ある山は山の幸を生かした特産品

で生計を立てる村があったり、山間に作った畑から摂れる作物で生計を立てる村があったり、湧き上がる温泉で旅人を呼ぶ村があったりする。

「情報を求めるならやっぱりユクモがいいかしらね」

「でしようね。この一年でまた活気づいたらいいですから、もしかするとこっそり温泉に入りに来た事があるかもしれません。確か東方人は温泉が好きらしいですから」

「温泉というか風呂が好きだって聞いた事があるわね」

そんな会話をしながら地図を見る二人の視線はある一点に向けられている。山岳地帯の一角にあるその村はユクモ村。先ほどの例に挙げた湧き上がる温泉で山を越えていく旅人の安らぎの場を与えてくれる村だ。

数年前までは落ち着いた村でお抱えのハンターもいない場所だったのだが、村に危険な竜種が現れた事でギルド支部を設立してハンターを呼び、これを討伐した過去がある村だ。それからはギルド支部を置き、旅人だけでなくハンターもそれなりに訪れる場所になっているという。

二人も三年ほど前に訪れたのだが、一般人とハンターの割合は八：二ほどぐらいだったか。温泉街も旅人が多く、彼らによって賑わっているという印象だった。

そのためギルドとしての規模は小さく、クエストもそれなりでしか回されておらず、ハンターの活動の場としてはあまり向いていない。ここに訪れるハンターの大半は温泉に浸かって疲れを癒すという目的が有力だ。

そんなユクモ村が今回の目的地とする。

予定の確認が終わったところで小さく船が振動し、ゆっくりと進み始める。それを感じた二人は一度部屋を出て甲板に上がった。

畳まれていた帆が挙げられ、今まで停泊していた港、そしてロッ

クラックの外壁が遠ざかっていく。見れば他にも客達が甲板に上がっており、遠ざかっていくロッククラックを見つめていた。

中型の砂上船のためそれなりに乗客がいるようだ。やっぱり大半は人間が多いが、その中に竜人族と魔族が一組ずついる。気のせいかな魔族の方はあのレストランにいたあのカップルのようだが……まあいいだろう。

ロッククラックの外観が小さくなっていき、あとはどこまでも広がる大砂漠。変わりのない景色を眺め、吹き抜ける乾いた風を感じながら二人は新たな旅を始める。

あまり動けない彼らに変わり、行方知らずとなったあの一家の影を求めて。

肉だらけの夕食（後書き）

初登場時は二人は十三歳。

あの戦いが終わった時には新年を迎えられ、その年は十四歳。

それから六年が経っているため、二人はもうすぐ二十歳になる、という計算になっております。

……ということは今はいない彼らもいい歳になっているという事になってますね。

アプトル疾走

港に到着した砂上船はゆっくりと停泊し、帆を畳んでいく。昼にロックラックを発つてから数時間の移動、太陽は既に地平線に消えようとしており、藍色の空が少しずつ表れ始めていた。

砂上船を下りていく瑠璃と茉莉は港を後にすると、真っ直ぐに夕食を取るために宿屋へと向かう事にした。この港町はそれなりに宿屋が点在しており、この町にやって来た旅人や、これからロックラックへと向かう旅人を迎え入れるための施設がそれなりにある。

大抵の場合昼の便でやってきた旅人はここで一泊し、それから旅立つことが多い。

二人も例に漏れず、ここで一泊してから移動しようと考えていた。夜の旅は危険が多い。視界が悪くなり、モンスターからの奇襲もよくある話だし、山道で足を滑らせて落下なんて目も当てられない。夜目が効いていたとしても、神経を張り巡らせながらの旅はあまりよくない。

無理せず宿を利用した方が身のためだ。

一緒に降りてきた他の客達に紛れて港を出ると、それぞれ宿屋を利用するらしく同じような道を歩いていく。といってもざっと十数人程度の客であり、街道は時間が時間のため人は落ち着いたものだった。

数分歩いて宿に到着し、先に到着していた客に続いて中に入っていくと、茉莉は何かに気づいたように背後を振り返る。

「……………」

誰かの視線を感じた気がするが、数秒程度のものだった上にそれほど強い意志を感じなかった。入口からそっと横にずれて他の客達の邪魔にならないようにし、軽く外を見回してみる。

だが視線の主らしきものは見当たらない。見えるのはこの町に住まう人達、この宿や他の宿へと向かう砂上船の客達ぐらいなもの。

「気のせい、ですか」

「茉莉？ どうかした？」

「……いえ、なんでもありませんよ」

立ち止まってしまった茉莉を訝しんで瑠璃が声を掛けてきたが、小さく首を振って彼女の後に続く。

だが茉莉の気のせいではなかった。

確かに視線の主は存在していた。しかしそれは一人ではなく二人。視線の主は他の乗客たちに紛れて街道を歩きつつ彼女を見つめていたのだ。彼女らが宿の奥へと向かっていくのを見送ると、黒い私服と闇色の外套を軽くなびかせながら街道の奥　すなわち街の出入り口へと向かっていく。

そのまま暗くなっていく夜に溶けるように二つの人影は見えなくなっていた。

一泊し終えた二人は朝食を取り終わるとすぐに港町を発って移動を開始する。それまでは砂漠だったが、町を出ると荒地が続く。その先に少しずつ緑が表れ始め、そこから草原や山々が広がる地形となる。

アプトルを利用できる竜小屋を訪ねてアプトルを二匹レンタルし、荒地を一気に突破していく事にする。予定は昼前ぐらいに荒地地を抜け、山岳地帯に突入する事だ。一、二週間内にユクモ村に到着するとなれば、それぐらいの早さを目指したいところだった。

荒地地に街道というものはほとんど存在せず、うっすらと多くの

旅人が利用したことで固められた道が見える程度。しかも生息しているモンスターが物陰から飛び出してくる事もあるため、用心するに越したことはない。

だがアプトルの疾走速度は馬鹿にならず、その脚力を以ってして振り切る事は可能だ。追いついてくるとするならば、この乾燥地帯に生息している獣竜種の一角、土砂竜ボルボロスあたりだろうか。

奴の高い疾走力はアプトルの疾走速度に追いついてきかねない程であり、発見されて戦意を剥きだしにされれば少々まずい事になるかもしれない。

とはいえ地図によれば二人が利用しようとしているルートにはボルボロスの縄張りが入っておらず、最近雨が降った記録もないようなのでボルボロスが利用するであろう泥が溜まるポイントや沼地はないだろう。

あと挙げられる危険性といえば空を舞う飛竜種、雌火竜リオレイアあたりだろうか。奴はリオレイウスと違いこの荒れ地、砂原、砂漠にも出没するようで、時折空から獲物へと襲い掛かっていく光景が見かけられる。

こちらに関しては本当に運だ。食料を求めているのかそうでないかが関わってくるので、遭遇しない事を願うとしよう。

そんな風に荒れ地を移動する事数時間。時折懐から水筒を取り出して水分補給をしながら移動した二人は、もう少しでこの荒れ地から抜け出せるというところまで来ていた。

しかしここでまさかの壁が現れる事となる。

進路上に赤い球体がゴロゴロと転がって来たかと思うと、飛び回っているブナハブラに向かって長い舌を伸ばしたではないか。蛇行しながら長く伸ばされた舌は的確にブナハブラを捉え、一気に口内へと納められる。

アルマジロのようなその外観、赤い甲殻に長い舌を持つそのモンスター。

赤甲獣ラングロトラ。

「どうしてここでラングロトラが出てくるかな？」

「ま、出てきたものはしょうがないでしょう。静かにやり過ごしていきましようか」

幸いラングロトラは獲物であるブナハブラ達に夢中になっている。どうやらあの辺りにブナハブラの巣があるようで、突如現れたラングロトラに興奮しているようだ。それから数十メートル離れた所にいる二人と二匹には気づいていないらしい。

手綱を操って静かに横に逸れ、岩陰を利用して視界に入らないようにする。

さらにラングロトラの背後から回り込むようにして移動する事にした。

クエストを受注していない状態で討伐しては色々と問題が発生する。野良での狩猟が横行すると生態系が崩壊し、予期せぬ事態を将来的に招きかねないためだ。よほどの事がない限り、野良の狩猟は認められていない。

だが自衛のために戦う事は可能であり、それで撃退すればまだ許される。何もしないままに負傷するのはハンターとしては本意だろう。だが極力戦闘に持っていけないようにするための努力は必要だ。

それがモンスターを刺激せずにその場を去るという行動だ。

アプトルも無用な戦いを好まない性格のため、二人の意志を汲んで足音を立てずに静かに移動してくれる。

そうして背後を取り、そのまま静かにその場を離れていく事に成功。一定距離を取ると一気に加速し、ラングロトラが追ってこれないスピードで離脱していく。

背後を振り返ると、その足音に気づいたらしいラングロトラがブナハブラを咀嚼しながらこちらを見つめていたが、その距離と速さから追うのも無駄だと悟ったらしい。そのまま食事続けるようで、

ブナハブラの巢へと視線を戻していた。

「どうやら無用な戦いは避けられたようだ。」

それに安堵して手綱を握りしめてアプトルを走らせる事数分。ようやくこの乾燥地帯を抜け出す事となった。

ラングロトラとの遭遇以外に目立ったトラブルもなく、二人は荒地と草原地帯の休憩地点とされる町に入る事になる。レンタルしたアプトルをこの町の竜小屋に届け、昼食をとるために酒場へと向かっていく。

「いらつしゃいませー」

中に入るとすぐにウエイトレスが出迎え、席へと案内してくれる。お冷とお品書きを出されると、すぐに内容に目を通し、早速注文する事にする。

「あたしはラーメンセットで」

「では私はアプトノスのカツ定食でいきましょうか」

「かしこまりました」

一礼して去っていくウエイトレスを見送り、二人は揃ってお冷を口にして軽く辺りを見回してみる。ハンターらしき顔ぶれは少なく、普通の旅人がよく見かけられるようだ。各々同席している者達と世間話に花を咲かせながら昼食をとっている。

その世間話に少し耳を傾けてみると、こんな話が聞こえてきた。

水没林を通るルートにロアルドロスが率いる群れが現れ、街道が一時的に封鎖されているという話。

華国の政治家の一人が突然の事故死をした話。

また一人、天刃流の使い手が何者かに殺されたという話。

どれもよくない話ばかりだった。その中で気になったこの三つの話。

瑠璃と茉莉は顔を合わせて声を少し潜めて話し始めた。

「また殺されたらしいわね……」

「最近は落ち着いたと思っただのですが、またですね。これで天刃流は三人目ですよ」

「他は桜花流に獣牙流だったかしらね。ほんと、一体誰がこんな通り魔みたいなのをしているのやら」

数年前から一つの事件が発生していた。

あまりにも突然の事であり、それは時間を置いて連続して発生する事となる。

東方の武術の流派はいくつかあり、格闘術、剣術、槍術などの専門的なものや総合的なものも含めて様々な形が存在している。

そんな流派に所属している使い手が何者かに殺され続けるという事件だ。

しかも殺されたのは有力な武人であり、最近は達人の領域にまで達した者まで殺されている。

だがそんな彼らの殺され方は暗殺という形ではなく、誰かと戦って敗れた形で殺されていた。つまり、真っ向勝負に負けたのだ。それがまた他の武人たちを驚かせる。

達人と称された者まで真っ向勝負に負けたのか、と。

一体殺した相手はこの流派に所属しているのだろうか。

あるいは流派に所属していない野良の存在なのか。

様々な議論が持ち上がっているが、今もなおその正体は掴めず、

ゆっくりと犠牲者を増やし続ける事になっている。

中にはあの血統の者がこの事件を起こしているのだ、という声も上がっており、それに同意する者も少なくない。何せ実際に多くの人を殺してきた罪人が今もなお刑に服しているのだ。

そんな前例がある今、この武人を狙った通り魔事件もそんな人物が起こしているんじゃないかと思ってしまうのも無理はない。

そう、あの血統に連なる者はすなわち殺しに特化した力を持ち、それによって戦闘能力は修練すればそう易々と敗れる事がない戦士と化す。だから考えられない話ではないのだ。

この事件があるからこそ、今もなお大抵の一般人はかの血統に対してまだ不信感を抱き続けている。

「瑠璃はどう見ます、この事件」

「あたしの考えは変わらないわよ。これはあの人達の事を貶めるための通り魔だってね。だってそうでしょ？ 理由もなく人を殺すような人ばかりじゃないはず。しかも今の時勢じゃそういう事件を起こせば自分達が疑われるのよ。わざわざ自分の首を絞めるようなこととはしないはずよ」

「……そうですね」

「何？ 茉莉はそうじゃないって言うの？」

ジト目で睨んでくる瑠璃に、茉莉は「いえ」と小さく首を振りながら前置きし、お冷を口にして軽く唇を塗らして話し出す。

「私も瑠璃の考えには同意しています。……ただ、それだけではな何かがある気がするのですよ」

「と言うつと？」

「犯人はどうして有力な武人や戦士ばかりを狙うんでしょうね？」

「そりゃ、その方が事件として広く知れ渡るからでしょうよ」

「そうですね。しかしそれだけでなく、その有力な人を倒す事で戦

力を削ぐことも可能でしょう」

「……戦力低下って、また戦争でも始めようっての？ まさか、んなわけないでしょ。だってそれ、戦闘面での要人を暗殺ってことじゃない」

モンスターや竜種と戦うハンターと違い、彼らは人と人との戦闘を行う者だ。国に所属する軍人ではないが、軍人を目指す者や自衛のために戦う技術を習得する者が集まる道場の者ら。

習得した技術を用いて軍人になる者、その技術をまた別の誰かに伝える者、あるいは更なる強さを求めて世界を回る者と様々な目的を持っている。

あるいは緊急時には国の招集に応え、その力を以ってして功績を上げるために戦場へと赴く者もいる。今はそんな事態にはなっていないのでそれはないが、過去にはそんな武人達が名を上げるために国の招集に応えて戦争に参加した事もある。

そうして名を上げれば、自分が習得している流派の名も上がる。するとそんな流派の技術を求めて更なる門下生が集まる。それが目的だ。

そんな武人を殺していく。それはすなわち茉莉の言う通り有事の際の戦力を削ぐことになる。それも実力ある武人ならばより大きな戦力の低下を招く。

「でも考えられない事もないでしょう？ ……ま、全ては私の憶測なんですけどね。戦力を削いだから一体何が起きるのか、そこまではわからないのですから。戦争が起きるかもしれないし、起きないかもしれない。……起きない事を願いますけどね。もしかするとっと単純に、ただ強い相手と戦い、殺していくという目的も考えられないのですからね」

「そっちの方が有力じゃないの？」

「かもしれませんね。……っと、どうやら食事が運ばれてきたよう

ですよ」

視線を横にずらせば、お盆を手にもうエイトレスが戻ってきていた。そこで一旦話を中断させる。

「お待たせしました」

注文した昼食が目の前に置かれ、一礼してウエイトレスが去っていく。

瑠璃が注文したラーメンセットはラーメン、焼飯、から揚げとサラダのセットというシンプルなものだ。

一方茉莉が注文したアプトノスのカツ定食はアプトノスの肉に衣をつけて揚げられたカツ、白米と味噌汁にサラダというメニューとなっている。

「「いただきます」」

手を合わせて一礼し、食事を始める事にする。

そうしている間も二人は次の話題に移っていく。先ほどの話はいったん終わらせ、別の気になる事に関して話す事にしたようだ。

「水没林にロアルが出たって話があったわね」

「ありましたねー。とはいえそんなに珍しい事ではないでしょう。

そういうのはちよくちよくある話ですよ」

「そうだけど、確かあたし達が取るうとしてしているルートって、水没林も含まれてなかった？ ほら、確か……ボルシオ水没林。そこを越えていく予定だったじゃない」

「ああ、そのルートでしたね。……そこが今封鎖されているという話でしたか」

「そうよ。だからどうするって事になるわけで」

こういう場合は居座っているモンスターが離れていくのを待つことになるか、あるいはハンターに依頼を出して討伐するという形になるかの二択になる。

これからその水没林に向かう事になるが、それまでの間にどうなるかが解決してくればいいのだが、解決していない場合は足止めを受けてしまう事になりそうだ。別のルートを取るという選択肢もあるが、そうなるとうるりと山を大きく迂回する事になる。

もしくは自分達が依頼が出ていればそれを受理し、その水没林に赴いて討伐に向かうという手もある。

そうすると戦いの経験を積めるし素材も手に入る。更に水没林で採取するという事も可能だ。

何もしないまま迂回するか、クエストを受理していくか。

その二択を選ぶとなれば、瑠璃からすれば答えは一つしかなかった。

「あたしは依頼があったらやっていきたいと考えているけど、茉莉はどう?」

「私は別にかまいませんよ。異論はありません」

「そ。じゃあこのままルート変更なしで行くって事でいいわね」

レンゲで焼飯を掬ってパクパクと食べていき、ラーメンをすすっていく瑠璃は少しだけ楽しげな表情を覗かせる。基本的に彼女は好戦的な方だ。というより母親や姉を目標としている瑠璃は早く強くなりたいという願望がある。

優秀なハンターである母親、一時期は優秀なハンターだったが過去の出来事によりハンター業を引退した姉。かの事件の際は一時的な復活をしたが、結局は父親の鍛冶業を継いで活動している。

ならば姉が足を乗せなかった領域まで上っていききたいという思いが強いようで、少しでも経験を積みたいというのが彼女の想いだ。

茉莉はそんな瑠璃の想いを知っているため、そんな彼女を支えるためについて行く。彼女の想いはわからなくもないが、どこかで彼女はストップをかけなければどこまでも突っ走りそうで怖い。だからこそ茉莉は瑠璃の事を時折猪と呼ぶ。

そして茉莉が付いていなければいけないのは昔から変わらない。ストッパーとなる彼女が手綱を引いていなければどこでも無茶をするかわかったものじゃない。

とはいえ瑠璃自身もどこかで茉莉がいてくれるから安心して、という節があるのでギリギリまでは突っ走っているようだが、それは彼女に対する信頼があるからだろう。

茉莉もそれを何となく感じ取っているようで、しょうがないなあと思いながら今まで彼女を支えている所がある。同時に彼女を弄つたりして憂さ晴らしや退屈凌ぎをしているのだが、そこはご愛嬌か。

「で、最後は華国の一件ですが……」

「事故死って話でしょ？ どうでもいいでしょ、そんなの。あの国の要人がどうなるうが、知った事じゃないわよ」

「……ま、そういう感想になりますか」

味噌汁をすすりながら茉莉はやれやれと首を振るしかない。といつても彼女もまた同じような心境だ。

自分達があゝの国から出る結果となった魔族狩り。まだまだ幼い頃に起こった出来事だが、実家を捨ててポケット村へと身を寄せる事になった出来事だ。そのせいであゝの後の数年はあまり自由に過ごす事が出来ず退屈だったことを覚えている。

少しして魔族狩りはなくなったらしいが、再び起こったその一件によって華国からはほとんど魔族はいなくなり、魔族の心境は更に悪くなったという話だ。

二人もその例に漏れず、あまり華国とは関わり合いになりたくないと思っっている。だからかの国の要人が死んだと聞かされても、「

あ、そう」としか言えない。もう自分達は華国人じゃないのだから。というより昔から華国人と言う自覚すらない。物心ついたころから無国籍状態だったため、どこかの国の人族だという感覚がほとんどないのだ。

それからしばらく無言で食べ進め、そう時間もかからず昼食を食べ終える。先に食べ終えた瑠璃が軽く視線を巡らせれば、まだ談笑している客達は暗い話題だけでなく明るい話題についても話しているようだが、それらは小さなものばかりかプライベートの事だけだった。

情報としては今回はこれくらいしかないか。

となればここに用はない。早いところ移動するでしょう。

会計を済ませて店を出ると、またアプトルをレンタルできる竜小屋へと足を向かわせる。再びアプトルを二匹レンタルすると、すぐに騎乗して移動を開始する。

竜小屋は各地の町に存在し、数匹のアプトルがここで世話されている。その疾走力が売りであるアプトル、あるいは周囲の地形に合わせて進化した亜種らをレンタルし、騎乗して移動する事が可能だ。レンタルした彼らは他の竜小屋に預け、次の機会に他の客が利用する事でやり取りされている。そのため利用後のアプトルの事に関しては心配はいらない。

昼食後ではあるが、そんな事は関係なしに二人は一気に移動していく。

少しずつ茶色や黄土色が主体となっている世界に緑が混ざりだし、やがってどこまでも広がる緑という原っぱに入り込む。そうすると地平線の奥にうっすらと山の影が見え始める。

それだけでなく、草食竜のアプトノスの群れがちらほらと見かけられるようになった。

とはいえその群れの近くを一瞬の内に駆け抜けてしまうアプトルの疾走力。あつという間に数十頭の群れを背後へと置き去りにしていく。

それから数十分もすれば遠くに見えていた山がかなり近くなってくる。それだけでなく山の近くにある森も近くなり、二人は手綱を操って進路をその森へと変更させる。

森へと突入すればそれはまともな道などほとんどない状態になるが、アプトルはそれを苦も無く疾走し続ける。木を避け、道なき道を走り続けて森の奥へ。そうして数分もすれば少しはまともな道に出てきた。

それからはその道を利用し、一気になだらかな坂道を駆け抜けていく。するとこの森に生息している生き物の気配をうっすらと感じ始める。

だがほとんどは危険性のない草食系のモンスターばかりで、先ほどの群れとはまた別のアプトノスや、キノコを主食とするモスが多い事がわかった。

ランポスやシャギイの気配は今のところはない。ならば安全に移動できそうだ。

なだらかな坂道はやがて山道へと形を変え、多少はましな道なりになる。だがそこで油断してはいけない。少しスピードを落として周りに気を配りつつ進むことで、足を踏み外して落下しないようにする事も忘れない。

そんな山道を駆け抜け、坂が終われば今度はまた森を突っ切る道となる。今度は木々を避けるのではなく、旅人が利用するまともな道を駆け抜ける事になるためスピードはそう落とさなくても済みそう。

モンスターの気配も相変わらず落ち着いたもので、肉食系のものの反応は感じられない。

今回はトラブルもなく目的地の村に到着できそうだと感じ始めた。

そんな事を考えて数十分。

何事もなく目的地である村に到着する事になった。竜小屋へとアプトルを連れていき、この村にある酒場へと足を運ぶ。山間の一角

に作られたこの村の先に件のロアルドロス率いる群れが確認された
ボルシオ水没林が広がっている。

水源が豊富な上に雨雲が溜まりやすい環境になっているらしく、
かなりの頻度で大雨が降り注ぐ場所になっているようだ。その影響
でほとんどの森が水に沈んでいる状態になっているというその水没
林は一種の植物や水生のモンスターにとっては天国のような場所
になっているという。

ただの森と違い水が多いためその違いに慣れていないハンターに
とっては厄介な場所であり、またある技術を持っていなければこの
水没林で暮らすモンスターを相手にするのは難しい。

そのため件のロアルドロス討伐クエストが出ていたとしても、引
き受けるハンターはそうそういないんじゃないかというのが二人の
推測だ。

ギルド支部を兼任している酒場に入り、様子を窺ってみるとハン
ターの数は数人程度しかいないようだ。他は一般人であり、ここに
足止めされている旅人がほとんどだと思われる。

そしてクエストボードを見てみると、やはりそれはあった。

だが内容を見てみると、それは少しばかり予想とは違っていたの
だ。

「……………は？」

思わず瑠璃が呆けたような声を漏らしてしまう。

そこにはこうあった。

ロアルドロスとチャナガブルの狩猟。

場所、ボルシオ水没林。

確かに推測通りロアルドロスの討伐依頼だった。しかし、それに
加えてチャナガブルまでその名が拳がっている。これは予想外だっ

た。

瑠璃はすぐにカウンターへと向かい、受付嬢にあの事について訊いてみる事にした。

「ちよつといいかしら？」

「はい、何でしょう？」

「あそこの依頼、チャナガブルの名前まであるけどどういう事？」

「実はロアルド羅斯の群れが確認された後、とあるハンターチームがクエストを受注し、現場に向かったのですが……その後チャナガブル乱入というトラブルが発生したそうです。彼ら曰く、ロアルド羅斯との戦闘にチャナガブルまで乱入してきたせいで現場は混乱状態、そのまま戦闘続行不能まで追い込まれたとの事です」

なるほど、そりゃ話に聞いていないモンスターが乱入されては混乱もするだろう。群れのリーダークラスのロアルド羅斯相手にするだけでなく、ロアルド羅斯と同じ海竜種のチャナガブルまで現れれば、何の心構えもしていない状態ならば戦線はガタガタに崩れる。

そこを突かれれば戦いを続ける事なんて出来やしない。

それに恐らくチャナガブルが現れたという事は、その事態が起きたのはまず間違いなく陸上ではなかったのだろう。それが戦線崩壊に拍車をかけたに違いない。

当事者のハンター達には運が悪かったと合掌するしかない。

さて、これは困ったことになった。

チャナガブルまで確認されたとなれば、二頭討伐クエストになったという事になる。もちろん油断しなければ何とかなるかもしれないが、場所が場所だ。しかもチャナガブルの主な戦場は普通じゃない。

心構えは出来ても、だからといって確実に成功できるかと訊かれれば少し難しいと答えてしまうだろう。

ちらりと茉莉が瑠璃の様子を窺い見れば、腕を組みながら少し唸

っている様子が確認できた。ロアルドrossの群れだけと想っていた所にチャナガブル。彼女とて慢心しているわけではないので、がむしやらにやればいいというものではないという事はわかっているよ
うだ。

それさえわかってくれるなら問題ないが、さあ行こうかとなれば少し考え込んでしまうのが現実。

せめて二人だけでなくあと二人……いや、一人でもいいから同行者が欲しいところか。

だがずっと二人でやって来た上に、自分達の種族があれなのでそう易々と同行者を募るのも難しい。これは少し困ったものだと思っ
ていると、誰かが近づいてくる気配がした。

「その様子、あんた達もあのクエストに行く気があるようだね」

「……ん？ 誰？」

そこに立っていたのは東方人らしい黒い髪を肩まで伸ばし、気の強そうな碧眼をした女性だった。浅葱色あさぎの着物に身を包み、左右の腰元には小太刀を帯刀している。

一見すると普通の剣士のようなのだが、あのクエストについて話し
けてきたという事はハンターでもあるのだろうか。

多少警戒するような視線で彼女を見つめていると、にやりと楽しげな笑みを浮かべて「ああ、別に怪しいものじゃないさ。こんなものをぶら下げちゃいるけどあたしもハンターでね」と前置きしながら懐からギルドカードを取り出してぶらぶらと揺らしてみせる。

確かにそれはギルドカードであり、彼女が正式なハンターである事を示すものだった。

「あたいは桐音きりね。草薙桐音。よろしく」

ボルシオ水没林（前書き）

草薙桐音との出会い。

そしてボルシオ水没林入り。

トライ仕様の水没林をどれだけ書けるかが問題になるでしょう。
まずはその始まりから。

ボルシオ水没林の名前は、マレーシアのボルネオ熱帯雨林を参考にしています。

実際のものとは何ら関係ありません。

ボルシオ水没林

草薙桐音、そう名乗った彼女は視線をクエストボードへと向け、ギルドカードを懐に戻すと親指を立ててクエストボードを示して見せる。

恐らくあの依頼を示しているのだというのはわかる。そして彼女がハンターだと名乗った事。それらを合わせて考えてみると、彼女が二人に声を掛けた理由は何となく推察する事が出来る。

「それで、さっきの話聞こえていたけど、あれについて話していたって事でいい？」

「……そうね。チャナガブルがいるって聞いてないって事を訊いていたわけだけど」

「で、二頭討伐になった事で考え込んでいるってわけだろ？ 二人で行けるかどうか、とかそんなところか」

「そうですね。……まあ、ずばりいきましよう。あなたもあのクエストを受注しようと考えているということですよ。あなたもあのクエ」

「ああ、そうさ。……だがあたかもたった一人で行こう、なんて馬鹿な事は考えちゃいねえ。他にも参加する奴がいねえもんかと待っていたら、どういうわけかだあれも参加しない。まったく、ここにいる野郎どもはタマナシか、おい？ どいつもこいつもチキンばかりじゃねえか、と嘆いていたところさ」

やれやれと首を振りながらもその眼差しと言葉はここにいるハンター達を非難していた。ハンター達は全て男性であり、女性はこの三人のみ。つまりあのクエストに参加しようとしているのは女性のみであり、他のメンツ……すなわち男性全てあれを避けているという事になる。

桐音がチキンと言うのも無理はないだろう。

だがチーム戦とはいえ、二頭討伐クエストは通常のクエストよりも難易度が上がるのも事実。同じ種類であろうがなかるうが、二頭のモンスターが同時に狩猟場に確認されているクエストは難しいというのがハンター達の間で知られている。

それはやはり同じエリアに二頭の大型モンスターが現れた場合、どちらにも意識を向けていないといけないという点があるからだろう。そうしなければ一頭に集中している時に横から、あるいは背後から攻撃を受けて致命傷を受けたとなれば死の危険性がある。

故に二頭討伐クエストを避けるというハンターは決して臆病者、と蔑まれるいわれはない。命を大事に、それは何も間違っていないのだから。

だが一般人も街道を利用できないという状況、このクエストに参加表明を出しているのが女性のみというこの状況。参加表明を出していない男達が非難されるというのは、ちょっと彼らがかわいそうかもしれない。

「ここに居るのはチキンばかりでこれじゃクエストどころじゃねえってところに、ようやくあんたらがやって来たってわけさ。見たところ、結構腕が立つだろう？ どうだい？ あたいと組まないか？」

にっつと笑みを浮かべながらそつと手を差し伸べる。

その手、続いて桐音の表情と視線を上げて観察してみる。怪しいところはないように見える。彼女は本当にあのクエストを行うための仲間を募っているようだ。

そして二人を見て出来るハンターだと感じられるだけの目と感性もある。

二人もまた同じように桐音を観察する事でその実力を読み取ってみる事にした。帯刀している小太刀から感じられる力からして、それはハンターが使う武器らしい事がわかる。

その佇まいに隙らしいものは見当たらず、なるほど戦闘面ではまったく問題はないだろう。耳などを見てみると彼女は人間である事がわかるが、その発せられる気はただものではない事もわかる。たぶん……タイムマンで戦えばほぼ互角かもしれない。そう思わせる程の強さを感じる。

「……いいでしょう。よろしくお願いします」

「茉莉、いいの？」

「私は構いませんよ。それに人手が欲しいというのは事実ですからね。瑠璃もそれはわかっているでしょう？」

「そりゃそうだけど……」

渋りながら横目で桐音の顔を窺い見る。彼女とて頭ではもう一人は仲間が必要だという事はわかっている。しかし、この桐音という女性をそう易々と受け入れる程彼女は大人しくはない。

まだ警戒心を剥きだしにしているのは、桐音のその笑みや雰囲気と思うところがあるからだろう。瑠璃の心情は桐音も何となく感じ取ったらしく、苦笑しながら軽く頭を搔いてみせる。

「ああ、あたいがこんななのは昔からの性分だね。そこは勘弁してくれ」

「……そう」

「で、どうだい？ あたいとしては仲良くやっていこうかと考えてるんだけどね」

「……」

相変わらず差し出されている手。それをじっと見つめ、

(……ま、今回だけの付き合いよね)

緊急事態であるが故に一時的に組む相手、と考える事で今回だけの付き合いとする。どこか気に入らない相手ではあるが、我慢してやろうと自分に言い聞かせ、瑠璃はその手を取った。

「よろしく頼むわ」

「ああ。よろしく頼むぜ。……そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。なんていうんだ？」

「あたしは瑠璃・フレアウイング。で、こっちが妹の
「茉莉・フレアウイングです。以後、よろしくです」

こうして三人は一時的なチームとなった。

受付嬢に依頼書を持っていき、それぞれサインをして判が押されると依頼の受注が完了される。それからはそれぞれ一旦宿に向かう事になった。桐音はハンター装備に着替えなければならぬし、瑠璃と茉莉も宿を取って一時的な拠点を得なければならぬ。

二人で利用するための部屋を取り、ローブからそれぞれ装備を取り出して着替え始める。

さて、ここで改めて二人の装備を見てみる事にしよう。

瑠璃が装備するのはナルガシリーズ。迅竜ナルガクルガの素材を使用した動きやすさを重視した装備である。その機動力を用いて戦う事を主体とする瑠璃にとって、ナルガシリーズは実に彼女にあっているといえよう。

そして主要武器は相変わらず太刀であり、同じくナルガクルガの素材を使って作られたヒドウンサーベルを使用している。

一方茉莉が装備するのはレウスシリーズだ。雄火竜リオレウスの素材を使用し、火に対して高い守りを保有するだけでなく、スキル

として火属性の力が高まる効果も発現している。

そして主要武器はランスとガンランスという重量級のものではないが、彼女自身の高い筋力のおかげで難なく振るう事を可能としている。

瑠璃が攻め、茉莉が守りつつ援護する。

それが二人の戦い方だ。

また二人が身につけている装備は西のドンドルマをはじめとする地域で作られるものではなく、この東方で作られる形のものだ。そのためその外観、発現するスキルに少々変化が見られる。

数分して着替え終えた二人はローブを纏って部屋を出、先ほどの酒場へと向かっていく。そこには既に準備を終えたらしい桐音が待機していた。

「おー、待たせてしまいましたかね？」

「いや、そんな事はないさ。ほんの数分だけだよ」

そう言う桐音の装備は何とも言えない装備だった。胸元や肩、へそが露出した軽装ながら、その色合いは少し紫がかった暗い黒に染まり、胸の上で血色に染まる爪のようなものが交差した装飾がしてある。

頭を守るものはなく、紅色のサークレットがそこにあるだけだ。

だがそのサークレットが力を持ち、頭部を守るための障壁を張ってくれている。一見装飾具のように見えるが、それも立派な防具なのだ。

ネブラシリーズ。

毒怪竜ギギネブラの素材を使用して作られた防具である。色合いからして怪しさ満点の代物だが、高い衝撃吸収能力を持ち、それがスキルに表れている。火にかなり弱い、それと引き換えに雷と氷属性に強いのも特徴の一つだ。

それに原種は怪しさ満点だが、瑠璃と茉莉の姉の主要防具はその

ギギネブラの亜種、電怪竜の素材を使用したネブラUシリーズだ。あれなんて血色を主体とした色合いをしているため、あれこれ言う事は出来ないか。

「竜車の手配はしてあるぜ。必要な物は用意させてあるからそれぞれチェックしな」

「おー、どもども。すみませんね、こんな事まで」

「なに、いいって事よ。時間があつたからちやっちやとやったただけの話さ」

そう言いながらどうぞ、と言う風に竜車の中を示した。それは馬車のものと似通っているが、それを引くのはアプトノスカ、ガークアか、あるいはアプトルかポポかという違いがある。

地域によつてそれは異なり、飼い慣らされたモンスター達によつて荷車が引かれるという仕組みになっている。

ここではアプトルが使われているようで、二頭のアプトルが手綱に繋がれている。

瑠璃、茉莉と続いてそれに飛び乗り、中にある荷物を確認する。支給品ボックスに納品ボックス、そして水没林で狩猟するならば必要不可欠な装備もちゃんと揃っている。

特に問題はなさそうだ。

「オーケーですね」

「そうかい。じゃあ出発してもいいかい？」

「いいわよ」

「よし、そんじゃ行くか。はっ！」

手綱を操つてアプトルを走らせ、勢いよく竜車が道を走っていく。がたがたと音を立てながら車輪が回り、三人のハンターを乗せた竜車はアプトルの力によつて一気に村を飛び出し、森の中へと消えて

いった。

一時間近くアプトルが走り続け、一行はボルシオ水没林のベースキャンプへとやって来た。アプトルを休ませ、テントを設営するとモンスターが寄ってこないための薬を撒く。

続いて竜車から支給品ボックスをおろし、中から携帯食料、応急薬、地図を取り出してそれぞれのポーチへと納める。

続いて必要な物はこれだ。

水没林は文字通り多くの木々が水に沈んでいる。それはすなわち陸地となる場所はほとんどないのだ。増水された川がエリアの大半を占め、それ故にここは水生のモンスターにとって暮らしやすい環境となっている。

そんな彼らと戦おうと思えば、水中から陸上へと引き上げるぐらいしかハンターには戦う手段はなかった。他にあるとすればガンナーが遠距離から攻撃する方法があるが、それではちまちまとしかダメージを与えられず、時間がかかってしまう事が多い。

また、水中でも行動できるように進化した魔族が挙げられるが、これは限定的な話であり、そんな彼らが表に出てくる事が稀なため期待できない。

普通のハンター達でも水生のモンスターに対抗するためには、やはり奴らの領土に危険を冒しても飛びこむしかなかった。そのための装備が近年遂に開発されたのだ。

「酸素瓶に水中メガネ、そして水竜の守り……つと」

支給品ボックスからひよいひよいとそれらを取り出していき、装着していく三人。その中で水中メガネは瑠璃と茉莉は頭の防具に装

着し、桐音はサークレットののためにそのまま頭に装着する。

水中メガネはそのままの意味だ。水中でも問題なく視界を確保するための物で、ハンターの装備に合わせてパーツを変える事が出来るようになってる。

基本的にはバイザーのような形状をしており、頭の防具に装着する事で上げ下げする事を可能としている。

酸素瓶は中にサン草と呼ばれる植物を収めた瓶であり、そこからチューブが伸びて口と鼻を抑えるマスクに繋がっている。サン草は少しの光でも光合成を可能とし、更に生み出される酸素が普通の植物よりも多いため、このように利用されることになった。

また深い海に潜水する際はこの酸素瓶とマスク、水中メガネを同一化させた用具が存在しており、こちらを利用しなければ危険という説明がなされている。

最後に水竜の守り。これは一見宝石のように見えるが、水竜ガノトトスの素材をはじめとする水生のモンスター達の素材を使用し、その秘められた力を引き出して結晶化させた代物だ。

これを身につける事で装備者の周囲に力が包み込み、水中でも陸上に近い動きを可能とさせた。装備している防具の重さもある程度軽減し、ある程度の水流にも耐えられ、泳ぐ事が出来るならば防具をつけ、武器を手にしても問題なく移動できるだけの力を与えてくれる。

これらの装備品があつてこそハンター達は水中でも戦う事を可能とする事出来るようになったのだ。逆に言えば、これらがなければ水中で戦う事は自殺行為となる。

防具の重さによって水中で移動する事も叶わず、酸素を取り込むことが不可能になって溺死するのがオチだ。

それらを身につけ終えると、それぞれローブを脱いで中から今回使用する武器を取り出していく。

瑠璃が取り出したのは一振りの剣だった。一見するとシンプルなロングソードに見えるが、これはダブルセイバーに属する武器の一

種。良質の骨と火竜の素材を使い、高い火属性を内包させたその剣は、火竜剣【火燐^{かりん}】。

リオレウスとリオレイアの素材を使用し、両刃剣を二つ組み合わせたダブルセイバーとして瑠璃の姉、撫子が作り上げたのだ。上位に上がったお祝いの饞別として彼女が打ち、見事に仕上げた一品であり、その強度や切れ味は上位のものに引けを取らない。

柄の中心にあるギミックを使う事で畳めば両刃剣、広げれば柄を中心として左右に両刃剣が存在するダブルセイバーとなる。

今回は太刀ではなくこれを使うようだ。

一方茉莉は桐音が纏っているネブラシリーズに近い禍々しさを感じさせる槍を取り出す。中心はククリに近い刃で、その根元から小さく二つに分かれた刃が存在し、それらを纏める棍は細長い作りになっているランスだ。色合いは暗い黒と血色を使用し、大型のランスではなく対人戦で使うような槍に近いそれはシャドウジャベリン改。

ギネブラの素材を使用し、奴の毒を内包したランスである。

左手に盾を嵌め込み、取り出したそのシャドウジャベリン改を軽く手に馴染ませるように両手で回転させ、チャキツと音を立てて右手で構える。うん、と満足そうに頷くとそれを背負って固定した。

最後に桐音が藍色のローブから取り出したのは重量を感じさせる武器だった。それを広げると斧になる。先端は球体になっており、そこから大小の刃が付き出している形になっている。

球体は変形させると内蔵されている棘が射出され、それが剣の先端となる。それはまさに剣と言うよりはモーニングスターと呼ぶべきだろうが、それはツツコンではないお約束というものだ。

斧と剣という二つのスタイルを切り替えて戦うというギミック武器の始祖であるスラッシュアックス。その一種であるこの武器の銘はヘビィディバイド。

尾槌竜ドボルベルクと呼ばれる獣竜種のモンスターの素材を使用しており、高い威力を持つ武器の一つだ。

しかし普段着には小太刀を帯びていたというのに、ハンターとしての武器がスラッシュアックスとは驚きだ。てっきり双剣使いかと思っていた二人は少し意外そうな視線を桐音に向けてしまう。

それに気づいた桐音は「ん？」と二人に振り返り、その視線がヘビィディバイドに向けられている事に気づくと「ああ、これ？」と軽く持ち上げてみせる。

「あたいは気ままに武器を作っては使ってきているってスタイルだからね。メインは冊子の通りの双剣だけど、色々手を出してきているんだよ。片手剣、双剣、太刀、大剣、スラッシュアックスにダブルセイバー……って具合にね。要は剣だったら何でもいいのさ」

「おー……器用なんですねー」

「まあ、昔から色々やってきたからっていうのもあるけどな。あたいと刃物は切っても切れないものだったって事よ」

どこか愁いを帯びたような瞳をしながらそう呟き、ローブをテントの壁掛けに掛けて戻ってくる。そんな彼女にかける言葉が思いつかず、二人は彼女に続くように壁掛けにローブを掛けた。

ローブの中から必要な物は既にポーチに移してある。また今回のクエストで使用する武器はもう選択した。それからがクエスト開始だ。

その後ローブを着用する事は許されない。それはルール違反なのだから。

許されるのは緊急事態のみ。例を挙げるならば古龍を確認した時か。

そうでなければハンターはローブから他の武器を取り出して戦う事が出来る。古龍相手ならまだしも、普通の飛竜らを相手にする際にそれをやられてはハンターとして成長する事など出来ない。

故にギルドはそのように制限をかけたのだ。

各自、全ての準備を整えた。

これから向かうのは一つの戦場。かのモンスター達にとっては楽園のような場所でも、足を踏み入れる者らにとっては厳しい戦場だ。しかし彼女達は臆すことなくその戦場へと向かっていく。

今、戦場へと乙女たちが舞い降りた。

エリア1に入ると木々の向こうから何かの鳴き声が聞こえてきた。それは三人を威嚇するような声であり、敵意が真っ直ぐにぶつけられてきている。

水生獣ルドロス。

水生モンスターの一角であり、ロアルドロスをリーダーとして群れで生活する存在だ。少しくすんだ緑色の体色をしており、その骨格や外見から見るとトカゲに近いが。

数は三頭。となれば一人一殺で十分だろう。

「ここで軽くお互いの実力を把握するためにあれ、一人ずつで殺らない？」

「奇遇だね、あたかも同じことを考えていたところさ。そんなじゃ、軽く流していこうじゃないか！」

そうして二人は同時に飛び出し、ぬかるんだ地面を駆け抜けていく。ばしゃばしゃと音を立てるはずの足音は極力抑えられており、微かな音しかたてていないがそれでも二人の疾走速度はなかなかのものだ。

その後にくよくよにやれやれと嘆息しながら茉莉も続き、背負っているシャドウジャベリン改に手を伸ばして構える。

その頃にはもう既にあの二人はルドロスとの距離を縮め、己の武器の間合いに入り込んでいた。

腰に帯刀している火竜剣【火燐】を抜き、向こうから噛みついてきたルドロスに向かって一振り。

たったの一振りで十分だ。

噛みつくために前のめりになったルドロスの首を火竜剣【火燐】で焼き切る事で撥ね飛ばす。

一方桐音はと言うと、背中に担ぐヘビィディバイドの柄に手をやり、飛びかかってきたルドロスに合わせて抜き放ち、ギミックを始動させて剣モードに切り替えつつ体を捻ってルドロスをやり過ごしつつその頭へとスパイク球体を叩き落す。

ピンポイントに頭へと振り下ろされたそれはルドロスの頭蓋骨を打ち砕き、その一撃のもとに絶命させる。

その鮮やかな攻撃に残った一匹は恐怖を感じ、少しづつ後ずさりしはじめる。だがそれを逃さず、瑠璃と桐音の背後から跳躍していた茉莉がシャドウジャベリン改を構えつつ振りかぶり、勢いをつけて投擲する。

それは狙い狂わずルドロスの額を貫き、更に先端から染み出る毒もルドロスの頭から侵していき、その一撃だけでルドロスは絶命してしまう。

結果、全員一撃必殺で終わらせてしまった。

軽く武器を振って血を払い、鞘や背中に戻した三人は倒れ伏すルドロスの死体に剥ぎ取りナイフを入れて素材を剥ぎ取っていき、残った死体はそのままに隣のエリア2へと移動していく。

森の中に南北に広がる広場となっており、ここもまた雨によってほとんどぬかるんでいる状態だ。ルドロス達の気配はなく、いるのは大型昆虫の一種であるオルタロスやブナハブラぐらいなものだった。

彼らを刺激させないように静かにその隣のエリアであるエリア4へと移動していく事にする。強い気配はそのエリア4から感じられ

るのだ。

まず間違いなく標的はエリア4にいとみているだろう。現実性を高める要素として、あの気配の周りには小さな気配が多く存在している。恐らくルドロスを囲んでいると思われる。

「前線はあんたもやってるんだろう、瑠璃？」

「そうね。あたしが前に出て斬りこみ、茉莉が援護していく形を取ってるわよ」

「だろうな。あたしも前に出ていく主体だから被ってるってことになるか。……となると、どっちかが前衛、どっちかが遊撃という事になるわけだが、どうするよ？」

「……武器的にあんたのスラアクが前衛向きでしょうね。あたしが遊撃で斬りこむことにするわ」

あの一瞬の出来事でお互いの実力は何となく把握した。ルドロスの飛びかかりを回避しつつの一撃。やはり出来る人物だという事がわかった数秒間。

実力や戦い方が似通っているならば、武器の特徴を生かした位置取りを取るしかない。

広げればリーチが伸び、また気刃を放つ事で一気に周囲を薙ぎ払う事を可能とするダブルセイバー。これで周囲のルドロス達を一気に始末していく事にする。

そして桐音のヘビィデバイドを主体としてロアルドロスへとダメージを与えていく。時に瑠璃も、時に茉莉も加わって攻め立てていく、それが大まかな作戦となる。

またここに来る途中にお互いが持っている道具についての確認もしており、それもあるからこそ桐音は二人の役割を何となく察知する事が出来たのだ。

といっても二人の性格から考えても何となく推察できたという点もあるのだが。

ゆつくりと足音を極力立てずにエリア4へと入り込み、木々の陰に身を隠してそつと奥の方に広がる大河の方を覗き見る。

そこには一種の王国が存在していた。

群れを成す姫君たちの数は十頭近く。各々リラックスした様子であり、眠っているもの、水に口をつけているもの、そして王に寄り添っているものと様々だ。

その王国の中心には王がいる。

スポンジ状の黄色いたてがみを纏い、堂々とその場に佇むそれはまるで愛でるようにその姫君たちを見守っている。

あれこそが今回のターゲットの一つ。

水獣ロアルドロスだ。

彼らはまだ瑠璃達に気づいておらず、平穏な日常を過ごしている。だが彼らがこのボルシオ水没林の街道近くに存在している限り、ここを通り抜ける旅人に危険が及ぶ。

ここから立ち去ってくれるならばいいのだが、この群れは数日ここに居座っている。だからこそこれ以上ここを封鎖させないためにもこのロアルドロスには退場してもらわねばならない。

「目標発見。さて、斬りこむタイミングを窺うとしようかね」

「そうね。瑠璃、大丈夫ね？」

「大丈夫です、問題ありません」

ポーチから赤い笛を取り出し、腰に下げると続けてポーチから一つの玉を取り出して懐に入れる。その間に瑠璃は鞘に収めている火竜剣【火燐】に指を掛け、桐音も手を柄に掛けながらいつでも飛び出せる体勢に入っている。

ロアルドロスの視線は少し瑠璃達の方へと向けられているが、まだ奴は彼女達に気づいていない。奴はただルドロスの様子を見守っているだけに過ぎない。

飛び出す機会はただ一つ。

奴の視線が向こう、大河側へと向けられた時だ。

「……………」

静かな時間が過ぎていき、聞こえるのは風に揺れる木々のざわめきと大河の水の音。

ロアルドロスは静かに見守り、ルドロス達はこの穏やかな時間を楽しむような声を漏らす。

彼らにとつての平穩　それを壊すのは忍びないが、残念ながらその王国の平和を打ち砕いてくれよう。

ロアルドロスの視線が動き、大河の方へと向けられた瞬間、弾丸が射出されたかのように桐音が勢いよく飛び出していく。

それに続くように瑠璃もまた疾走を開始し、それぞれロアルドロスとそれを取り巻くルドロスへと距離を詰めていった。

「　　っ!?!?」

当然、突如現れた敵にロアルドロスが気づかないはずもなかった。すぐさま身構え、唸り声を上げるがそうする間に既に二人は己の武器の間合いまで詰めてしまっていた。

「はあっ!」

振り抜かれたヘビィダイバイドの刃がロアルドロスのたてがみを薙ぐように振り抜かれ、黄色いスポンジに赤が混じる。だがそれにとどまらず、滑りやすいぬかるみの地ではなく周りと比べてまだ固い部分に足を乗せて体を固定させ、振り抜いたヘビィダイバイドを引き戻し、薙いだ部分と交差させるように振り下ろす。

「ギユオオオオオオオオオオオオッ！！」

噴き出す血を感じながら敵の侵入にロアルドロスが吼える。そのまま桐音へと爪を振り上げて叩き落とすが、バックステップを刻んでそれをやり過ぎ、横から飛びかかってくるルドロスへと柄を突き上げて弾き返し、体を捻って首を刎ねる。

向こうでは既に瑠璃が二頭は仕留めており、広げられた火竜剣【火燐】を勢いよく回転させて刃から炎を軽く噴き出させていた。

背後からは茉莉が赤い笛、鬼人笛を吹き鳴らして特殊な粒子を生させ、それは茉莉達へと浸透して活力を与えてくれる。

十分に力がみなぎった事を感じると鬼人笛をポーチに戻し、茉莉もまた己の武器であるシャドウジャベリン改を構えた。

各々位置についた瞬間、ヘビィディバイドの先端をロアルドロスに向けた桐音が不敵に笑みを浮かべてみせる。それはまさに獲物を前にした狩人であり、戦いに愉悦を見出す戦士の顔でもあった。

「さあ、狩りの時間だ。楽しませてもらおうかね！」

「ギユオオオオオオオオオオオン！！」

正面からメンチを切る桐音に、再びロアルドロスが吼える。

今、水没林に戦いの火ぶたが切って落とされた。

水獣の群れ（前書き）

ロアルドロスとの戦闘開始。

3rdではそんなに脅威と感じなかったでしょうが、3では水中戦での先生役でした。

水中での敵の動きの基本はこいつから教わったといってもいいでしょう。

水獣の群れ

現れた敵を取り囲むように最初の攻撃に巻き込まれなかったルドロス達がゆつくりと取り囲むように移動していく。だが数が減り、最初の襲撃で三人の戦意にあてられたものが多い。

だがそれを振り払うようにロアルドロスが吼える事で正気を取り戻させた。更に一頭に軽く視線を向け、何かを伝えるように小さく鳴くとすぐに正面で構えている桐音へと戻した。

小さく息を吸いこむと、口から水の塊を撃ち出す。弾丸のように撃ち出されたそれは桐音を捉えられず、しかし標的を外したその弾丸はぬかるんだ地面を弾けさせるだけの力を見せつけた。

横に軽く跳び、滑るようにまたロアルドロスへと距離を詰めつつヘビィディバイドを突き出してやる。球体がロアルドロスの頬を捉え、返す刃で打ち付けられた部分を斬る。

鈍器の衝撃から続く痛みにもロアルドロスの表情が一瞬曇ったが、それで怯むほど軟ではない。

体を捻りながら桐音へと噛みつきにかかるも、数歩下がってやり過ぎされてしまう。

「っと、突き抜けますよ」

その隙にいつの間にか接近していた茉莉が桐音の近くを駆け抜け、両手で構えるシャドウジャベリン改を操ってルドロス達を薙ぎ払っていく。ロアルドロスを守ろうと桐音へと攻撃を仕掛けようとしていたところの言葉通りの横槍。

薙ぎ、突き刺し、吹き飛ばして道を強引を作り上げてロアルドロスの背後を取った茉莉は勢いよくシャドウジャベリン改を回転させて遠心力をつけ、鋭い切っ先でロアルドロスの腰から尻尾を薙ぎ払った。

刃によるダメージだけでなく滲み出る毒もロアルドロスを侵すその一撃は、ロアルドロスの意識を一瞬茉莉へと向けさせてしまう。それを見越した桐音が再びヘビィデイドを突き出し、そこからギミックを始動させて剣モードに切り替えてロアルドロスの頭を叩き斬るように振り下ろす。

それから横に切り払いつつ顔から離れるように移動し、反撃として薙ぎ払われる爪を剣で受け流しながら逸らして見せる。

「クック、見えるぜ。そら、くらいなっ！」

逸らされた爪を狙って少し腕を引いて力を溜めた後、一気に突き出すようにしてヘビィデイドを叩き込む。だがそれだけではただの突きだ。しかし剣モードの突きには特殊な力が存在している。

柄にある引き金を引き絞った瞬間、柄から強いエネルギーが発生して切っ先へと収束され始めたのだ。

スラッシュアックスにはピンが内蔵されており、それには自然の粒子を取り込んで一つの力を発現させる効果を秘めている。それは斧モードの時には発現しないが、剣モードになる事でその力を発揮してくれる。

斬るたびに力が刀身へと纏われ、敵にダメージを与えると同時にピンの力が付与されているのだ。これは弓に使われるピンとは違い、スラッシュアックスごとにあらかじめ内蔵されているため、切り替える事は出来ない。

このヘビィデイドに内蔵されているのは滅気ピン。相手のスタミナを奪っていく効果があり、更に頭に命中すれば相手の意識を揺さぶる効果も存在している。いくなればハンマーなどの鈍器と同じ効果だ。

そして突き状態から引き金を引いた時、その力が先端へと収束する事で更なる力を発揮するのだ。収束しているそれにもダメージが存在し、その力が最高に高まると爆発を起こしてしまうのだ。

だがその爆発が最高の攻撃となるのがスラッシュアックスだ。

しかし桐音はその最大攻撃を出さないままに引き金から指を離し、エネルギーの反動で軽くヘビィディバイドが暴れるもののそれを強引に抑えこんだまま引き戻す。

「ふんっ！」

解放は確かに威力が高い攻撃ではあるが、その分武器に対しても少なくないダメージを与えてしまう。それ故に何度もぶっ放せるような代物ではない。無理をすれば武器にガタが来てしまい、鍛冶屋に修理を出さなければならなくなる。

強力故について回る障害というわけだ。

「はっ、ふっ！」

戦場にはもう一人いる事を忘れてはならない。桐音へとルドロスが近寄らないように引き付け、まとめて狩っている瑠璃がいるのだ。柄を中心に両側に存在している刃には赤く燃える炎が発現し、振り回すたびに宙に踊る。

そしてダブルセイバーを中心に柄を両手で操り、主に回転させる事で連続して相手に攻撃する武器だ。

寄ってきたルドロス達を巻き込むような位置へと入り込み、まるで踊るように体を動かしながら両手で火竜剣【火燐】を操る。その度に刃はルドロス達を薙ぎ払い、同時に発生した炎が傷口を焼く。

離れた所にいるものは横回転していた火竜剣【火燐】を縦に回転させ、流し込んでいた気を圧縮させて振り抜かれた刃に乗せて放つ。これが気刃だ。

己の気を刃と化して放つ遠距離攻撃の手段。近距離をメインとする剣士タイプの遠距離攻撃の手段である。これを習得するには気の扱い方を覚えなければならないが、覚えるだけの価値はある。

音にもわかつていようだ。

それに背後からはボディプレスによってあがった尻尾が叩き下ろされるのを見送った茉莉が攻め立てる。基本の突きを連続して放っていくその様はハンター達が行う基本の重量感のある突きとはまったく違う。

細身のランスという事と、茉莉の高い筋力によって操られるシャドウジャベリン改はロアルドロスの腰に次々と突き刺さっていく。その硬い皮を突き破り、中にある肉へと刃が傷つける。

無表情に近い茉莉だったが、少し昂り始めている桐音の様子に僅かに苦笑を見せ始めた。音を立てながら回転するシャドウジャベリン改の刃に己の気を纏わせていきつつロアルドロスと桐音の様子を窺っていく。

「昂っているようですがまだ冷静ですね。っと、危ない」

背後を責めてくる敵には尻尾を振り回して追い払う。空を切って迫ってくる尻尾を何度かやり過ぎし、腰から背中にかけて貫く気槍を撃ち出してやる。斬撃が気刃ならば、貫くのは気槍。貫通力に優れるように調節された気は突きだされたシャドウジャベリン改によって放たれ、敵を貫く槍と化す。

毒を含んだその気に貫かれ、側面からは刃に切り裂かれるだけでなく焼かれ、このまま陸上で戦い続けるのは不利だと悟ったロアルドロスは体を捻って周囲を尻尾で薙ぎ払いつつ大河に向き直る。

そのまま三人を置き去りに勢いをつけて飛び込み、大河の奥へと消えていくではないか。

普通ならばこのまま手出しできないが、今の彼女達ならば後を追う事が出来る。

一旦それぞれ手にしている武器をしまつと、持ってきた水中用装備を装着していく。

「じゃ、気をつけなさいよ」

マスク越しの少し曇った声で瑠璃が念を押すように言う。これから行われるのは勝手の違う戦場だ。瑠璃と茉莉はその種族上空中戦もこなすが、それは昔から翼を使って高速移動の練習をした事があるから出来る事。

更に言えばそれを得意とし、売りにしている現役ハンターに元ハンターが存在し、彼女達からも技術を仕込まれた甲斐があつてこそその空中戦。

しかし陸、空を駆ける二人も海……すなわち水中戦はそんなに経験を重ねていない。

でも戦えないというわけでもない。これもまた一つの経験積みの機会。

バイザーを下して水中メガネをかけ、マスクから問題なく酸素を補給できることを確認し、水竜の守りの力を発動させて三人は各々大河へと飛び込んでいく。

ザパンツ、と大きく水を跳ねさせ、ドルフィン泳ぎで一度水中へと潜りながら前進していく。水は少し濁っているようだが水中メガネのおかげで問題なく視界は確保できている。

冷たい水が肌を刺激するが水竜の守りのおかげで肌寒くは感じない。それに防具と武器の重量がかかっているというのに、それを感じさせないだけの速さで水中を泳いでいける。

これが水竜の守りの加護のおかげだ。やはりこれは革新的な発明だと改めて思わざるを得ない。

また水竜の守りはもう一つの効果もある。

水中でしかもマスクをしている彼女らは声を出してもそれが相手に届かないだろう。声はマスクによって遮られ、ただ独り言を呟くだけに終わってしまう。

そこで水竜の守りの力が働くのだ。

これが近くにある水竜の守りと共鳴する事で結びつけ、装着者の

声を粒子を伝わらせて届けてくれるのだ。粒子が力の道を作っているおかげだと推察されており、これが有力な説とされている。

そんな技術の結晶の加護の下、広がった戦場の範囲。

大河を潜りながらこの中に飛び込んでいったロアルドロスを探す。しかし姿は見えず、気配もこのエリアから消えてしまった。

「エリア5へと移動したと思われませぬ」

「この先、か。……なるほど、確かに待ち構えているかのように動いているじゃないの」

「そうね。しかも小さな気配が近づいてくる。恐らくルドロスじゃないかしら」

「先ほど一頭だけここに飛びこませていましたね。たぶんそれが他のエリアにいる仲間に連絡したのでしょうか」

泳ぎながらも三人は気配を探る事をやめる事はしない。何せ水中にきたという事は、水中での行動を主とする魚竜種、チャナガブルがいる可能性が高いのだ。

川底の、しかも土や砂の下に潜りこんで川底に同化して姿を消し、髭だけを出してあたかも川底に生える草のように見せかけて水の流れに乗せてみせる事で獲物を誘う特性がある。

それにつられて寄ってきた魚、あるいはチャナガブルに気づかない獲物をその大きな口で一気に取り込み、丸呑みにしてしまう。それが奴の捕食行動だ。

それはハンターに対しても同じであり、チャナガブルがどこにいるのか気づかないハンターを丸呑みにしたという報告もよくある話だ。

故に川底にも気を配らなくてはならない。ロアルドロス達にはかり目や気を向けて、気づかないところからチャナガブルに奇襲されてしまえば、自分達より前にこのクエストをやったハンター達の二の舞だ。

いや、チャナガブルがいると知っているという点で自分達が有利な分、奇襲を受けてしまえば自分達の方が笑いだ。

少し濁った底を見回しながら茉莉は気配を探ってみるが、チャナガブルらしき気配は感じられない。ただ隠れるだけでなく気配まで消してしまっているからこそ、警戒心が強い小魚なども油断してしまふ。

だからこそいつも以上にセンサーを張ってみるが、やはり奴の気配はないように思える。

どうやらチャナガブルもまたここにはいないようだ。

そのままエリア4からエリア5へと移動すると、視界の左側に少しずつ崖が現れていく。道は右寄りになっていき、そして右側は水没してしまった森となっていく。

地図を見てみるとここは逆L字がたになっており、左側にある崖がエリアを狭め、更に右手にある森が挟み込むようになっており、道がこのようになっていいるのだ。

その地形のまま水が溜まり、ここは少し特殊なエリアになってしまっている。

同時にハンターにとってはやり辛い地形になっていると言ってもいいだろう。何せ崖のせいでエリアの奥が見えないのだ。これに隠れるようにして忍び寄られては道を曲がる時に襲い掛かれた場合、反応出来なければ大きな負傷になるのは目に見えている。

気づいていれば問題ないが、気づかなければまさしくそれは奇襲となる。しかも陸上と違い、ここは水中。水竜の守りがあるとはいえ、体が上手く動かなければ守るだけでも難しいのだ。

なので気配を探りながらゆっくりと移動する事にする。

「いるわね」

「ああ、待ち構えてやがるな。そして援軍も近づいてきているときたもんだ。まったく、寄せ集めのルドロス連れてきてもしかーないっていうのに」

「いえいえ、混戦に持ち込むという手が考えられますよ。油断は禁物です、桐音さん」

「水中の混戦、か。チャナまで混ざったら確かに面倒なことになりそうだな。こういうのはあたいは好かんのだけどね」

「もしかしてサシでの勝負が好きな系？」

「いいや、好きじゃない」

ちゅちゅち、と指と首を軽く振り、

「大好きさ」

とバイザーとマスクで隠れたその表情を笑みに変える。それは実に楽しそうなものだったが、二人からすればちよつとした程度の違いでどうしてそんな大それた行動を見せるのかとツツコミたい。

「一対多数なんてまどろっこしいことは嫌いだ。戦いつてのはやはりお互いの全力をぶつけ合ってこそだろう。……戦いこそ、至高。身を削り、お互いの命を懸けてこそ戦い！……昔から色々やってきたもんだからねえ、ちよいとあたいは戦いつてもものに目がないのさ」

「さつきはその逆の事をロアル相手にやってるけどね」

「ま、それはそれさね。チャナさえいなければあたいは一人でやるつもりだったけど、……現実はそのうまくはいかないもんだね」

背中にあるヘビィディバイドに手を伸ばし、崖に隠れて見えなくなっているロアルドロスを感じながらゆっくりと前に進んでいく。そうしてロアルドロスまで十数メートルまで接近し、そこで力を溜めて飛び出す体勢に入る。

しかしそこで乱入者。

森の奥から次々とルドロス達が現れ、大河の中へと飛び込んでく

る。水音が響き、体をくねらせながら真っ直ぐに桐音達へと迫っていく。

「思った以上に早いですね。しかも水生獣ですからここはあちらに有利です」

「まったく……群れるんじゃないよ!」

吼えながらヘビィディバイドを振り回すも、素早く回避した一匹には当たらない。が、桐音へと噛みつきにかかった三匹が纏めて切り払われる。

「ギユオツ!」

回り込んできたルドロスが桐音へと噛みつきにかかり、尻尾を振るってくる。振り抜いたせいで硬直していたところへの反撃だ。

「ちっ、鬱陶しい!」

「本当に多数相手は嫌いなものね、ふっ!」

群がってくるルドロス達を火竜剣【火燐】で切り払っていき、茉莉がシャドウジャベリン改を回転させて強い水流を生み出しながら薙ぎ払う。

ルドロス達は二人の攻撃によって傷つき、離れていくが、そこを狙った存在がいた。

「ギユオオオオオオオオオオ!」

崖の向こうから勢いよく呐喊してくるロアルドロス。ルドロスが散り、三人が揃っているのを見計らったの行動だった。茉莉が盾を持っているとはいえ水中で、しかも盾よりも大きな体での突進が防

ぎぎれるわけでもない。

スピードを売りにしている瑠璃でも、水中ではそれを発揮する事は不可能。あのスピードは翼を使つての高速移動であり、翼を広げて羽ばたけない水中では無意味なのだから。

「くっ……」

「……っ」

「ちい……!!」

高速で泳ぐことで水流を生み出し、スピードに乗つたロアルドロスの突進により三人はバラバラに吹き飛ばされてしまう。避ける事が出来ず、防御するしかないと判断した三人は防御体勢を取り、気で身を守つたがそれでも殺しきれない衝撃が襲い掛かる。

それだけでなく、水中で吹き飛ばされれば耐性が強制的に崩される。それを狙つてルドロス達が追撃を仕掛けてくるのだ。

完全に流れがロアルドロス達に傾いてきている。

「こ、の……！ 調子に乗らないでよね！」

寄つてくるルドロス達を火竜剣【火燐】を回転させて反撃するが、それを切り抜けて瑠璃の足へと噛みつきに来たルドロスがいる。回避性能に優れるナルガシリーズではあるが、防御面は中盤クラスと叫ぶところか。

ルドロス程度の噛みつきには耐えられる。が、纏わりつかれては動きづらくなる。

それにもう一つ、瑠璃と茉莉がここで戦いづらい理由が存在する。彼女達は火竜の力を行使する事が出来るが、それは水中では無意味という事だ。水は炎を消してしまう。彼女らのもう一つの武器である火炎操作が使えないのだ。

ロアルドロスは火属性が弱点だが、この水中でその攻撃は出来な

いというのは大きな違いが生まれる。

だが火竜剣【火燐】の炎は斬った瞬間に発生し、内包されている炎の火力は撫子の技術によって高められている。加えてアイルーが持っている技術の一部を習得し、独自に改良を加えた事で濡れていても炎が発生するようになっていた。

これは雨の日でも爆弾が使えるという彼らの技術が元になっている。つくづく彼女の才能が恐ろしい。

「ギユオオオンッ！」

動けなくなっている瑠璃を見逃さずにロアルドロスが襲い掛かっていくが、その前方に茉莉が入り込み、盾で何とかロアルドロスの進撃を止める。しかしやはりというべきか水中という事もあって完全に衝撃を殺しきれていない。

「くっ、やはりやりづらいですね……。だからといって、ここであきらめるようなものはしません！」

足元から気を放出させてこれ以上下がる事を阻止し、逆に押し返すように盾と腕力でロアルドロスに反撃の意志を見せつける。じりじりとロアルドロスを押し返し、右手に持つシャドウジャベリン改でロアルドロスの顔、喉へと突き刺していく。

その刃と内包されている毒により、ロアルドロスの進軍が止まる。それを見計らって盾でロアルドロスの顔を殴りつけ、その一撃に怯んだ隙について桐音が一気に距離を詰めて斬りかかる。

たてがみを切り裂き、返す刃で胴体を薙ぐ。

当然ロアルドロスを守るためにルドロス達が寄ってくるが、ヘビイディバイドのリーチは広く、回転させる事で寄ってきたルドロス達も薙ぎ払われる。その事にロアルドロスが怒りの声を上げるが、黙らせるように茉莉がまた盾で殴りつけ、シャドウジャベリン改で

突いていく。

「いい加減離れなさい！」

足にまとわりつくルドロスに火竜剣【火燐】を突き刺し、もう一つの刃で体当たりしてくるルドロス達を薙ぐ。いつもならば問題なく処理できるのに、水中というだけでやはり辛い。

まだ完全に慣れていない状態で数で押されるだけでここまで違う。侮ったというわけではないが、ルドロスの数がここまでいるというのが驚きだ。今ここにいるだけでも十頭を超えている。何頭かは処理したが、それでも数匹は存在して瑠璃達とロアルドロスの動きを見守っている。

「……………」

寄ってくる気配がないならば、一度ロアルドロスへと接近するのみ。瑠璃は水を蹴ってロアルドロスへと距離を詰めていく。当然それを阻止するようにルドロス達が接近してくるが、「まどろっこしい！」と火竜剣【火燐】を回転させて左右から寄ってくるルドロス達を牽制、近づきすぎたものは斬られてしまう。

「ギユオオオオン！！」

またしても目の前でルドロスが斬られたことに怒り、ロアルドロスが突っ込んでくる。しかしそれを防ぐようにヘビィディバイドを振るいながら剣モードへと切り替える。

「鬱陶しい戦いはこれまでにさせてもらおうじゃねえか。茉莉、あたいが頭をやる！ あんたは周り、そして補佐を頼むよ」
「お願いします」

軽く後ろに下がったところをすかさず桐音が入り込み、剣モードになっているヘビィディバイドで頭に斬りかかる。しかしやはりとすべきかそれは斬るといふよりも殴ると言つた方が正しいだろう。加えて剣モードになっているおかげで滅気ビンの効果が発揮し、先端の球体に力が宿つて更なる鈍器としての力を見せつけてくれる。リーダーの危機を見過ごせずルドロス達が桐音へと向かつていくが、それを防ぐように茉莉がシャドウジャベリン改を振るつて止めていく。リーダーを救出に向かえないルドロス達は苦々しい声を漏らす、こちらとしても死活問題だ。

手を抜いている暇などない。

「ギョオンッ！」

目の前にいる桐音へと噛みつき、頭突きをしていくが桐音はそれをヘビィディバイドで受け流し、反撃として一撃一撃を当てていく。当然頭を狙つて一撃当てていつているため、少しずつロアルドロスの動きがぎこちなくなっていく。

どうやら眩暈状態に近づいてきているようだ。

それを見逃さない桐音、そして瑠璃ではない。

「炎剣・旋熱刃！」
せんねつじん

火竜剣【火燐】を回転させたままロアルドロスへと叩きつけるようにし、両の刃が連続してロアルドロスの体を傷つけていく。頭を揺さぶられるだけでなく何度も何度も斬りつけられたことでロアルドロスが苦悶の声を上げ、体をくねらせ始めた。

一度距離を取るよう後ろへと下がり、そのまま立ち泳ぎをしながら瑠璃と桐音の出方を窺っている。周りの生き残っている数等のルドロスもまた同様だ。斬られていったルドロス達の死体がそこら

に浮かんでいるか、沈んでいる。

流れは再び瑠璃達へと傾いている。

茉莉はシャドウジャベリン改を少し弄りながらルドロス達の位置を確認し、もう一度ロアルドロスへと視線を向ける。

上下左右に気を配らねばならない水中は相手の位置を確認しなければ不意を突かれる可能性がある。瑠璃の補佐役を務めている茉莉は癖として相手の位置関係を確認する事が多い。

というよりプライベートの時からよく観察している事が多いため、もはやこれは日常的だった。

(……？ 妙ですね。一匹足りない)

浮いている死体、生き残っている個体を数えてみたが、どういうわけか一匹足りなかった。死体の数が減っているのだ。

死体が姿を消す何てことはあり得ないが、実際に姿が消えている。

(これは一体 っ!?)

ふと、川底の方へと視線を落としたとき、何かが僅かに動いたような気がした。

見間違いなにかじゃない。砂がゆらりと動いたのだ。

それに従って生えているはずの水草が動いたようにも見えた。

そんな馬鹿な話があるはずがない、普通ならば。しかし現在入っている情報を知っているならば、あれが見間違いで片付けられるようなものではないという事はすぐに思い至る。

「みなさん、下に注意を！ 奴がいます！」

茉莉が叫び、その言葉の意味に気づいた二人は下にも気を配りそして突然強い水流が発生する。

いや、これは自然な水流ではない。川底に向かって強い流れが発生した逸れが自然なものであるはずがない。それに抗うように足から気を放出させてその水流から逃れるが、水流はゆっくりと横にずれていき、ルドロスの死体や小さな流木、魚達を巻き込んで吸い込んでいく。

ロアルドロスも突然の水流に反応し、唸り声を上げながら吸い込まれないように後ろへと立ち泳ぎで逃げていく。

そしてあれに逃げられず、巻き込まれてしまったものかというと、水流の先にいるものへと向かっていく。

そこにいたのは大きな口を持つ魚のようなもの。開かれた口には鋭い牙が生え揃い、濃い茶色い肌をした体、額の先には提灯のようなものがぶら下がっている。

あれが奴の異名の元となったもの。

灯魚竜チャナガブル。奴こそがこの水没林で行われたクエストに乱入してきた存在だ。

水流は奴が大きく息を吸いこんでいった事で発生したものだ。ただの息吸い込みであれほどの水流を発生させてしまう。そしてそれに巻き込まれた者の末路は

「グオンッ！」

砂の下から勢いよくチャナガブルが飛び出し、吸い込んできた物を纏めて口の中へと呑み込んでいく。

そう、文字通り一口で呑み込んだ。丸呑みである。

ルドロスの死体といっても結構な大きさをしている。それすらも丸呑みだ。軽く咀嚼をしてごくと呑み込むと、その小さな瞳がゆっくりと瑠璃達を見回していく。

「ギュルルル……」

「グルルルル……」

チャナガブルが何かを考えるかのような声を漏らすと、ロアルドロスがそんなチャナガブルを睨みながら唸る。奴からすれば死んでしまった仲間を喰われてしまったという事になる。思うところはあ
るようだ。

そして瑠璃達からすればここで来たか、としか思えない。ついでにいうとタイミング……というより地形的に悪い。

ここは狭い。

崖と森に挟まれた地形をしているため、横幅が狭い。

いや、これでも人が泳ぐだけならば広さはある。だがそこにロアルドロスとチャナガブルまで存在していると狭く感じるのだ。

「どうする？」

「決まっているでしょう。ここは一時撤退するしかありませんよ」

「ちい、仕方ないね……選択肢はそれしかないか……！」

こんな狭い水中で二頭同時相手など危険すぎる。ならば体勢を立て直すという意味でも撤退しか道はない。幸いチャナガブルの吸い込みから逃れるため、エリア4側へと逃げていた事もあり、すぐに撤退する事は可能だ。

後はそれをあの二頭が見逃してくれるかどうかだ。

「グバアアアッ！」

チャナガブルが威嚇するように大きく口を開けながら体を震わせる。
る。

「ギユオオオオッ！」

舐められないようにとロアルドロスもまた威嚇するように吼えた。

お互いの意識はそれぞれの敵へと向けられた今が好機。三人は静かに後ろへと立ち泳ぎをしていき、機を見て一気にドルフィンでエリア4へと移動していく。

残された二頭は威嚇を繰り返した後、ロアルドロスがチャナガブルへと一気に突進していき、チャナガブルがまた大きく口を開けて迎え撃った。

轟つ、と強い水流と衝撃が発生したが、すでにエリアにいない三人は強い気と気がぶつかり合っているとしたか判別できないのだった。

灯魚竜と水獣（前書き）

乱入してきたチャナガブルにより一時撤退した三人。休息を挟み、そして獲物がやってくる。

水没林クエスト決着編。

灯魚竜と水獣

エリア4へと撤退していった三人はすぐに陸上へと上がり、バイザーとマスクを取って軽く頭を振って水気を取る。加えて炎を発生させて下がった体温を一時的にでも戻していく事にする。
さて、どうするか。

エリア5からは時折あの二頭の気配がぶつかり合っているような気がするが、詳しい事まではわからない。だがあの二頭がお互い潰し合ってくれるならばそれはそれでいい。
それによって負傷してくれるならば僥倖だ。

「やれやれ、どうすんのよ？」

火竜剣【火燐】に砥石を使いながら瑠璃が言う。同じように茉莉と桐音も己の武器に砥石を使って切れ味を戻していきながら、先ほどの戦いについて思い返していった。

水中での戦いはやはり陸上と違って勝手が違う。ルドロスといえども水中で数で攻められてはやり辛いことこの上ない。

陸上では楽に倒せる相手でも、水中ではそうではなくなる。

「どちらも水中で戦う事を主としているけど、それは一頭を相手にする場合。二頭揃えばめんどろです。エリアの地形云々の話だけではないです、文字通りめんどろです。……やはりどっちかを待って打って出るしかないでしょう」

「さっさと殺るならロアルから相手にした方がいいと思うけど、チヤナもチヤナでめんどろな相手だ。……そこで提案したいんだけど
な」

「聞きましょう」

「ロアルとチャナ、どっちかと戦うんじゃない、戦力を分散させるってのはどうだい？」

「……二人と一人でそれぞれに当たるって事？」

「そうさ」

要は瑠璃と茉莉、そして桐音にわかれてあの二頭と戦っていくという事になる。陸上ならまだしも水中で一人で戦うというのは危険ではないだろうか。水中装備があるとはいえ、勝手が違う世界での一人の戦いは厳しいのではないかと言うのが二人の見解だ。

味方がいた方がまだ戦えるはずだ。効率で言えばもしかすると分散させた方がいいのかもしれないが、安全に行くならば一緒にいた方がいいだろう。

「あたしは反対。纏まって動いた方がもしもの時に備えられるわ」

「普通ならばそれでもいいでしょうが、今回は水中です。分散しない方がよろしいかと思えます」

「……やっぱりそうなるか。残念だねえ」

軽く頭を掻きながらさつきまで泳いでいた大河を見やる。さつきまでと違って大河は静かなものであり、隣のエリアで戦っていたのが嘘みたいだ。

そこにあるのは穏やかな自然。しかし戦士が入り込めば、ひとたび戦場へと姿を変える。

人族にとっては苦行な場となる戦場は、今はただ静寂な空間となっている。

切れ味が戻ったヘビィディバイドを確認し、それを背負うとエリアの方へと気を向ける。相変わらずあちらの方は盛り上がったいるようだ。あの戦場に入れないのが少し残念でならない。

「……戦闘狂って、本当にめんどろね」

「どうして戦いが好きな人って多いんでしょうね」

「この世が狩猟世界だからじゃないの？ 狩るか狩られるか、弱肉強食の戦いの世界。……そりゃその道にのめり込んだら戦いが好きになるだろうし、ひどくなれば戦闘狂になってしまっわよ」

「……本当に困ったものですね」

とはいえ二人の母親もまた若干戦いを好んでいる節があるように思える。それが今も彼女を現役たらしめる原動力になっているのかもしれない。それにあの兄も戦いは好きな方だし、あの特別れた金髪青年もまた己の性の通り戦いを好んでいる。

戦いそのものを好むのか、強敵と戦えることを喜びとするのか、と少しの差異はあるが、それでも彼らが戦闘狂という事には変わりはないだろう。

だからといって責めるつもりもない。何が好きなかは人それぞれなのだから。

武器の切れ味も戻したところでこれからどうするかという相談を始めるとしてよう。

「さて、今はあの二頭が分散してくれるまで体を休めましょう。こんがり肉でも食べますか？」

「そうね。一つ腹ごしらえが必要だね。じゃ、あたしは山菜でも用意してくるから、そっちはよろしく」

「ん。桐音さんはどうします？」

「じゃ、あたいは魚でも捕ってくるか」

またバイザーとマスクをつけて軽く体をほぐすように動かすと躊躇いなく大河の中へと飛び込んでいく。その手に武器はないが、薄く気を練り上げていたところを見るとそれで武器を顕現させるつもりだろう。

それを見送ると瑠璃も山菜を求めて森の中へと入っていく。茉莉も肉焼きセットを用意し、生肉を取り出してセット。塩コショウに香辛料を用意すると軽く指先から火を出して準備完了。

いい感じに焼けてきたのを感じながらも、茉莉は気をエリア5へと向け続けている。現在は休息中ではあるが、それでも隣のエリアに存在している二頭が動いたのか動いていないのかを感じ取らなければならぬ。

そうしなければ奇襲を受ける。それを受ければまた戦線が崩壊。再び体勢を立て直す為に撤退しなければならぬ。それは避けなければ。

「……まずは一つ、と」

タイミングよく肉を上げるとそこにはジューシーに焼けたこんがり肉が存在している。肉汁が滴り落ち、アクセントとして振りかけた塩コショウに香辛料が程よく存在している。

それを用意していた皿に乗せ、もう一つ生肉をセットして焼いていく。

そうして食事の準備を進めていくのだった。

目の前にいるチャナガブルへと突撃していくロアルドロス。チャナガブルの上を取り、その背中へと押し掛かるかのように頭突きを

していく。ロアルドロス¹の重量がそのまま力となって襲い掛かり、チャナガブルが小さくうめき声を漏らす²が、するりと滑るように川底を泳ぎ、尻尾を振るってロアルドロスに反撃。

尻尾には麻痺毒が含まれており、背後から襲ってきた敵にも対応している。ロアルドロスはそれを避け、振り返ろうとしているチャナガブルへと何かを吐き出した。

それは白い粘液みたいな塊。振り向いてきたチャナガブルの顔面を捉え、粘液はその顔へと張り付いてしまう。

「グバアアツ!？」

付着したそのねばねばしたものにチャナガブルがかぶりを振って振り払おうとするも、それはしつかりと顔に張り付いて離れる事がない。それに戸惑うチャナガブルへと叩き落とすように尻尾を振るうが、それを察知したチャナガブルが飛び退くように背後へと下がり、ロアルドロスから距離を取る。

その際に額から伸びる提灯が微かに明滅すると、強い光が辺りを多い尽くしてしまう。

「……ッ!？」

発生した光に息を呑む間もなく、目を焼くそれに瞳を閉じてしまう。ハンターが投げる閃光玉と同じ力を持つその光こそ灯魚竜と呼ばれる所以。水草のようなひげを砂の下から出して揺らし、獲物を誘うだけでなく、この提灯を出して獲物を待つ場合もある。

獲物が近づいてきた時、この提灯から強い光を発生させて獲物を混乱させ、一気に丸呑みしてしまう。また捕食だけでなく身を守るためにも使われ、敵の視界を潰してその隙に逃げるか反撃に転じるのだ。

そう、今のように。

「ギユルオ……!?!」

何とか薄目を開けてチャナガブルの姿を探したロアルドロスの視界には、既に奴の姿はない。逃げたのか、とロアルドロスが唸りながら辺りを見回してみるが、チャナガブルは逃げを選択したのではない。

僅かにロアルドロスの近くの砂が動き、辺りを警戒しているロアルドロスの側面から喰らいつく。何とか反応したらしいロアルドロスだが、左肩を噛まれてしまい、少しバランスを崩してしまう。

しかしそれでも喰らいついてくるチャナガブルへとあの粘液を吐きだし、その顔へとまた付着させていった。目に張り付くその粘液に視界を潰され、チャナガブルはまたかぶりを振ってしまい、それによって肩に喰らいついていた口を離してしまった。

それを見計らって体を捻り、しなりを利かせた尻尾でチャナガブルの側面から叩きつけ、更に返すようにして顎をかちあげるように叩きつける。その連続攻撃にたまらずチャナガブルが悲鳴を漏らし、そこを逃さないようにロアルドロスが追撃を仕掛けていく。

だがチャナガブルとてただやられてばかりではなかった。

「グッ！」

身を守るかのように体を丸め始めたのだ。いや、ただ体を丸めるのではない、そのまま前転するかのような勢いだ。そしてロアルドロスの方へと背中が向いた瞬間、その背中から鋭い針が飛び出してきたのだ。

それは追撃を仕掛けようとしたロアルドロスの体へと突き刺さっていき、その針の多さと鋭さによって逆にロアルドロスが悲鳴を上げてチャナガブルから離れてしまった。

加えて前転した事で背中が続くように尻尾がロアルドロスの頭を

捉え、叩き落とされる。

その衝撃はロアルドロスよりも劣っているが、針によるダメージがあったロアルドロスは防御もなく攻撃を受けてしまった。

しかしチャナガブルも顔に粘液が付着したままのため前がよく見えていない。そのため追撃をしかけることなく、すぐに砂の中へと潜り込んでしまう。

ロアルドロスが顔を上げた時には既にチャナガブルの姿はなく、それだけでなく奴の気配もなくなっていた。

「グルルルル……」

小さく唸りながら辺りを一度見まわしてみるも、どうあってもチャナガブルの気配は捉えられなかった。離れた所で様子を窺っていたルドロス達が合流し、周りに浮き、沈んでいる死体達を見回すと、ロアルドロスは生き残ったルドロス達を率いて川の奥へと消えていく。

後には静けさが戻りつつある大河が残るが、そこには死体と血が浮かぶ光景へと変貌していた。

茉莉が焼いた肉、瑠璃が採ってきたキノコや果物、野草をはじめとする山菜、桐音が捕まえてきた川魚と簡単な食事の用意が出来る
と、手を合わせて早速いただいでいく。

小腹がすいた今、これらだけでも十分なエネルギー源となつてくれる。

捕ってきた川魚は塩焼きにされ、ほくほくとした身に塩が効いているため普通に食べられるのがいい。山菜に關しても瑠璃がきつちり食べられる物を見分けて採ってきたため安全だ。

それを食べ終え、ドリンクを飲み終えて一息ついた時、桐音のセンサーが一つの気配を捉える。しかしそれはかなり小さな物。気を配っていたとしても捉えきれないものは捉えきれない、という程にまで抑えられた気配。

それは川底を静かに移動しており、三人がいるという事は気づいているのかいなのかはわからない。だがそれはゆつたりと川底を進んでいき、やがて停止した。

「……どうやら来たようだぜ？　これほどまで抑えられた気配、来たのはチャナのようだな」

「チャナガブル、か。ちよつとめんどうだけど、来たからにはやらないといけないか」

食事を片付けるとナルガヘルムに付けているバイザーをおろし、懐からマスクを取り出して装着する。鞘に収めている火竜剣【火燐】を確認し、桐音と共に水中へと静かに身を沈ませる。

それに続くように茉莉が大河に入り、三人はゆつくりと川底へと向かっていく。

先ほどと変わらず、大河は穏やかな雰囲気を保っている。だがここにはチャナガブルが潜んでいる。一見すればこのどこかにチャナガブルが潜んでいるなんてわからないだろう。

実際視覚的にはどこに潜んでいるのか全く分からない。恐らくひげを砂の中から出しているのだろうが、どれがそのひげなのかかわからない。

ならば気配を探るしかない。

視線を巡らせ、気配を探ってみたところ数十メートル離れた所にいる事が判明した。こちらは位置を確認したが、あちらからはまだ気づいていないらしい。

「どつする？」

「……気づいていないなら、一つ提案があります」

「何？　なんか思いついた？」

「ええ。一度陸に上がりましょう」

「ん？　なんだい、上がるのかい？」

背中にあるヘビィディバイドに手をかけていた桐音が少し残念そうな声を漏らす。出鼻をくじかれたことに不満があるようだが、一応茉莉の提案を聞く気はあるようで、大人しく上へと上がっていった。

陸に上がった瑠璃と桐音は先にかかるうと声を掛けた茉莉に振り返る。先が上がっていったはずの彼女は何故か浅い場所を泳ぎ、何かを探しているかのようなだった。やがて彼女は何かを見つけたようで、手を伸ばしてそれを捕まえる。

そのまま陸へと上がると、バイザーとマスクを取ってポーチから長い棒を取り出していく。その先には糸と針があり、先ほど捕まえたものをその針に繋ぐ。

そう、その棒は釣竿だ。餌にするものを針に取り付けるだけで魚や魚竜種を釣り上げる事を可能としている。

その様子を見守っていた瑠璃はなるほど小さく頷いた。

「釣りカエル、か。確か凶鑑によればチャナはカエルが好物だったわね」

「ああ、なるほど。それで釣り上げてやるうってことかい。そしてそのまま陸上で仕留めていこうって魂胆ってわけだ」

「正解です。ただ水中で戦うよりはマシかと思ひましてね。あちら

もまだ私達に気づいていなかったようなので、この機を生かそうかと」

薄く微笑しながらカエルを大河に放り込み、その場へと座り込んだ。そんな茉莉を見ていた瑠璃は同じくカエルを探し始める。それに桐音も続き、それぞれ一匹ずつカエルを捕まえると、同じように釣竿を用意して針にカエルを取り付けると大河の中へと放り込む。後はこのカエルにチャナガブルが喰らいつくのを待つのみだ。その時までにはこうして文字通り座して待つのみ。

「……………」

誰も口を開く事はない。吹き抜ける風に身を任せているその様子は、まるで自然と一体になったかのようだ。

それが釣り。

獲物がかかるまでただ自然と一体になって待ち続ける。心を揺らさず、明鏡止水の心で静かにその時を待ち続ける。

「……………んー」

不意に桐音があぐらを少し解き、とんとんと膝を右手の指で叩き始めてしまう。どうやら集中力が途切れ始めたようだ。何となく察してはいたが、やはりというべきかじつと待つという事は性に合わないらしい。

ポーチの中からドリンクを用意すると、軽く口を含んで一息つく。少しだけ大河から離れ、ぬかるんでいない場所まで下がるところと横になってしまった。その様子をちらりと肩越しに確認した二人はすぐに視線を大河へと戻し、小さく揺れる水面を眺めるだけだ。桐音と同じく傍らにドリンクを用意し、それから数十分の間はこうして過ごす事になった。

「……む？」

そうして待ち続けた甲斐があり、不意に瑠璃の釣竿が揺れ始めた。それに気づいた茉莉が声を上げ、瑠璃もまた揺れる釣竿を見て反応して立ち上がる。

「ふっ、んんっ！」

リールを巻き、時折引つ張りながら少しずつ獲物を引き寄せていくと、水面に大きな影が浮かび始めた。それが見え始めたからと言って焦る事はない。焦って功を逃してしまえば奴は水中に留まったままになってしまふ。

だから瑠璃は焦ることなく着実に奴を釣り上げていった。

やがて勝負を決するタイミングを見つけた瑠璃はぐいつと釣竿を引き上げ、その力に従ってついに奴の姿が水上へと上げられてしまった。

「グボアアアアアアアアッ!？」

悲鳴を上げながら釣り針にひっかけられた口を広げたままチャナガブルは陸へと強制的にダイブしてしまう事になる。離れた所で寝転がっていた桐音もいつの間にか起き上って戦闘態勢に入っており、じたばたともがき続けているチャナガブルへと接近していた。

「はっ！」

抜き放ったヘビィディバイドを振り下ろし、横薙ぎに払いつつ剣モードへと切り替えて頭を殴り飛ばしてやる。そうして攻撃していく桐音に合流するように、瑠璃と茉莉も各々武器を抜いてチャナガ

ブルへと向かっていく。

「ふんっ！」

側面を通り抜けながら抜いた火竜剣【火燐】で腹を薙ぎ払っていき、切り裂かれた部分に追い打ちをかけるようにシャドウジャベリン改を突き出していく。傷ついた部分に毒を含んだ刃が突き入れられた痛みは相当の物だろう。

チャナガブルの声に悲痛な響きを感じられる。

だが攻撃の手はやめない。見ればその体は今傷ついた部分だけでなく、打撲と思われる傷があるし、顔にも何かが付着していた跡が見られる。

恐らくそれはロアルドロスとの戦闘痕だろう。これによって体力が減っているならば僥倖。その好機を逃さない訳にもいかない。

「グバアアアアアッ！」

しかしチャナガブルとただ大人しくやられ続けるわけでもない。ようやく体勢を立て直したチャナガブルはまず背中にある針を一斉に逆立てると側面にいる茉莉達を押し潰すかのように横に転がり始めた。

動きを察知した茉莉は盾を構えながら後ろへと下がるも、若干針が盾を掠めていくのを感じた。察知するのが遅れていれば針に貫かれながら押し潰されていただろう。その未来はひやりとするが、予備動作さえ見えていればなんてことはない。

「しっ、はあっ！」

転がり終えたところにすかさず両手で構えて高速の突きをお見舞いしていき、次々と毒を注入。背後から向こう側へと回り込んだ瑠

璃も火竜剣【火燐】を振るってダメージを与え、チャナガブルの正面を位置取った桐音はやはり剣モードにしたヘビィディバイドでその頭に刺激を与えていく。

完全に嵌った。

ガノトトスと違い、チャナガブルはほぼ魚に近い状態のために陸上ではこうして攻撃しやすい相手になる。一応四足のような小さなひれは持っているが、あくまでこれはおまけのようなもの。

陸上で歩く事は出来るが、奴の本領はやはり水中。陸上はほとんどの場合つられた魚のようにいいようにされ続けるだけだ。

「グボツ、グボツ！」

顔を振りながら抵抗し、目の前にいる桐音へとその大きな口を開けて噛みついていくが、冷静に見切つて躲し、カウンターを当てるように振り回したヘビィディバイドを叩き込む。

それは一方的な攻撃。

奴の領域から引きはがし、自分達の領域へと強制的に落とすだけで後は彼女達の実力の分だけの戦いとなる。いや、それはもはや戦いと呼べるものではないだろう。一方通行の戦いはもはや戦いと呼べない。

だから桐音はほとんど無表情に近いものでヘビィディバイドを機械的に振るっていた。

それでも小さな変化を見逃さないだけの意識はあった。目の前で揺れている提灯が微かに点滅し始めたのに気付くと、一旦距離を取りながら目を閉じる。

「閃光するぞ！」

同時に一言叫び、二人に注意を促してやる。

二人もまた目を閉じた瞬間、辺りを包み込む強い閃光が発生する。

ハンターが使用する閃光玉と同じ効果を持つ強い光は当然ハンターにも飛竜達にも通用する。これを使うチャナガブルにとっては意味のないものであるため、閃光玉は通用しない。
奴の足を止める方法はスタンか罠のみだ。

「グル、グツグ……」

三人が目を閉じたので攻撃の手がとまったのを感じてチャナガブルは転進し、大河に向かって走り出す。このまま陸上に留まれば身の危険が及び続ける事は奴にもわかつている。

そのため自分の領土である大河へと戻ろうという選択は間違っていない。
しかし相手が悪かった。

「……っ、そこですね！」

目を閉じながらも気配を辿ればどこにいるかぐらいはわかる程に成長した二人だ。茉莉が左手を伸ばして気を込めると、逃げるチャナガブルの前方を塞ぐように炎の壁が発生した。

「グボツ……!?!」

突如発生した炎に思わずチャナガブルは足を止めてしまう。それを狙って瑠璃は火竜剣【火燐】を薙ぐように振るい、刃から赤い気刃がチャナガブルへと向かっていく。

目を閉じているはずなのに狙いは正確だ。気刃は足を止めてしまっているチャナガブルの提灯へと向かっていき、額と提灯を繋ぐものを切断してしまう。

灯魚竜という代名詞である提灯を失いながらも、チャナガブルは何とか炎の壁を抜けて大河へと飛び込んでいく。

高い水音を立てて大河の中へと消えていくのを感じながら、閃光の影響で目を閉じていても少し闇の中でちかちかするのが収まっていき、ゆっくりと瞳を開けて大河を見つめる。

もう一度バイザーを下ろし、マスクをつけて準備完了すると逃げていったチャナガブルを追うように大河の中へと飛び込む。

ここで逃がすわけにはいかない。

陸上でのダメージは通用しているし、ヘビィデイバイドで十分に頭を揺らしてきたのだ。もう少しダメージを与えればスタン状態へと落とす事が出来るだろう。

このまま見逃し、泳がせ続けるのは愚策。奴の領域である水中だろうとも恐れず飛び込んでいく。

「グボボ……」

自分の後を追って飛び込んできた瑠璃達の水音に気づき、チャナガブルが振り返る。三人を順次に確認した奴は小さく唸り、体を震わせながらぱくぱくと口を開閉させる。

「グビィィィイツ！」

最後に大きく口を開けて威嚇すると同時に体を大きく膨らませ始めた。それに従って背中の針が逆立ち、それが引っ込まなくなってしまう。

これがチャナガブルが怒り状態へと移行した姿だ。少し平べったい体は背中が膨らんだことで楕円形に近くなり、針が常時出ている為、背中から攻めづらくなってくる。

それだけではなく、背中が膨らむことで強度が増している事も忘れてはならない。こういう場合、陸上ならば出来ない事が水中では可能になる。

それは下から攻める事だ。

水中は川底へと行かなければ上下左右と動き回る事が出来る。相手が川底へと行かなければ相手の下を取る事が可能なのだ。陸上ならば相手を斬る際に背中当たって弾かれそうになる可能性があるが、水中は上から、背後から攻めなければそれがなくなる。

さあ、いつ斬りこもうかと三人が様子を窺っていた時、チャナガブルは一気に川底へと沈んでいった。そのまま停滞する事なく、体を震わせて砂を掻き分けながらその中へと入っていき、砂と一体化してしまった。

そのまま逃げてしまふのかと思ったが気配は消えない。ゆっくりと川底を移動し始めたではないか。このまま固まっているといい標的になってしまふだろう。自然と三人は分散し、川底を見やりながら警戒する。

「グバアアアアアアアッ！！」

標的は桐音だった。突如川底から勢いよく飛び出し、その大きな口で桐音を丸呑みにしようとしてきた。それは普段なら十分奇襲になっていただろう。そうやって魚の群れを一気に丸呑みする攻撃なんだろうが、残念ながら位置や動きが気配で読める桐音達には通用しなかった。

「ふっ！」

ほんっ、と空気が弾ける音を響かせながら後方へと回転してその飛び出しから回避しつつ、更に回転した足から更に気の刃を放ちながらチャナガブルへと攻撃する事も忘れない。

気刃は上へと上がっていくチャナガブルの体と尻尾に命中し、それによって傷つきながらもチャナガブルは水上へと一旦上がり、激しい水音を立てながら水中へと帰ってくる。

背中から帰ってきたチャナガブルはすぐに体を回転させて体勢を

建て直し、我先にと向かってきた瑠璃を見やって噛みつきにかかった。

「ちっ……」

陸上ではこの状況でも慌てずに翼と身体能力を使ってクイックターンが出来るのだが、水中ではそれも出来なかった。広げている火竜剣【火燐】を一度ロングソードの形態へと閉じ、刃を口内へと突き入れるようにしながら一気に突き出す。

その際に気を送り込み、内包されている炎の力を膨らませる事で完全に口を閉じて火竜剣【火燐】を噛み千切る事がないようにした。実際突き出された火竜剣【火燐】を噛み千切ろうとしたチャナガブルはその熱さに思わず口を閉じずに開いてしまう。

「はっ！」

その隙を逃さずに火竜剣【火燐】を振り上げて顔を斬り、更に踏み込みながらも側面を位置取りつつ薙ぐ。そうやって気を引いている間に茉莉がチャナガブルの下へと潜り込み、がら空きになっている腹へと力強く抉り込むようにシャドウジャベリン改を突き出す。

何度かそれを繰り返すと、チャナガブルの腹の一部が変色し始める。既に送り込んでいた毒の影響もあり、ついにチャナガブルを毒状態へと貶める事が出来た。

「グボアツ!？」

体を巡る毒の痛みにチャナガブルが溜まらず呻き声を漏らしてしまった。そうして生まれた隙について桐音が一気に距離を詰めながら剣モードにしているヘビィディバイドを構え、溜めこんだ力を解放するように一気に球体を叩き込む。

ずんつ、と強くチャナガブルの顔が沈み、口元はだらしく開かれたままでその体がぴくぴくと痙攣し始めた。どうやらついにスタン状態へと落としてしまったようだ。

「一気に決めさせてもらう！」

強く振り下ろした事で勢いを殺さずに前転してしまった桐音はそのままチャナガブルの顎下まで沈んでいき、強く水を蹴って距離を詰めながらヘビィディバイドを突き出す。指は引き金へと当てられており、それを引き絞ればビンから粒子が一気に放出されて先端へと収束していく。

その度にヘビィディバイドは揺れ、しかし桐音の力によってしっかりと抑えられることで暴走する事はない。接触している顎に粒子の力がぶつけられる事で連続してダメージが与えられ、同時に凄まじい力が高められていく。

「破ッ！！」

臨界点を突破した瞬間、凄まじい爆発音を響かせてそれは弾け跳ぶ。黄緑色の粒子が爆発し、それはチャナガブルの顎に衝撃を与えて肉を抉り飛ばしてしまった。少し濁った水に細かな肉と赤い血が混ざりあい、スタン状態に陥っていたチャナガブルもたまらず激しい悲鳴を漏らしながらもがき始めた。

一方桐音は強い反動のせいで少しノックバックしながらもヘビィディバイドが持っていけないように両手で支えながら体勢を立て直す。スラッシュアックスの最大攻撃であるあのギミックを使用すると、強い反動と共に強制的に剣モードから斧モードへと切り替わる。

その反動はかなり強く、水中では抑えこまなければそのまま手から離れて吹き飛んでしまいかねない程だ。そしてその反動があるか

からこそ武器が痛み、連発する事は出来ない。

もちろん出来る事は出来るが、それは武器に無理させている事に同義だ。スラッシュアックスをメインとしているならば、長く使っていくためにも休ませてやらなければならない。

しかし桐音にとってヘビィディバイドはサブウエポンでしかない。好機ならばそれを逃さずに畳みかけていく。

「ふんっ、はあっ！」

抑えこんだヘビィディバイドをぎゅっ握りしめ、また水を蹴つてもがいているチャナガブルへと距離を詰めながら今も出血を続けている顎を薙ぎ払い、更に突き出して追い打ちをかけていく。

そうして攻撃を仕掛けながらガシャン、と剣モードへと切り替え、そう時間も経たない内からまた引き金を引いて粒子を先端へと集めていった。

「……ちっ、足りないな」

が、途中で何かに気づき、引き金から指を離して粒子の収束を止める。視線の先にはピンが内蔵されている部分の近くがある。そこにはちよつとしたギミックがあり、柄から若干突き出ている部分が存在している。それは時間の経過と共に動く仕組みになっており、それは剣モードの限界時間を示している。

剣モードはスラッシュアックスを巡っている粒子の残量によって決まり、一定の量を下回れば変形不可能になっているのだ。

そして今、ヘビィディバイドの剣モードの限界時間はもうギリギリの状態だ。このまま解放まで持っていきたいところだが、今まで経験の思い返して時間を逆算すると、解放する前に強制的に切り替わりそうだという事がわかった。

なので途中で引き金を離し、斧モードへと切り替えながら顎を穿

つよくに斬り上げつつ背後に下がる。すると離れていく桐音を追うかのように数度噛みつきにかかり、続けて前転して押し潰しながら針で貫こうとする。

しかしやはりそれを見切り、強く水を蹴りながら気の後押しもあってその範囲外へと逃げていく。そうやって桐音へと意識を向けていた事もあり、背後から追いかけていく瑠璃と茉莉には気づいていなかった。

「炎剣」

「魔槍」

十分に力を溜め、それぞれの武器へと己の気を纏わせた二人は足から気を放出させて一気に水中を弾丸のように突き抜けていく。硬くなっている背中をもともしないかのように二人は一気に得物の力を解放させた。

「翼雑撃！」
よくていげき

「気衝貫！」
きしゅうかん

背中を一気に雑く強い剣の衝撃。剣による鋭い一撃、その中から噴き出す強い灼熱の炎。硬くなっている背中を針もろとも切り裂いていき、その肉を内外問わずに焼き尽くす。そうして刻まれた傷を更に貫く茉莉の一撃。

シャドウジャベリン改の刃だけでなく刃の先に顕現させた気の刃をも含めて一気にチャナガブルの体内へと抉り込んでやる。水中であるうとも、気の放出によって推進力を得た事で茉莉の進撃は陸上で、いや、翼を使つての滑空速度に近い程までの速さとなった。

その上での貫く事のみ集中されたその一撃は一気に背中から腹近くまで抉り込まれ、内臓をも貫通してしまう程の威力を発揮した。

「グガ、ガガガ……ッ!？」

惜しむべきはそれが心臓ではなかった事だろうか。心臓を貫く一撃ならばこれで終わらせていただろうが、それが非常に残念だ。しかしそれでもこの二撃がチャナガブルにとって厳しい攻撃だったことは間違いない。

「グボツ、グゴゴ……ゴオオツ！」

体だけでなく尻尾も震わせながら追撃を仕掛けてくる茉莉と瑠璃を振り払い、何とか陸上へと逃げていった。まさかの逃げた先が陸上という事に驚きはしたが、ここで逃がすわけにもいかない。

すぐに陸へと上がったが、チャナガブルはよたよたとした動きながらも素早く走り去り、エリア3へと逃げていったのだ。あの短いひれのような足でよくあそこまで速く動けるものだ、と思わないでもないが、まんまと逃がしてしまった事に瑠璃と桐音がマスクの下で軽く舌打ちする。

「エリア3に逃げたという事は……恐らくそこから北へと進んでエリア8に向かっているのではないでしょうかね」

「エリア8……なるほど、ここは奴らにとっての休息地。体力回復を狙っているわけね」

「じゃあ先回りした方がいいんじゃないか？ 確かエリア1からそのエリア8へと行けるんだらう？ ここからエリア7に上がり、すぐに1へ、それから8って進むって具合にさ」

「ですね。森を走り抜ける事になりますが、問題ないでしょう？」
「当然」

バイザーを上げ、マスクを一旦取りながら三人は一気に走り出す。その際に茉莉が瑠璃が斬り落としたチャナガブルの提灯を取り、

ポーチの中へと入れるという抜け目なさが光る。

エリア7へと繋がる坂を駆けあげれば、その先にはちよつとした林の広場が存在している。ブルファンゴが数匹鼻を鳴らして歩き回っていたようだが、彼らが三人に気づいて地面を擦り始める頃には既に左折してエリア1へと駆け下りている所だった。

それほどまでに疾く駆け抜けるのは、チャナガブルが眠り始める前にエリア8に到達しようという意志の表れである。

大型のモンスターは休息、それも眠ることによって傷を癒す力を高める存在だ。当然体力も少しずつ回復させていき、数分もすればまた十分に暴れられるだけの体力を取り戻す事もざらではない。

それが人族とモンスターとの大きな差だ。

とはいえそんな彼らの高い生命力を引き継いでいるのが一部の魔族なのだが、これは今は置いておくとしてしよう。

坂を下りてエリア1へと戻ってくると、右手にあるちよつとした段差の方へと進んでいく。こちらもまた一つの森となっているが、その中に小道になっている部分があるのだ。その先に洞窟の入り口があり、それがエリア8となっている。

小道を見つけると段差に手を付けて一気に跳躍して飛び乗り、体勢を崩すことなくまた駆け抜けていく。するとすぐに小さな洞窟の入り口が見えてきた。

その中へと飛び込むと、右手が大きな崖になっている洞窟内部へとやってくることになる。

天井や壁からは鍾乳洞が生え、眼下には青く透き通った地底湖が広がっている。崖の下がすぐに地底湖になっているわけではなく、小さな凹凸がある硬い地面の陸部分が洞窟のおよそ三分の一ぐらいの比率になっているようだ。

残りが全て地底湖であり、ここから対角線状の向こうにはエリア6へと繋がっている。そしてチャナガブルがやってくるであろう道はここから右手の深部の水の道だろう。ここはチャナガブルらが利用する道であり、人の身では例えば水中装備をつけていたとしてもな

かなか抜けられない道となっている。

何はともあれチャナガブルはまだ来ていないようだ。

しかし、ここには先客がいたのだ。

「……ロアル、か」

地底湖前の陸地の片隅にロアルドロスが丸くなって眠っている。周りには数匹のルドロスが寄り添っており、同じように眠っているのだ。あの後一体どこにいつてしまったのかと思ったら、こんな所で眠っていたとは。

「もう少ししたらチャナが合流するだろうな。その前に仕留める……若干厳しいか」

「頭か心臓を狙ってやれば可能でしょうが……はてさて」

「可能性があるならやるしかないんじゃない？ 今なら奇襲を仕掛けられるんだし」

そう呟きながら瑠璃が畳まれている背中の翼を静かに広げていく。自分達ならば他のハンター達と違い完全に頭上を取っての奇襲が可能だ。くいつと道の先を示し、そこから飛び降りつつの頭上からの一撃をお見舞いする事が出来れば一撃必殺が成立するだろう。

瑠璃の視線はそう語っている。

ならば早いところ済ませた方がいいと、瑠璃と茉莉は揃って道を小走りに進んでいく。この道は洞窟の上に存在し、抜けた先にはエリア9の深い森の小道に出てくる事になる。

その出口付近まで来ると、茉莉がシャドウジャベリン改を抜きつつ刃の先に気を収束させていき、そつと崖の下を覗き見る。そこには相変わらず眠っているロアルドロス達がいる。まだ自分達に気づいた様子はない。

桐音の方を見れば、彼女は崖の上で静かに二人の様子を見守るだ

けだ。彼女が飛び降りれば小さなもの音を立てる事になるため、あそこで待機する事になっている。

「っー」

茉莉が翼を広げて飛び出し、一気に引いたシャドウジャベリン改をロアルドロスの脳天めがけて投擲。空を切って狙い狂わずロアルドロスの頭へと向かっていく矛先が奴の頭を貫くと誰もが疑わなかったその一撃。

だがロアルドロスは何かに気づいたように顔を動かし、刃はそのままたてがみと右目を貫くだけに留まった。

「ツツツ　　!?」

九死に一生を得たロアルドロスではあるが、その痛みにたまらず声にならない悲鳴を上げ、それは洞窟の中に響き渡っていく。

「なっ……気づいた!？」

「……いえ、私の攻撃に気づいたというより、あれが来る気配に気づいたというべきでしょう。戻れ」
カムバック

投擲したシャドウジャベリン改を戻すコードを呟きつつ、視線は地底湖の先を見据えている。その先にいるものに桐音も気づいたらしく、立ち上がって壁と聳え立つ岩を交互に飛び移りながら下りていき、バイザーを下ろしていた。

ロアルドロスはこのエリアにやって来たチャナガブルに気づいて目を覚ましたのだ。気配は隠されていても、奴が負傷したことで漏らしている血の匂いにも気づいたのだろうか。それが奴の命を繋ぐ要素になってしまった。

しかしそれも持って数分の命。

瑠璃も火竜剣【火燐】を鞘から抜きながら飛び出し、翼を畳んで一気に滑空しながら火竜剣【火燐】を構える。母親の花梨、姉の撫子直伝の高速滑空からの奇襲。

「ギョルルツ!？」

気づいた時にはもう遅い。間合いまで入ってきた瑠璃が振りかぶった火竜剣【火燐】の一撃はロアルドロスのたてがみもろとも首を切り裂き、頬、顎と袈裟斬りにしていった。

頸動脈を斬られたことで一気に血が噴き出し、黄色いたてがみを赤く染め上げていく。それだけでなく地面も赤い液体をぶちまけ、悲鳴を上げながらたたらを踏んでしまったところで茉莉からの追い打ちが仕掛けられる。潰された右目からも血を流し、残った左目で見上げた先には、無表情に自分を見下ろしながらも一気に距離を詰めてくる少女の姿。

その刃が視界いっぱいを覆い尽くしたのが、ロアルドロスが最後に見た光景だった。

「ギョル、ギョルルツ!？」

額からシャドウジャベリン改を生やし、力なく倒れ伏すロアルドロスを見て残ったロドロス達が慌てふためくように叫び声を上げる。そんなロドロス達を離れた所で着地した瑠璃が火竜剣【火燐】を軽く振って「散りなさい」と一言告げながら威嚇するように殺気を放つ。

それにあてられ、茉莉もシャドウジャベリン改をロアルドロスから抜き、回転させて血を払いながら軽く視線を巡らせる。それだけでロドロス達は数歩下がり、次々に地底湖へと飛び込んで逃げた。

最初の奇襲は失敗したが、こうして一匹は討伐できた。

残されたのはチャナガブルだがあちらはどうだろうか。そう思いながら地底湖の方へと視線を向けると、轟ッ！ と強い衝撃と共に爆発音と水音を炸裂させた瞬間だった。

どうやらヘビィディバイドの粒子爆発を使ったところだったらしい。少して青い地底湖に赤が浮かび上がっていく。

この地底湖は外の大河と違って水が透き通っている為に、ある程度は水中でもバイザーを使わなくても見える状態だ。陸上からでもある程度水中の様子が見える程であり、あそこで一体何が行われているかがわかる。

そして水中から凄まじい殺気と気の高まりを感じた瞬間、瑠璃と茉莉は信じられない光景を見る事になる。

ヘビィディバイドに強い反動がかかって強制的に斧モードへと変形される中、桐音はちらりと陸の方へと視線を向けた。一つの気配が消えていくのを感じたのだ。

(ロアルは死んだか。だったらあたかも終わらせてやるか)

粒子爆発によって額が抉れ、大量に血を噴き出している中でもチャナガブルはまだ死んでいない。だがもう瀕死状態だ。何とかここまで逃げてきたようだが、最早チャナガブルの命運は尽きていると言ってもいい。

変形が終わり、桐音は水を蹴ってチャナガブルの右側へと回り込みながら陸上を視界に収める。まずは一撃、ヘビィディバイドを突き出し、続けて薙ぎ払うように振りかぶりながら剣モードへと変形。それから一気に腕を引きながら力を溜めていく。

そうする中、マスクの下で小さくその言葉を紡いでいった。

「剛体。轟気、収束。一点突破」

ヘビィディバイドの先端に彼女の気が収束し、球体から突き出されてきた針が引っ込んでただの球体と化す。彼女の気の色なのだろうか、オレンジ色の光がヘビィディバイドを包み込んでいき、凄まじい力と輝きを放っていくではないか。

バイザーの下の碧眼は鋭く細められ、彼女の闘気が高まるにつれてその眼差しに冷たい殺気を宿らせていった。それに気づいたチャナガブルはびくりと体を震わせ、しかし負傷によって動けないでいる。

それはまさに、死刑執行を待つ罪人の如く。

執行人の刃は今、ここに放たれる。

「 剣術が一、王牙！」

そして、それはまさに普通ではありえない光景だった。

水中で放たれたその一撃はチャナガブルの腹を穿ち、それだけでなく先端に収束されていた彼女の気の解放の後押しもあり、チャナガブルの腹に風穴を開けながらその体を陸上へと吹き飛ばしてしまっただ。

「 ガ、バ……ツツ！？」

攻撃を受けたチャナガブルも何が起こったのか把握できていない。そうしたままチャナガブルは地面に叩きつけられながらその命の灯火を消してしまっ。

その様子を見ていた瑠璃と茉莉は固まるしか出来ない。

魚竜種の一角であるチャナガブルを吹き飛ばすだけの攻撃をただの人間が出来るというのだろうか？

いや、それを可能にしまった人物を知らない訳ではない。あの人は血統の僅かな後押しと積み重ねた鍛錬によってそれを可能に

してしまい、規格外な人をも驚かせるだけの力を見せつけてくれたわけだが、彼女はただの人間より少しだけ違っていたという背景があった。

それに今桐音がやったのは突き詰めればただの突き。

突きというシンプルな攻撃に己の気を纏わせ、更に自身を強化させて放った一撃だ。

でも、それだけであれを可能にする事が出来るのだろうか。

もしかするとあの草薙桐音という人物もまた、あの人のようにただの人間ではないのかもしれない。

「……仕留めたか」

転がっている死体を確認しながら水中から姿を現した桐音は軽く頭を振ってバイザー上げて二人の下へと歩み寄ってくる。そんな彼女をじっと見つめ、上から下まで値踏みするような視線を向けてしまうのも無理はないだろう。

それに気づいた彼女はやれやれと苦笑を浮かべてしまった。彼女自身もわかっている事らしい。

「なあに、ちょっとばかり本気を出したただだけだぜ？ 言っただろう？

あたいは色々剣を扱っている。……だから剣術を使ったっておかしくないじゃないか。あれはその剣術の一つさ」

「剣術、ねえ。一体どこの流派よ？」

「それは秘密さ。結構マイナーなものでね、言っても知らないだろうからね」

そう言いながら剥ぎ取りナイフを取り出してチャナガブルの死体へと向かっていく。少し気にはなったが、どうせ今回限りの付き合いだろうからとそれからは深く気にしない事にする。

彼女に続いて二人も剥ぎ取りナイフを取り出し、討伐した二頭の

素材を剥ぎ取っていく事にした。

こうしてボルシオ水没林による二頭討伐クエストは成功に終わる。使える素材を十分に剥ぎ取り終わると、真つ直ぐにベースキャンプへと向かってギルドアイルーへと成功の照明弾を放ち、死体回収を頼むと一時間の休憩を経て村へと戻っていったのだった。

灯魚竜と水獣（後書き）

こうして終わりを迎えました。が水中戦というのはやはり難しいですね。

いつもと勝手が違うため、どう書き進めればと悩ませてしまいました。

終わってみれば最終的にはあっけないもの。

三人の特徴を考えてみるとこうなってしまうが、どうやってもこの結末が浮かびます。翼をもっているのにわざわざ崖を降りて向かっていくというのもどうかと思いますし。

これがゲームと違うという事なのですが……今後の課題ですね。

そして最後に桐音が見せた一撃。

二人が浮かんだあの人と重なりますが、さて彼女はいったい何者なんでしょう。

また本当に今回限りの仲間になってしまうのか。

それは次回以降のお楽しみ。

街道開通（前書き）

水没林のクエストが終わった翌日。

封鎖されていた街道が開通され、瑠璃と茉莉は再びユクモ村へと旅立とうとしていた。

今回はその前の一幕。

桐音とはどうなるのか、それは今回で。

街道開通

闇の中に一人の人影があつた。その出で立ちは和服を着た剣士という風であり、得物である刀を構えながら闇の中を睨むように視線を一点に向けていた。

その表情は緊張しながらも戦意を失っていない。だが冷や汗を流しており、刀を握りしめている手が若干震えている。彼は恐れているのだ。

目の前にいる人物が何者であるかは知らない。しかしその人物がどういった存在なのかは予測がつく。

「貴様だな？ 巷を騒がせている辻斬りというのは」

その問いかけに答える事はなかった。ただ闇の中でじつと彼を睨み続けているだけらしい。一向に動く気配のないその存在を睨み続けているだけでは何も変わらない。

このままこう着状態になっても状況は変わる事はないだろう。

「ここで死ぬわけにはいかぬ！ 貴様を討ち、この連鎖を終わらせてくれよう！」

「……………」

一瞬で距離を詰め、手にした刀で相手を一太刀で斬り伏せようとしたようだが、刀は空を切る。黒装束を身に包んだ何者かは紙一重でそれを回避し、その手に持つ刀で斬り返してきた。

その素早い斬り返しは彼の胸を薄く斬り、その速さに少し顔をしかめてしまう。だが決定打にはならない。まだ戦いは始まったばかりだと突き、薙ぎ、袈裟斬りと連続して攻め立てていくが、どういうわけか相手はそれを読み切って回避を続けていた。

この暗い闇をものともしない視力。明らかに只者ではない。いや、只者ではないからこそ辻斬りを繰り返してきているのだろう。

ぎりつ、と歯噛みし、しかしすぐに冷静さを取り戻して静かな呼吸を繰り返しながら刀を構えた。地面と水平になるように刀を盾ながら体もそれに倣うようにして右向きへと変えていく。

その構えを見た相手は少しばかり様子を变化させた。どうやらこの構えが何であるかは知っているらしい。

「秘剣　　燕返し！」

それは三つの剣閃を同時に放つ殺人剣術。しかし始祖と違い、完全に同時に放つのではなくほぼ同時に放つ事で確実に相手を仕留める技だ。完全に構え、狙いを定めて放たれたこの技で敵を仕留めただろうと信じて疑わなかった彼ではあるが、その表情が驚きに彩られるのはそう時間がかからなかった。

「な、んだ……と!？」

間合いの中にいるためにそれらが命中しただろうに、しかし全ての剣閃は相手が振るった刃によって弾かれていた。神速に振るわれた刀から放たれた剣閃が三つの剣閃と相殺し、消し去ってしまったのだ。

長い時間をかけて磨き上げ、習得した秘剣すら通用しない。

その事実には彼は放心してしまう。

その隙をつき、敵は素早く攻撃の構えを取った。

まるで鏡合わせのように自分と同じ構えを取っていく敵に驚く間もなく、

「　　秘剣・燕返し」

淡々と放たれた言葉と共に三つの剣閃が彼を捉え、その一瞬の間に彼の命は消え去ってしまった。物言わぬ肉塊と成り果てた一人の剣士を見下ろし、軽く刀を振って鞘へと納めたその人物は小さく溜息をもらす。

そこに在るのは無感情。

高揚感もなければ戦いに勝った喜びもない。

「……つまらない」

本心でそう呟いているのだ。こうして辻斬りを繰り返してはいるが、どの戦いでもこの人物は満たされることはなかった。最初の頃はまだ楽しかった覚えがあるのに、一体いつからだろう。どんな敵でも機械的に得物を振るうようになってしまった。

「でも、ま。いずれ終わる、か。さて、次はどこに行こうかな」

ぼそぼそと呟きながら現れた時と同じように静かに闇の中へと消えていった。

それは、瑠璃達がボルシオ水没林から帰ってきたその日の夜に起こった出来事である。

ボルシオ水没林から帰ってきた翌日、瑠璃と茉莉は宿屋を出て酒場へと向かっていく。扉を開けて中に入ると、すぐに受付嬢が「おはようございます」と声を掛けてきた。

そんな彼女に近づき、「水没林の街道はどうなってる？」と瑠璃が問うと、

「はい、今朝方問題なしと判断され、街道は解放されていますよ。早くも旅人の皆さんが利用されていますよ」

酒場の客の大半はハンターのみであり、昨日までいた一般客は立ちの準備をしているのかここにはいなくなっていた。そしてハンター達の視線は瑠璃と茉莉に向けられている。

といつても不躰に見つめる眼差しではなく、ちらちらと様子を窺うかのような視線だ。

まさか本当にクエストを成功させてしまうとは思わなかったらしい。大層な自信を持ってクエストに望んだはいいが、失敗して戻ってくるんじゃないかと思っていたのがほとんどだったのだろう。

彼女達に出来るなら自分達でも出来たかもしれない、と思うものも中に入るんじゃないだろうか。

しかしそれを表だつて口にする者はいなかった。だからこうしてこそこそと視線を向けるしか出来ない。そんなところだろう。

何はともあれ無事に街道が使えるようになったならば何よりだ。

二人は一つの席に着いてお品書きを手に取り、朝食を注文する事にする。これを食べたならまた次の場所へと移動する予定である。

目的地であるユクモ村はまだまだ先にある。もしあの人達が温泉を利用してゐるならば、あるいは情報がそこにあるならば、と考えるだけでも早いところ向かいたい心境だった。

しばらくして料理が運ばれてき、手を合わせて「いただきます」と口にして食べ始めると、酒場の扉を開けて一人の客が中に入って

くる。ちらりと視線を向けると、そこには一人の女性がいた。

燃えるような炎のような紅いセミロングヘアに、同じく燃えるような真紅の瞳をしている。整った顔付きにすらりとした長身、そのプロポーションの良さは見る者を惹きつける美しさがあった。

美人、そう呼んでも差し支えない程の女性がこんな酒場へとやってくるとはどういう事だろう。

周りのハンター達も驚き、そして彼女の美しさに呆けたような表情で眺めていた。

そんな彼女の服装はやはり東方人らしく和服を着こなしていた。紺色の下地に夜空を描いた和服であり、その上に闇色の外套をなびかせていた。どうやら旅人らしい。恐らくこの先の水没林を抜ける前にここに立ち寄った、といったところだろうか。

彼女は一つの席に座るとお品書きを手にして何気なく視線を巡らせる。

「いらつしゃいませ」

ウエイトレスが彼女の下へと向かうと、お品書きを気だるげに指差して一言。

「ここから、ここまでを全部お願い」

「……………はい？」

一体彼女は何を言ったのだろうか？

ウエイトレスの少女だけでなく周りのハンター達も呆然とするしかない。

だが彼女はとんとん、とお品書きを叩き、

「だから、ここからここまでを全部。……………ああ、つまみもどつとくれくらいかな」

今、彼女が開いているページは飲み物が書かれている部分だ。そしてここは酒場。飲み物の大半は酒である。彼女は指を滑らせてその酒を一気に示しながら注文したらしい。

しかも追加としてつまみのページを開いてこれまた一気に注文。あれほどの美人がこんな朝っぱらから大酒食らいをするというのか？

そんな驚きがあったのだが、ウェイトレスは注文に応えなければならぬ。「か、かしこまりました」と一礼し、カウンターの向こうへと駆けこんでいく。

しばらくし、次々と注文したものが運ばれてくると、彼女は一本の瓶を開けてグラスへと注ぎ、一気に呑み干す。更につまみを口にし、どこか満足そうに頷いた。

多くのハンターが見守る中、ハイペースで呑み進め、つまみを口にしながら瓶を空にしていく様はほとんどの見物人の度肝を抜いただろう。

「……うわばみ、ですね」

「ありえないわ……」

一体あの体のどこにあれだけの量の酒が消えていったのだろう。

しかもあれだけ呑みながら酔っている気配がないというのはどういうわけだ？ アルコール度数が低いものから高いものを問わず呑み続けているのに、彼女の表情は入ってきたときからあまり変わっていないように思える。

いや、うつすらと赤くなっているようだがそれまでだ。言動におかしな様子もないし、意識もはっきりしている。

どれだけ酒に強いのだ、と問い詰めたいほどに呑み進める彼女は周りの視線など気にした様子もない。

とりあえずあの女性についてはもう気にしないでおくことにしよう。

う。今は朝食を食べないと。女性から視線を逸らし、黙々と朝食を進めていくと、また扉が開いて客が中に入ってくる。

「……ん？ おや、あんたたちかい」

「おー？ 桐音さんですか。おはようございます」

入ってきた客、桐音は二人に気づくと軽く手を挙げながら近づき、纏っていたローブを椅子に掛けると空いている席に座ってきた。ウエイトレスに注文をすると、彼女もまた離れた席で一気に酒を消耗していく女性に気づく。

「……なんだい、ありゃ」

「知らないわよ。あたし達に訊くな」

少し様子を窺うように見つめていた桐音だが、やがて深く気にしないようにしたらしく視線を二人へと向けた。

「ところで街道が開通したわけだけど、あんたたちはどこに向かうつもりだったんだ？」

「ユクモ村ですねー」

「ユクモだって？ これはまた奇遇だな。あたしもユクモに向かっていたところなのさ」

「……ふーん。一人であんな遠くまで向かうなんて、なかなかのものね」

ユクモ村まではまだまだ距離がある。普通はそれまでの距離を一人で行くこうなことは思わない。誰か知り合と一緒に、あるいは商隊に混ざって旅するのが通例だ。

それはやはり普通の人にとっては脅威となる飛竜らの存在があるからだろう。もちろん盗賊、野盗などという存在もいるのだが、や

はりモンスターという強大な敵がいるからこそ戦える者と一緒に旅をしないと危険なのだ。

そして例え力を持つ者といえども、一人で旅をするのは危険だ。長距離を旅するとなると体力の問題もあるだろう。だから二人は桐音が一人で長距離を旅するという事は驚きだった。

「そんな所まで一人で行くなんて、なんか訳ありなわけ？」

「そうだな、ちよいと人探しをされていてね」

「……………理由まで一緒ですか」

「ん？ なんだい、あんたたちも人探しか？ これはほんとに奇遇だな」

そこで注文したものが運ばれてきたため、一旦話を切ってそれを受け取り、「いただきます」と口にして少し食べ進める。その後お茶を飲み、

「あたいはクソ弟を探していてね、なんでもユクモ方面にそれらしき奴がいたって噂を聞いたもんだから向かっているのさ」

「クソ弟？ ……とりあえず、あんたの弟を探している、って事でいいの？」

「ああ、そうさ。で、あんたたちは誰を探してるんだ？」

「私達は知り合いですね。温泉で有名なユクモ村なら訪れた事があるんじゃないかという事と、情報源として有効ではないかという事で向かっています」

「なるほどね。温泉関係で狙っているという事は……………知り合いは東方人ってことか？」

温泉好きという点は東方人に多く見られる事だ。桐音も東方人というだけあって容易に推察する事が出来たらしい。

「しかし……人探してユクモ、か。どれだけ数奇な巡り合わせなんだろうね？ ……ん、どうだい？ ここはひとつ、一緒にユクモにでも行くかい？」

「……どうしてそうなるのよ」

「なに、東方にはこんな言葉があるのさ。旅は道連れ世は情けつてね。今まで一人でやって来たけど、ここで出会ったのも何かの縁。一回クエストを共にしたし、どうせなら一緒にどうかと思ってね」

一人より二人、二人より三人……仲間が多い方がいいというものも一理ある。それに東方人は縁を大事にする人が多いとも聞く。桐音の性格からして少し意外だったのだが、彼女もそういう事は大事にするようだ。

……本当に意外だ。瑠璃がそういう表情を見せてしまうのも無理はない。茉莉はその表情の変化の乏しさで誤魔化したようだ。

「……んー、でもさ、いきなり一緒に旅をするってのも……」

「なんだい？ 小さな旅はもうしただろ？」

「あれはクエストじゃないの」

「似たようなもんじゃないか。竜車で移動し、飯を食い、命を懸けて戦った。十分縁は出来ている。……それに、あたいはあんなたちに少し興味があるしね」

そこでにやり、と不敵な笑みを浮かべてみせる。鋭さを感じさせる碧眼がゆっくりと瑠璃、茉莉と交互に見やり、どこか観察するかのような眼差しをしていた。

そういえば桐音は戦闘狂の節があった。もしかすると彼女の興味とやらは二人の実力なのだろうか。味噌汁を飲み干してふう、と息をついて茉莉はお茶を手にながら小さく首を振った。

「興味を示してくれるのはよろしいですが、私達はそういう傾向は

ないもので、すみません」

「ん？ ああ、別にあんたたちと戦おうとかそう言う事はないさ。ただ……そう、色んな奴の戦いを見ていきたいってだけの話さ。瑠璃は長剣使い、茉莉は槍使い……しかも特殊な種族ときたもんだ。これはいい経験になるってものさ。興味が出るのも仕方ない事だろう？」

確かに有翼種は珍しい存在だ。そんな彼らの戦士ともなればその珍しさは跳ね上がる。

瞳の中に小さな炎が揺らめいている気がした。口では見ているだけといいながらも、本心では一回刃を交えたい、と思っっているのではないだろうか。

やれやれ、困った人に気に入られたか、と茉莉が考えた時、「なに、それは本当か！？」という大きな声が聞こえてきた。何事かと周りの客達がその方へと視線を向けると、それはハンターと一般人が混じった男達が座る席だった。

「今度は斑鳩飛翼流か……これで一体どれだけ殺られたんだ？」

「さあな……しかも殺されたのはある商隊の護衛に頼んだ人だつてよ。見回りに行った奴がその死体を見つけて判明したんだと」

「はあ、どうなってんだろうな……」

斑鳩飛翼流……確かあの人が使っていた流派であり、自己鍛錬で習得してしまった剣術だったか、と茉莉が思い出す。名前に鳥の名を冠する技が特徴で、速さと鋭さを売りとした技が多く、しかし同時にシンプルなものから高等技術まで多岐にわたるとか。

まさかの秘剣も取り入れ、それを習得できたものはごくわずか。その使い手の一人が死んだのだ。驚きに包まれるのも無理はない。

「んく、んく……」

驚きだけでなくまたかという雰囲気をした客もいれば、あの女性のように特に気にした様子もない客もいる。……彼女の場合はただ飲み食いしている事に夢中になっていてただけなのかもしれない。少しばかり気にはしたようだが、やはり今の彼女の興味は酒に向けられていた。

そして瑠璃達。

特に桐音はあの話聞いてまた瞳の中に炎を揺らめかせる。どうやら件の辻斬りにも興味が湧いたらしい。

「……本当に戦いが好きなのね、あんた」

「ああ。気づけばこうなってたね。……ま、しゃーないさね。昔っから色々やってきたもんだから、こうなるのは自然の摂理ってやつさ」

最後の白米を食べ終わると「ごちそうさま」と口にし、またしてもにやりと笑いながら軽く右手の指を鳴らしてみせる。その際腰の帯に差している小太刀がちらりと姿を見せた。

初めて出会った時と同じ、私服という事もあってその二振りの小太刀が彼女の主要の武器という事らしい。

「強い奴らとの戦い、それはあたいにとって血沸き肉踊り、心が満たされる事さ。緊迫した戦いこそ至高。そうでなくちゃつまらないってな」

「うわぁ……どっかで聞いたような話じゃない」

頭の中にかからからと笑う深緑の髪をした青年や金髪の青年の姿が思い出された。あとは……白髪の少女だろうか。いや、彼女の場合は……別のベクトルに向いているんだった。今ではそういう気配はなくなっているだろうが。

とりあえず桐音は戦いそのものに昂る派のようだ。特に実力者との戦いならばなおさらといった感じか。

「ま、そんなあたかも一人でやっていくのもどこか退屈になってきたのさ。そんな中でのあなたたちとの出会い、縁が生まれた。なんていうかね、あなたたちと一緒になら退屈しなくて済みそうかも考えているのさ。……どうだい？」

そうしてまた話が戻る。

じつと落ち着いた瞳が二人を見つめ、ただ静かに答えを待っていた。

「……………」

瑠璃がどうする？ と目で語っていた。彼女は先ほども言ったように反対方向なのだろう。なにせ自分達は特殊な種族であり、行方不明になっているあの人達を探しているのだが、その彼らは世間からすればお尋ね者に近い存在だ。

その事を知られてはめんどろなことになるのもまた事実。だからこそ二人は誰とも深く関わらずに過ごしてきたのだ。だから桐音の願いには応えられない。

結局どう考えても茉莉も同じように反対だった。

「残念ながら私もお断り……ですね」

「……そうかい、残念だねえ。ま、そこまで無理だって言うならこれ以上は言わないさ」

残ったお茶を飲み干すと立ち上がり、ローブを羽織ると自分の分の伝票を手にした。

「じゃ、またどっかで会える日を楽しみにしてるよ。……ま、同じ目的地だ。ユクモで会えるかもしれないけど」

「そうね。またどこかで会えたら、その時はよろしくしてもいいわよ?」

「はは、どこのアレだよ。じゃあな、お二人さん。また会ったらクエストするか、刃を交えようぜ?」

「前者はいいですが、後者は遠慮したいですねー」

「つれねーなー」とぼやきながらもまたにやりとした笑みを浮かべつつカウンターへと向かっていった。素早く会計を済ませ、軽く手を振って酒場を後にしていく。

それを見送ると自分達も既に食事を終えていたため、そう時間もかけずに二人もまた会計を済ませると酒場を後にするのだった。

宿屋に戻ってチェックアウトを済ませると竜小屋へと向かってまたアプトルをレンタルしていく。少し店主に訊いてみると、桐音はやはり一足早く旅立っていったようだ。

では自分達も彼女に追いつかない程度に進んでいくとしようか。そう思いながらアプトルを引いて外に出、またがろうとしたところで一人の女性がやってくる。見ると彼女は先ほど酒場でうわばみの如く酒を消費していた人だった。

彼女は二人に軽く視線を向け、薄く微笑を浮かべながら会釈してきた。そのまますれ違い、店主へと向かってアプトルレンタルについて話し始めた。そんな彼女を肩越しに振り返ってみると、闇色の外套の陰に隠れて見えづらかったが、腰元の帯に武器らしきものを差していた。

外套によつてその全てが見えないが、それが武器ではないかという事だけはわかる。どうやら彼女もまた戦う者だったらしい。

それはあの身のこなしで何となくわかるし、歩き方もどこか隙が

ない。

でも……どうでもいい。あの大酒食らいは驚いたが、所詮は他人だ。桐音と同じように深く気にするような相手じゃない。アプトルに騎乗すると手綱を握りしめ、ボルシオ水没林に向けて走らせ始めた。

さあ、次の町へと向かおう。

まだまだ旅はこれからだ。

つまらない。

今日もまた一人の使い手を斬り捨てる。確か今回は……天刃流だったか。それなりの実力だったけれど、それまでだった。この渴きを満たしてはくれない。

「つまらない、つまらない……」

ぶつぶつと呟きながら両手に顕現させていた武器を消し去り、月明かりもない森の中を歩いていく。光源のない深夜の森は視界が悪く、夜目が効いていたとしても遠くだけでなく近くも見えるかどうかも怪しい。

しかしその人物は木々にぶつからず、草に足を取られず、すいすいと歩き進めていく。

「ああ、残念。実に残念……いつになったら現れるんだろう」

どれだけ斬り捨てたか覚えていないくらい斬ってきた。というより数えるのも億劫だった。

それほどまで何者かは飢えていた。

己の心を昂らせる程の戦いに出会えていない。これは久しぶりに彼、あるいは彼女の下に行って死合いででしょうか？

そんな事を考えていると、森の奥から何かの気配が近づいてくるのを感じた。

「ヴルルルル……！」

闇の中に浮かぶ赤い光が二つ。

それはじつと木の上から何者かを見下ろしていた。その気配と視線に当然何者化も気づいており、その視線を受け止めた上で何も感じさせない瞳で見つめ返す。

「……ナルガ、か。ああ……うん、あの人と戦うつてのもいいか。

あの人なら十分満たしてくれる」

「ヴルルルルッ！」

威嚇するように唸り声を上げたその存在、迅竜ナルガクルガは何者かに向かつて一息に飛び降りながら右翼を振り上げ、鋭いその刃で切り裂こうとしてきた。

しかに何者かは冷静にそれを見切り、身を包むその布をなびかせながら風切音を感じながら両手を軽く広げる。すると何者かの気が両手に集まっガントレットていき、一つの武器を形成した。

それは一見すると籠手のようだった。だがその指の上部分に獣のような爪が三つ伸びている。金属で出来た籠手に刃が一体化したそれは、名づけるならば鉄甲爪だろうか。

躲されたところで今度は左翼で斬りかかってくるが、それを躲しつつ左手で受け流し、右手で突き出すようにナルガクルガへとカウンターを決める。

三つの爪がナルガクルガの頬へと突き刺さり、引き戻しながら薙ぎ、左手で追い打ちをかけたついで距離を取る。

「……しっ」

追いかけて来ようとしたナルガクルガへと右手を振りかぶれば、爪から気刃らしきものが放たれてナルガクルガに襲い掛かっていった。爪と同じく鋭さに特化したその気刃はナルガクルガの左翼を切り裂き、血を迸らせる。

「……旋風」

続けざまに左手を振りかぶれば、今度はつむじ風のようなものがナルガクルガへと襲い掛かった。自然現象のつむじ風と違い、それは相手を斬り裂くことに念を置いたもの。小さくともそれは敵を倒す技。ナルガクルガを通過する度にその鱗、皮を傷つけていった。

「グルアウ、グルオアアツ!？」

普通のハンターにはない攻撃にナルガクルガが戸惑った様子を見せたが、しかしそれで戦意がなくなっただけではないようだ。本来の戦い方をするように、闇の中へと一度姿を消す。

この暗闇の中に溶け込み、木々の間を素早く飛び移って得物をおく乱させ、死角から襲い掛かる。それがナルガクルガの狩猟だ。

何者かは一度構えを解き、自然体のままでその場に佇む。

ナルガクルガもまた気配を消し、自分の位置を悟らせずにいた。僅かに木の葉が揺れるような音を響かせているが、それも集中しな

いと聴こえない程に小さい。
それから数分間、何も起こらずに時が過ぎていく。

「ッ！」

刹那、背後の木から飛び出したナルガクルガが何者かの首から背中へと斬りかかっていった。完全に気配と音を消しての奇襲。見事なまでの狩りだ。

あの翼が振りかぶられた瞬間、何者かの首は体と別れを告げる事になるだろう。

だが、標的はその場からゆらりと消え去った。

「かげろふ
陽炎」

ナルガクルガは何が起こったのかわからなかった。自分の翼は何も捉えていなかったのだ。わかったのはただ翼が何者かを切り裂いた感触がなく、ゆらりと煙のようなものが静かに消えていく光景のみ。

そして気づけば、自分の首から勢いよく血が噴き出していたという事だけ。

「ガ、ガガ……」

声にならない呻き声を漏らし、ナルガクルガは静かに地に伏せる。いつの間にか首元から翼の方へとゆっくりと歩いていく姿がある。その両手にある鉄甲爪の刃は赤く滴る血液があり、軽く手を振って血を払って粒子へと還元させていく。

その一瞬の決着に何者かの実力が表れていた。だがフードに隠れている何者かの表情はやはり曇り模様。どうやら今の戦いでも満たされることはなかったようだ。

「……やっぱりあの人に付き合ってもらおう」

うん、そうしようという風に何度か頷くと、そのまま布を翻して闇の中へと消えていく。後にはじわじわと血を零し続けているナルガクルガの死体が残されるのだった。

怪奇事件の森（前書き）

次の舞台はとある山の森。

そこには何か潜んでいた。

そんな話を聞いた瑠璃は……。

怪奇事件の森

森の中を二人の男女が歩いていく。辺りを警戒するように歩く様子を包む防具に背中や腰に差している武器。一見して二人がハンターである事は明らかだった。

標的となる相手はこの先にいる気配がする。地図によれば確かあそこには川があつたはずだ。僅かに水音がするので間違いない。どうやら川の小魚を狙っているのだろう。奴にとっては食事の時間か。だが二人にとってはそれは好機。足音を立てず、気配を隠し、木々の間をすり抜けながら着実に敵へと距離を詰めていく。

油断さえしなければ恐れるに足らない存在だ。亜種とはいえ、かの存在はこの東方のハンターにとっての登竜門的な存在。

大丈夫だ、問題ない。

「……………」

しかし不穏な噂があるのもまた事実。

夕暮れも過ぎ去り、夜の帳が下りた時刻。月もまだ出ず、夜の森はひどく静かなものだ。視界は良好とはいえず、周りに気を配らなければいつ奇襲を受けてもおかしくない状況。

そんな中で敵となるのはモンスターだけではなかった。

巷を騒がせている辻斬りの存在が二人の心の片隅にあつたのだ。しかし辻斬りの標的はハンターではなく武人。ハンターが狙われる事はないだろう、と考えている者もいるが、この暗い森の中で行動するとどこか不安になってしまう。

それにハンターであろうとも剣術の流派を会得している者も少なくない。この二人もまた同様。剣術を習得しているため標的になる

可能性がある。それ故に辺りを警戒する際はモンスターだけでなく人の気配も探り続けている。

しかしそれでも この闇の中に紛れて動く存在を感知できていなかった。

「……………」

それは草むらを這うように動き、続けて木の幹を音も立てずに上り、枝の上に乗ると一息で他の木へと飛び移り、着実に距離を詰めていた。口から舌を出して軽く振るわせながら漆黒の瞳でじっと獲物を見据えているのだ。

奴もまた、この暗い森の中の狩人。^{ハンター}この森に溶け込む色合いをした体を持ち、気配と音を消す事に長け、この視界の悪さをもものも olmayan 目と感知能力を持つ。

それを駆使し、得物に気づかれずに忍び寄り、一気にその命を狩る。

今回もまたそれを行使するのみ。

やがて川のせせらぎが耳を澄まさずとも聞こえるようになった頃、ハンター二人は川のほとりにいる標的を視認した。さあ、いよいよ攻撃を仕掛けようか、と飛び出すタイミングを見計らっていた二人に一気に距離を詰め、

「ッ、グ…………ツ!？」

「えっ…………!？」

その体を貫くように両手を突き出して爪を抉り込ませた。鋭く伸びた爪は胸を貫通させ、しかも心臓を容赦なく抉っているため、最早二人に助かる未来はない。一体何が起こったのだ、と戸惑いを含んだ目をしながら、一体誰が自分達を殺したのかと男が肩越しに振り返る。

口から血を吐きだしつつ彼が見たものは、

「……シユルルル」

喜色を含んだ眼差しでじつと自分達を見下ろしながら舌を震わせる存在だった。

「な、なな……なぜ、ここに……」

この存在がいるなんて聞いていない、と言葉を続けようとしたが、それは体に爪を食い込ませたまま一気に口を開き、男の頭から喰らいついた。頭を守る防具もろとも噛み砕き、苦痛と悲痛に歪ませた男の命を完全に喰らいつくし、それが顔を離れた瞬間そこには何もなくなった。

あるのはただ、鮮血の噴水と言うオブジェ。それを間近で見ってしまったもう一人のハンターの女性は口から血を漏らしながらその整った顔を歪ませていく。

「い、いやあああああああ!?!」

森に悲痛な悲鳴が響き渡る。その声に気づいた二人の獲物だった存在は背後を振り返り、そこで起こっている出来事を認識する。自分達を狩るはずだった存在が狩られている光景、そしてその狩った存在を見ると、一鳴きして翼を羽ばたかさせてその場から退散していく。

それを追うようなことはせず、それは視線を女性へと向けた。

「ひっ……!」

女性も自分がもう助からないという事はわかっているだろう。し

かしそれでも体は緊張し、がちがちと歯を打ち鳴らして震えてしま
う。

そんな彼女にも容赦の欠片もなく頭から喰らいつき、先ほどの男
と同じように首を食い千切ってしまった。首があつた場所からやは
り勢いよく鮮血が噴き上がり、それすらも美味しそうに飲み干して
いく。

「シュルル」

その血は甘露のように美味であり、噴き出しつづけるその体に喰
らいつき、一気に血をすすりあげると今度はその柔らかい肉を頂く
ために口を大きく開けて丸呑みし始めた。身を包む装備すらやはり
ものともせず、そのまま足まで全て食べてしまう。

最後は男の体を食へ終え、血が滴る口元を軽く拭いつつ舐めとり、
川へと向かつてその水を飲み始める。奴にとつての夕食が終わり、
どこか満足そうにその場を立ち去ると、現場には血だまりが少し残
るだけ。……そう、二人の体は全てあの胃袋の中へと消えていった
ため、彼らの死体が残る事などなかった。

あれから一週間が過ぎた。ユクモ村まではあと半分ほどの距離を
進むことになる。山を越え、丘を越え、谷を越え……アプトルを乗
り換えて豊かな自然の中を駆け抜けてきた。

現在は一つの町で休息を取っており、昼食を頂きながら周りの客の話に耳を傾けて情報を得ようとしているところだ。
すると気になる話が耳に入ってくる。

「またやられたらしいな」

「いったいどうなっているんだろうな、あの森……」

「ハンターがやられ続ける事三件、『帰ってこないから調べてくる』と言った奴も帰ってこず、辻斬りでも現れたのかと噂になり、『そんな奴がどうしてハンターを狙ってくるんだ？ いるはずがない』と言った奴も帰ってこない……。どうかしてやがるぜ」

話を聞いていくとこんな事が最近起こっているらしい。

この先にある森には以前から奇妙な事が起こっているそうだ。あの森には元々様々なモンスターが生息し、最近はりオレイアやクルペッコ、クルペッコ亜種、ロアルドロスなどといったモンスターのクエストが張られ、消費されていった。

だがどういいうわけかこれらのクエストに向かっていったハンターが帰ってこないという事件が起こり始めたという。当然帰ってこないならばなにかが起こったのだろうと調査隊が派遣されるが、ハンターは見つからず、またどういいうわけか調査隊の一部も行方不明になってしまった。

同じように独自に調べに行った者もいなくなり、これはいよいよ何かがあそこにいるのではないかという結論になったのだが、次々と手練れの者がいなくなるというだけあってあの森に向かおうという気は起こらなくなっている。

しかしあそこにいる飛竜らの存在の事もあり、クエストは今もなおはられ続け、運がいいものは何も起こらずに普通にクエストを完遂させて戻ってくる。そんな運のいい者らの話によれば、あそこになにかがあるかどうかはわからなかったそうだ。

つまり、一体何が起こっているのかは不明。

そのため解決の兆しは見えてこない。

誰か実力ある者に頼むしかないのだが、こんな田舎にそのような人物が来るのかどうか怪しい。

道筋はただ一つ。

ギルド支部からギルドナイトに調査依頼を出す事のみだった。だが来るとしても時間がかかるのもまたネック。ロックラックにあるギルド支部、または東方のシキ国、ヤマト国にあるギルド支部に所属するギルドナイトを呼ぶ事になるだろうが、かかる時間は早くで一週間以上。

アプトルを使ってこれなのだから、ここがどれだけ田舎かわかるというもの。

また最近は辻斬りが発生し、地方でも新たに確認されたモンスターの一件もあつてギルドナイトがそちらに駆り出されている。つまり人がそちらに回され、田舎の事件に回す人材が限られている。

なのでギルドナイトに依頼しても、来てくれるかはわからない。来てくれたとしても時間がかかる。更に言えば来てくれたギルドナイトが本当にこの事件を解決してくれるかの保証もない。確率は高いたろうが、確実とは言えないのだ。

「謎の死、か。普通に考えれば観測されていない何かがその森にいるって事でいいのよね」

「でしょうね。死体が見つからないのもその何かが食べてしまった、と考えればいいでしょう。……ですが、その何かかわからないというのが問題ですね。飛竜なのか、牙獣なのか、あるいはまた別の何かか……」

森の中なので挙げられるのはこの二種だろう。鳥竜種は攻撃的な存在が少ないし、いたとしても東方にそれが生息している地域は少ない。黒狼鳥イャンガルガが有力だが、奴の場合殺しはしてもその死体を全部食べ尽くすというのは考えづらい。

なので考えられるのは飛竜種か牙獣種となる。

他にも獣竜種が考えられるのだが……その中で一番考えられるアレが出現したとなれば大騒ぎだ。その報告がないのでアレは現れていないだろう。

「それで？ クエストがあれば参戦するつもりで？」

「あれば、の話だけれどね。ユクモ村に行く途中だけれど、こんな気になる話があったら、食いついちゃうでしょ？」

「それは瑠璃だけですわね。私はどちらでもいいので」

「あ、そう……。でも、この事件を解決していく事であたし達は強くなれる、ここの人達も喜ぶ。一石二鳥よ」

「ま、そうですね。じゃあ少し見てみましょうかね」

立ち上がって壁際にあるクエストボードに向かってみる。そこに張られているのは三つの依頼書。

青熊獣アオアシラ討伐。

紅彩鳥クルペッコ亜種討伐。

謎の存在の討伐。

なるほど、確認されている中で討伐対象になっているのはアオアシラとクルペッコ亜種という事らしい。アオアシラは今の二人ならば問題なく討伐できるだろうが、クルペッコ亜種は少々厄介だろうか。

彩鳥クルペッコは東方のハンターにとっての飛竜の登竜門として知られている。西方のイヤクックと同じく鳥竜種であり、飛竜の動きの基礎をこのモンスターで覚えるハンターが多いのだ。

独特の鳴き声を駆使して自分の力を上昇させたり、鳴き真似で他のモンスターを呼び寄せたりとイヤクックとは違ってその辺りがやり辛いのの特徴ではあるが。

そしてそのクルペッコの亜種が紅彩鳥。翼にある火打石が電気石に変化し、その体色もまた紅を基準としたものになっている。

また呼び寄せるモンスターも原種と違って強力なものが多いという報告をよく耳にしているとのこと。

つまりただの亜種だと思って油断しているとやられかねない相手なのだ。

しかし問題ない。

茉莉が張られている物を瑠璃へと報告すると、なるほど小さく頷いて「じゃ、ペッコ亜種にでも行こうか」と提案した。

すると、近くにいた客の青年が二人の話を聞いていたのか声を掛けてくる。

「君達、まさか件の森に行こうっていうのかい？」

「ん？ そうだけど？」

「何を言っているんだい、やめなよ。死ぬつもりかい？」

「そうだな。クエストを受けるってことはハンターのようだが、この件はやめておけ。命は投げ捨てるものじゃない」

「あたし達だってこんな所で目的も果たさずに死ぬつもりはないわよ。でも、ここで困っている人がいるってんなら、見過ごせないだけ」

「……………」

そう言う瑠璃の瞳に怯えの色はない。姉のその姿と言葉に茉莉は彼らの姿を思い出した。

いつだって困っている人のためならば手を差し伸べていくあの兄弟の姿。一、二年だったが一緒に暮らした村に暮らし、そういう彼らの背中与武勇伝を聞いてきたのだ。

母親を目標としているが、その心境にあの兄弟のまっすぐな姿の影響を受けない、なんてことがあるわけもない。あの村にひっそりと暮らしていても、兄弟は今もなお歪まずに彼らの両親の背中を追

い続けている。

そんな姿が眩しくて、だからこそ恐れ、尊敬できる先輩だと思える。

（経験を積むため、とは言っているようですが……本当はそういう事でしょうね。ふふ、先日の事も恐らくはその志があったからこそ引き受けたのかもしれないね）

クエストをやってみたいと言いだしたのは瑠璃だ。茉莉はそれに頷いただけ。昔から何かと口は悪いし、はねつかえりだった少女だったが、その根本では誰かを想う気持ちがある。あの兄弟の影響と心身の成長で誰に対しても口が悪いというのは改善されてきているのは喜ばしい事だ。

「しかしもう何人も帰ってこない人達がいるんだ。考えたくもないが彼らは……君達もその後が続くというのかい？」

「話によればギルドナイトに連絡がいったそうだ。君達が行く必要なんてない」

「年頃の女の子が無茶をするものじゃないよ。ここは他のハンター達、特にギルドナイトに任せた方がいい」

「……生憎だけど、それは断るわ。それにアタシたちだってハンター、それも上位よ。経験も積んでいるし、あたし達二人なら大抵の事は乗り越えてきた。そうでしょ、茉莉？」

「そうですね。私達のコンビならば何とかかりますよ。瑠璃の斬りこみはなかなかのものですからねーそれはもう、猪のように猪突猛进にバカみたいにまっすぐで……」

「だれが猪だツ！？ っていうか、それじゃあたしが脳筋みたいじゃないのよ！」

「え？」

「おい、なんだその顔は」

うがーっと吼える瑠璃に何をわかりきった事を……といった風な表情を見せる茉莉だが、こういうのはいつもの事。吼えた後に急にテンションを上げてツッコミを入れるいつもの漫才に男達は呆ける。この二人に恐怖というものはないのか？

漫才をするだけの余裕を見せる二人は本当に自然体だ。謎の存在に恐れている様子なんて見られない。それが男達には信じられなかった。

「君達……怖くないのか？」

「怖い？ ……そうね、多少は怖いわよ？ 当然じゃない、生き物なんだから。わけのわからない奴を相手にするし、命を懸ける戦いに赴くんだから怖くないわけじゃないじゃない」

「じゃあ……どうして」

「ハンターはいつだって命を懸けている。今更の事よ。それにさっきも言ったでしょ？」

そこで瑠璃はふつと不敵な笑みを浮かべながら目を閉じ、そして不敵な笑みは綺麗な笑顔へと変化していった。

「困っている人がいて、あたし達が戦う事で救われるって言うんなら、やってやるうじゃない」

それはとても眩しい。

止めなければならぬ、とわかっていても男達は何も言えなくなってしまう。

そんな瑠璃に茉莉はやれやれと小さく首を振りながらもその口元は小さく緩んでいる。なんだかんだ言っただけで弄つても瑠璃の事は好きなのだ。そんな彼女を自分は支え続けるのみ。

「じゃ、クエスト受注に行ってくるわ」

軽く手を振ってカウンターへと向かっていく瑠璃を見送り、茉莉は同じように瑠璃を見送っていった男達に振り返る。

観察すれば彼らもまたハンターか普通の戦士かわからないが、戦う者だという事がわかる。忠告したのはやはり同じ戦う者としてのものだろう。二人の実力を完全に読み取っているわけではないようだが、それでも戦場へと向かおうとする二人を止めるのは無意味に命を散らす事はないとわかっているからだ。

勝てる戦いならば何も言わないだろうが、勝てるかどうか怪しいものに挑むのは愚かだ。ましてやそれが年頃の女ならばなおさら。止めたくなるのもわかる。

だが二人の……瑠璃の意志は固い。あれはやると決めたらことんやる。まさに猪突猛進……いや、一回弄ったからやめておこつ。

「なに、気にする事はないですよー」

「……しかしだね」

硬い表情を見せる男達に気楽に声を掛ける茉莉であったが、それでも男達の表情は晴れない。何度大丈夫だ、といっても無駄だろう。二人が若い女という事もあるし、もう何人も行方不明になっているという事実もある。

彼らが安心できるとすれば、それはその謎の存在を討伐できたという結果のみ。

要は勝てればいいのだ。

しかしそれが難しい。情報も何もあつたものではないのだから対策のしようがない。二人に出来るのは己の実力と武器を信じる事だけだ。

「あなた達はここで吉報を待つといいですよ。では、これにて」

ペこりと一礼し、受付嬢と話をしている瑠璃の下へと向かっていった。既にクエスト受注云々について話しており、今出ているもの全てを汲み込んだ話に発展してしまっている。

「クルペッコ亜種、アオアシラ、そして謎の存在……纏めてくれな
いかしら？」

「纏める、ですか」

「そう。謎の存在の討伐はもちろんだけど、その他にも討伐するべき存在がいるようじゃない。あたし達はそいつが本命だけど、見つかるとは限らない。だから他の奴らもやるうって考えてるの。メイ
ンに謎の存在、サブとして他の二頭。これはクルペッコ亜種がアオ
アシラを呼び寄せる可能性があるから、って事でどう？」

見つからないまま帰ってくる、なんて事がないように現在出ているクエストの対象になっている物をサブに据え、三つのクエストを同時処理しようという話らしい。

瑠璃の言う通りクルペッコ亜種の鳴き真似でアオアシラが出てくる可能性も捨てきれないため、クルペッコ亜種を優先的に探すという方向でも問題ない。

クルペッコ亜種らとの遭遇、謎の存在との遭遇、どちらの状況になったとしても問題がないようにこの提案をしているというわけだ。しかし受付嬢もやってきた二人を交互に見つめて不安そうな表情をしている。彼女もまた二人にこのクエストをこなす事が出来るのかと疑問に感じているのだ。

「ほら」

そんな彼女に瑠璃は懐から取り出したギルドカードを見せてやる。それに続くように茉莉もギルドカードを取り出した。それを受付嬢

に手渡し、彼女はそれらを確認する。

そこにあるのは上位の証であるマークと二人の名前。上位と下位のクエストを行き来しているが、二人は間違いなく上位ハンターなのだ。

下位と上位にはただ上下で分けられる程の差ではない。モンスターの個体、その内包する力と実力に応じてランクづけられ、同時に危険度も跳ね上がる。

それは下位ハンターが上位になって初めて上位クエストでクエストに挑み、失敗するのがほぼ半分という統計結果が示している。

それだけ上位と下位とはハンター達が思う以上の差がある。

それを上位の前半ものとはいえ、多くクリアしている二人の記録を見た受付嬢は無言になり、少し上目づかいにもう一度二人を交互に見た。

「……本当に、行くのですか？」

「ええ」

「……………わかりました」

ギルドカードを返し、引き出しから書類を取り出してペンを走らせていった。その様子を静かに見守り、数分後にはそこには依頼書が完成する。

謎の存在の討伐依頼。

メインターゲット：謎の存在。

サブターゲット：クルペッコ亜種、アオアシラ。

ロープの使用許可。

制限時間：五十時間。

ロープの使用許可が出た。謎の存在がどのようなモンスターなの

かわからないため、装備を限定するのもなんだろう。緊急時に切り替える事が出来るというなら喜ばしい事だ。

制限時間があるが内容に問題はない。

この五十時間というのもクエストの基本時間だ。今回もそれを採用したらしい。もちろんこれを超えればクエスト失敗、そのまま一度帰還する事になる。

しかし問題ない。

二日もあればなんとかなるだろう、たぶん。

内容を確認した二人はそれにサインし、受付嬢がそれを確認して判を押す。これでクエスト受注が完了した。

後は準備を整えて戦場へと向かうのみ。

竜車に乗って件の森の中に入り、ベースキャンプのエリアまでやって来たときにはもう二時間が経過していた。テントを張り、支給品ボックスを用意するとローブからそれぞれ武器を取り出し、コンパクトに纏めて肩にかける。

今回二人がメインで使用するのはこの二つ。

瑠璃はヒドウンサーベル。彼女がメインで使用する無属性の武器であり、ナルガクルガの素材を使用して高い切れ味を誇っている。

茉莉はインペリアルガーダー。ヒドウンサーベルと同じく無属性の武器であり、良質の鉱石を主に使用して切れ味を高めていったガンランスだ。

ローブを持っていく事を許可されてはいるが、どんな相手でも手に出来る凡庸性を持つ無属性の武器ならばクルペッコ亜種を相手にしている際にメインの標的が現れたとしても対応可能だ。

「さて、確認しましょうか。今出ている情報ですと、クルペッコ亜

種は森の奥にある川、または上の方にある丘付近で確認され、アオシラは森の中心に確認されているとの事です。どちらもランクとしては上位個体。なかなかのもですねー」

「上位個体、か。ふーん、相手にとつて不足はないわね」

「そしてこの森で犠牲になったのはもう十人以上。男も女も関係なしですね。ハンター、いなくなった人を探しに行った人、果てはこの森を通過しようとしたと思われる旅人も犠牲者ですね」

「旅人はどうしてわかったのよ？」

「あの町からこの森を通過し、この先にある町へと向かおうとした人達がいたそうですね。調査の結果、その町にその人達がやって来たという事実はない。ここでいなくなってしまったのではないかという結論になったようです」

その手に持っている書類はあの町で集めた情報だ。それを竜車の中で纏め、改めて確認する。こういう作業は茉莉の役割の一つ。後ろで支えていく事を主としている茉莉ならではの事だった。

しかしサブの二種がどちらも上位とは驚きだ。

アオアシラは新米ハンターが相手にする事が多い牙獣種の一つであり、見た目は大きな熊と相違ない。種族名にも青熊獣とあり、見たままの通りだ。

森の中で暮らすモンスターであり、ハチミツを好物としているためハチミツを求めて森を歩いたりハチミツを持つ人を襲っていくという報告がある。

強靱な甲殻が覆われている前足に生える爪で獲物や敵を斬り裂き、その重い体で押し潰したりすることで攻撃を仕掛けていく。

だがその動きは読みやすく、新米ハンターが狩りの仕方を覚える相手としてよく知られている。アオアシラで動きと狩りというものを知り、クルペッコで飛竜との相手の仕方を覚える、といった具合で東方のハンターは成長していくのだ。

下位だったならばすぐに討伐する事が出来たろうが、上位ならば

そうでもなくなりそうだ。

「それで、どちらから処理していくのです？」

「どっちでもいいんだけど……まずはやっかいなペッコ亜種から行きましょうか」

「わかりました。では」

取り出した武器を背負い、二人は森の中へと入っていく。

これまで立ち入った者達の大半を行方不明　恐らく命を奪っていった魔の森。

森には時折魔物が潜むと言われているが、この森もそうなのだろう。

二人はこれからその魔物へと挑む。立ち入った者ら全てを喰らってきた魔物へと。

果たしてその魔物の正体は何なのか。そしてその魔物とどこまで戦えるのか。

今、ここに戦場が成立する。

怪奇事件の森（後書き）

次なる標的は新種……つまりはオリジナルです。

そしてもうすぐ3Gが出ますね。

恐らく私は初日には買えないかもしれませんが。というより、それ以前に3DSがないという。

あれに出てくる新たな亜種や初号機をここに登場させるにはやってみるしかないのですが……いつになるかわかりませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3041y/>

モンスターハンター ~集いし者達と白き龍神~

2011年12月2日00時52分発行